文部科学省特別経費（国立大学機能強化分）

「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」

平成28年度「学生海外派遣」プログラム報告集

学生海外調査研究

国立大学法人 お茶の水女子大学

グローバルリーダーシップ研究所

平成 29 年 3 月 31 日

平成 28 年度「学生海外派遣」プログラム報告書　目次

タイトル	派遣者名		報告書	英文要旨
19 世紀後半パリの区庁舎装飾画における「人生の諸段階」主題	原田 佳織	…	1	55
ヨアヒム･ラフの 1850 年代から 70 年代の活動状況を中心とする現地資料調査	倉脇 雅子	…	8	56
日本統治期台湾に設けられた高等女学校に関する資料調査 ー台湾東部を中心にー	滝澤 佳奈枝	…	14	57
G.V.ローシーの在日以前の活動とその背景に関わる史資料収集	山田 小夜歌	…	19	58
20 世紀のエキュメニカル運動におけるパラダイム転換に関する資料調査	前村 絵理	…	25	59
明治期における日独通商・外交の研究	松居 宏枝	…	30	60
19 世紀末フランスにおける女性画家にとってのヌード作品の位置づけ：ベルト・モリゾ《横たわる裸の羊飼いの少女》を通じて	川口 裕加子	…	36	61
中国人若年層の性別役割分業意識及びワークライフバランスの実態について	田 媛	…	44	62
ニジンスキーとその振付作品に関する一次資料の収集	佐藤 真知子	…	49	63

学生海外調査研究	
19 世紀後半パリの区庁舎装飾画における「人生の諸段階」主題	
氏名　原田　佳織	比較社会文化学専攻
期間	2016 年 12 月 11 日～2016 年 12 月 19 日
場所	パリ（フランス）
施設	プティ・パレ（パリ市立美術館）資料室、パリ古文書館、ウジェーヌ・カリエール美術館、フランス国立図書館、オルセー美術館資料室

内容報告

1. 研究概要

1.1 研究背景

報告者はこれまで 19 世紀末フランスの美術における象徴主義の傾向に目を向けるなかで、同時期の装飾画にみられる「人生の諸段階」（*les âges de la vie*）の主題に関心を抱いてきた。人間の生涯を数段階に分割して各年代の特徴を表す、この西洋美術に伝統的な主題は、19 世紀末西欧の美術において、しばしば連作やフリーズの形態を伴いながら流行した [1]。従来こうした作例は、世紀末美術に関する研究により、象徴主義の視点のもとで言及され、文学や音楽など様々な芸術にわたってこの時代に展開された「生命の循環」の考え方と結びつけられてきた [2]。その一方で、フランスの公共装飾画中に見いだせる作例については、第三共和政初期の美術行政や公的注文に関する研究のなかで少し触れられるにとどまっており、同時にそれらが、美術館を中心とした一般の鑑賞の対象から逸れてきたことも指摘できる [3]。しかし、これらの装飾画は、同時期の美術において「人生の諸段階」主題がどのような表出の仕方をしたのかを考えるうえで欠かせない作例である。実際、受容の側面から考えると、当時の区庁舎装飾画注文の過程で、その下絵などは、完成作の庁舎への設置前にサロンにて公の目に触れ、審査を受けており、同時代の他の画家や批評家に対して影響を及ぼし得る、重要な作品であった。

パリ市に提出された、こうした装飾画の下絵を現在所蔵するプティ・パレ（パリ市立美術館）は、第三共和政の公共装飾事業を見直す動きのなかで、1986 年に *Triomphe des mairies*（「区庁舎の勝利」）と題する展覧会を開き、パリ市庁舎内部の装飾画とともに、パリとその周囲の地域の区庁舎装飾画について、それらの注文から同時代の受容までに関する一次資料の調査にもとづいた基礎的研究の成果を公開している [4]。

この成果とプティ・パレ所蔵の下絵をもとにした事前調査において、本研究では、これらの区庁舎装飾画のなかに「人生の諸段階」と関わる作品が数十点みつかること、またその多くが婚姻の間装飾であったことに着目した。第三共和政初期に装飾された、これらの区庁舎が当時、世俗の生活様式のなかの祝祭の場として機能し、その装飾画が市民精神の高揚という目的を有したことを考慮すると、「人生の諸段階」主題の装飾画は、宗教的儀式に代わる新たな世俗的挙行の場のためという理念のもとで描かれたことが推察される。先行研究によって、第三共和政期の装飾画にみられる寓意が人々の生活とその実感に接近してゆく点や、宗教に代わる新たな倫理としての市民精神の寓意が描かれた点は指摘されている [5]。しかし、本調査のコーパスをなす作品において、主題の扱い方は多岐にわたっており、季節や一日の時間と重ね合わせて寓意的に表すものや、結婚や家族、仕事というテーマとの関連、さらに共和国やそのもとでの市民生活の理念をより直截に示したものなど様々である。また、先述の展覧会時に扱われた区庁舎装飾画は全体の一部分であったため、まず対象装飾画について一次資料の調査と収集を現地の資料室で行う必要がある。

本研究では、こうした装飾画の主題のあり方を同時代に位置づけることを目標とし、それらが、装飾画コンクールと公的注文の際に如何にして選択され、当時の人々にどのように受容されたのかを明らかにしてゆくことを目指す。なお今回の海外調査では、主にコンクールと注文の側面から資料収集を試みた。

1.2 調査内容

上記の目的のために本調査では、パリの古文書館を中心として、次の 5 つの施設において文献および図像資料の収集を行った。
まずプティ・パレ（パリ市立美術館）資料室（Centre de ressources documentaires, Petit Palais, Musée des Beaux-Arts de la Ville de Paris）では、先に述べた 1986 年の *Le triomphe des mairies*（区庁舎の勝利）展のアーカイヴと、同館の所蔵する装飾画下絵の関連資料を予約のうえで閲覧し、装飾画の注文やコンクール実施に関わる、一部の一次資料や作品図版を調査した。次にパリ古文書館（Archives de Paris）において、事前に担当者からメールで送付していただいた目録から選択し、パリ市とその周辺区域の区庁舎装飾事業のアーカイヴを閲覧して、書簡やコンクール報告書、プログラム、図面、議事録などの資料を調査し撮影を行った。また、オルセー美術館資料室（Documentation de la conservation, Musée d'Orsay）では、各装飾画の作者である画家の資料ボックスを閲覧し、経歴や関係作品について調査した。フランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France）では、一次資料として、一部の装飾画コンクール報告書など装飾事業関連の資料や、雑誌、新聞などに掲載された批評記事を調査し、そのほかに二次文献として、この装飾事業や各作品を扱った先行研究、展覧会図録と、「人生の諸段階」主題をめぐる研究など最新の研究状況の調査を行った。
以上に加えて、カリエール美術館（Musée Eugène Carrière）において、同時期のパリ 12 区庁舎祝祭の間の装飾画として描かれながら未完となった、カリエールの「人生の諸段階」連作（パリ、プティ・パレ）を中心として資料調査を行った。同館は通常、企画展示期間の日曜午後に限って開館されている。今回の調査では、報告者が以前からメールで情報提供をいただいていた代表者グラチエ氏より事前に許可をいただいて、カリエールを中心とした作品の展示を、同館を運営する友の会のメンバーの一人と彼女のご案内のもとで視察させていただき、その後、カリエールと同時代の文献や展覧会図録などを所蔵している同館のアーカイヴにて、上記の調査を行い、さらに同館出版の紀要などの研究状況を教えていただいた。

2. 調査成果
2.1 区庁舎装飾事業と各画家の作例
2.1.1 プティ・パレ（パリ市立美術館）資料室の資料閲覧
まず、*Triomphe des mairies* 展（1896 年）のアーカイヴからは、展覧会時とその後にかけて、同館による調査の対象とされた区庁舎の装飾画についての一次資料のレファレンスと、一部の一次資料の写しが得られた。とくに、区庁舎および装飾画の作者ごとに整理されたファイルからは、以下に記す画家による装飾画の作例について、その注文、設置をめぐる行政文書や、図像プログラム、コンクール報告書などを得ることができた。これらの資料は、下記のパリ古文書館の調査成果と併せて、今後の論文執筆のなかで、各作品における主題の表現のされ方や、それぞれの制作状況などの背景を研究してゆく際に不可欠なものとなった。なお特筆される事柄については、本報告書の 2.1.3 項で述べたい。
①レオン・コメール（1850-1916）パリ 4 区庁舎装飾画、15 区庁舎装飾画応募下絵
②エミール・レヴィ（1826-1890）パリ 7 区庁舎装飾画、19 区庁舎装飾応募下絵、16 区庁舎装飾画
③ディオジェーヌ・マイヤール（1840-1926）パリ 19 区庁舎装飾応募下絵
④オスカー・マチュー（1845-1881）クリシー庁舎装飾画
⑤ポール・ミリエ（1844-1918）サン・モール庁舎装飾応募下絵
⑥アルベール・ベナール（1849-1934）パリ 19 区庁舎装飾応募下絵、1 区庁舎装飾画
また、展覧会時に図録と別に作成されたリーフレットからは、その際に採られた展示構成を知ることができ、様々な装飾画の傾向が、伝統的寓意、「現実的」寓意、モデルニテ、象徴主義、アール・ヌーヴォーといった視点から分類されている点は、それぞれの作品分析の参考とすることができる。

2.1.2 フランス国立図書館およびオルセー美術館資料室での調査研究
フランス国立図書館における調査では、装飾画の作者のなかでヴィクトール・プルヴェやモーリス・シャバなどの画家に関する研究を閲覧し、さらにその作品批評について、雑誌、新聞から調査を試みた。同時代の受容の状況を知るために批評記事を調査することは、本研究にとって重要であるが、今回の調査では非常に部分的な収集に限られたため、今後まとまった調査が必要となってくる。そのほかに、パリの区庁舎建築に関する基本的な二次文献や [6]、それぞれの装飾画における主題の表現の仕方を考えてゆくにあたって必要となる、当時のフランス社会における政教分離や、また生物変異論の考え方などについても参考文献にあたり [7]、背景となった状況を知ることができた。
また、オルセー美術館資料室では、本研究のコーパスのなかで、区庁舎装飾画における主題の扱い方を比較してゆくために必要となる、各作者の情報を調べた。ここで対象とした画家の一覧は、参考文献欄に記載している。各区庁舎の装飾画、あるいはそのコンクールに応募した下絵の作者である画

家には、現在ではあまり名の知られていない画家も含まれる。今回の研究では、そのような画家の略歴だけでなく、現在の研究状況や、他の作品と区庁舎装飾画との関連などを知ることができ、短時間ながら有意義な調査となった。

2.1.3 パリ古文書館の調査成果

今回のパリ古文書館における調査では、区庁舎装飾事業のアーカイヴから、以下の庁舎の装飾を対象として、一次資料の調査を行った。以下の一覧に、各庁舎と、対象となる装飾画の作者を記す。ここで収集できた資料は主に、装飾画の設置と注文を決める、セーヌ県美術局の審議録や美術委員会議事録、県や市の命令文書のほかに、装飾画コンクールの報告書、図面や目録、書簡などが含まれる。とりわけ議事録やコンクール報告書からは、各コンクールの際の審査委員会メンバーや審査経過、その際に発せられた意見などを知ることができた。

①1883 年、4 区、15 区、20 区庁舎の装飾画コンクール
②1 区庁舎（アルベール・ベナール）
③4 区庁舎（レオン・コメール）
④13 区庁舎（ギュスターヴ・ブーランジェ）
⑤14 区庁舎（アドリアン・タヌー、ジョルジュ・ルーセル）
⑥16 区庁舎（エミール・レヴィ）
⑦19 区庁舎（アルベール・ベナール、エミール・レヴィ、ディオジェーヌ・マイヤール）
⑧アルキュイユ＝カシャン及びノジャン＝シュル＝マルヌの庁舎（アンリ・ブラント）
⑨クリシー庁舎（オスカー・マチュー）
⑩イッシー＝レ＝ムリノー庁舎（ヴィクトール・プルヴェ）
⑪サン＝モール庁舎（ポール・ミリエ）

区庁舎装飾事業のなかで「人生の諸段階」主題の関連作は、全く同一の題を有するものではない。直接的な題の作例として、アルベール・ベナールによるパリ 1 区庁舎婚姻の間装飾画《春／人生の朝》《夏／人生の正午》《冬／人生の夜》（1883 年）や、ヴィクトール・プルヴェによるイッシー＝レ＝ムリノー庁舎正面階段装飾画《人生》（1896 年）などが挙げられる。主題を最も直接的に表した作例である、オスカー・マチューによるクリシー庁舎婚姻の間扉上装飾画《市民生活の寓意》（1877 年）では、寓意的な表現によって、誕生、勉学、くじ引き、求婚、労働・豊作・豊穣、選挙、死というテーマがそれぞれ表され、とりわけ誕生と死の場面には、19 世紀半ばフランスの民衆版画などにみられた「人生の諸段階」主題を想起させるような典型的描写がなされ、さらに共和政のもとでの市民生活の理念と組み合わされている。

これらの装飾画は、パリ市あるいはセーヌ県によって、そのもとに置かれた美術委員会から、画家に直接依頼される場合と、1879 年に開始されたコンクールの結果採用された場合がある。開始以降コンクールが普及したが、部分的な装飾は直接注文の場合が多く、また注文の場合でも以前行われたコンクールで 3 位までの入賞をした画家が採用されるという審査の方式が成立した。こうした装飾画に「人生の諸段階」のテーマが込められる場合、とりわけ婚姻の間の場合に多いのは、場に適した結婚や家族という主題を含めて、一連のパネルを構成するというケースであり、また祝祭の間や正面階段を含め、区庁舎に求められた、共和政の体制称揚や地域的アイデンティティに資するため、祖国や豊穣の主題とともに人生の経過が絵画化されるものが多くみられた。

コンクール報告書からは、審査員がどのような評価を行ったかが明らかとなった。その例として、4 区庁舎祝祭の間、レオン・コメールによる装飾画（1883 年）は、コンクールの際、2 位となったアルベール・ベナールと接戦の末選ばれた[8]。コメールは、四季や水などのエレメント、また運命、富、豊穣、科学、芸術といった伝統的な寓意像の表現を用いるなかで、青春から老年に至る人の生涯を四季と重ねて描き、伝統的な表現を優雅に行ったことが評価された。それに対し、印象派などの作品によって当時普及していたような近代生活のテーマを描いたベナールは、装飾画における新しい表現という点で評価を受け、その後、先述のパリ 1 区庁舎の装飾画を注文されることとなった。ベナール自身は、1879 年のパリ 19 区庁舎婚姻の間装飾画のコンクールにおいても、共和国の勝利や豊穣のテーマのほかに、四季の寓意像と生涯のなかの時期を、それぞれ重ね合わせる描写を既に行っていたが、結果としては､寓意像よりも場面描写によってテーマを表す表現が採用されることになったといえる。

公共装飾画の分野で活躍したベナールは、その後審査員としての役割を果たした、1888 年の 14 区庁舎装飾画のコンクール報告書において次のように述べている。｢新たな壁画の様式をいまだ見つけられなかったと私は言った。というのも、家族、家庭の守り、自由、平等、友愛といった概念を使い果たしてしまったとき、それらすべてを含むような哲学的観念を湧き起こすためには、どの程度それらを混合したらよいのか…（中略）…確かなのは、あるとき我々は、これほど波乱に富んでいて知的な生活の、はっきりとしたイメージを持ち得るということだ。このような啓示は、議員の方々…（中略）

…あなた方の主導性によって得ることができるのです。一言で言えば、あなた方がその装飾された壁面に見たいと願う主題をお与え下さい。」[9]　ベナール自身、新たな装飾画の必要を感じ、革命的な理念を源泉とする、第三共和政の理念を支える概念を表す、という従来の方法に対して、その表現が枯渇していったときに、どのように新たな表現を見出すことができるのかと問い、そのための要望を述べている。ここでは、当時の生活における現実性を、装飾画に表すことが、コンクールの主題次第で可能になると述べているようにも考えられる。先述のように、装飾画の大まかな傾向として、寓意や神話の表現といった古典的な様式の模倣から、同時代の現実生活を想起させる場面描写が増えたことを指摘できるが、表された理念や描写は、この時期の公共装飾画に要請されたものであった。今後の研究においては、今回収集することのできた資料も用いて、各装飾画の制作の際に画家の置かれた状況をより詳しく検討してゆく必要がある。

2.2 ウジェーヌ・カリエール「人生の諸段階」連作をめぐって

2.2.1 カリエール美術館のアーカイヴ調査

ウジェーヌ・カリエール「人生の諸段階」連作は、《若い母親たち》《婚約者》《生誕》（未完）《老人たち》（未完）の 4 点で構成されており、先の 2 点が縦長、残り 2 点が横長（高さはいずれもほぼ同じ）という形態をしている。パリ 12 区庁舎祝祭の間のためにカリエールへ注文され、1897 年から 1906 年に画家が没するまで制作が続けられた。本調査では、この連作について、まずカリエール美術館アーカイヴでカリエール宛書簡の検索をさせていただくことによって、次の 6 点の手紙の写しを調査し、連作の注文と制作を取り巻く状況の一部を、正確な日付とともに明らかにすることができた [10]。

①1897 年 11 月 25 日付、カリエールからギュスターヴ・ジェフロワ宛の手紙：
カリエールは 12 区庁舎のための注文が自身に決定されたことを市の発表によって知り、これは貴方のおかげであると深い感謝を伝えており [11]、この推薦に際し、友人の批評家ジェフロワが何らかの役割を果たした可能性があることが分かる。

②1899 年 2 月 10 日付、ジョルジュ・ヴェラからカリエール宛の書簡：
部局長ヴェラは、12 区庁舎のためのカリエールの装飾画下絵に関する、美術委員会の検討内容を伝えている [12]。これによれば、まずブラウンによって、カリエールからの手紙における説明、すなわち、下絵には「セピア調」の色彩を用いているが、完成作ではより見やすく、現実感を伴って主題が吟味され得るだろうという内容が伝えられた。そして委員会は、作品に高尚な芸術の印象を認めながらも、さらに、人物像を実物大以下の大きさに変更すべきであるという留保を示したうえで、カリエールの下絵を承認した。

③1900 年 2 月 9 日付、美術局長ラルフ・ブラウンからカリエール宛書簡：
ブラウンは、12 区庁舎のためにカリエールが制作中の装飾画の正確なタイトルを尋ねている [13]。

④1904 年 9 月 12 日付、ティエボー＝シッソンからカリエール宛書簡：
美術批評家ティエボー＝シッソンは、カリエールがルイイ地区すなわち 12 区の庁舎装飾画注文を受け、4 点のうち既に 2 点は完成したと聞いて、それらを観ることができるか、また扱われた主題など何か情報をもらえないかと尋ねている [14]。

⑤1904 年 12 月 2 日付、フォンテーヌ夫人宛の手紙：
カリエールは、新たな肖像画の注文を受けることは難しいと伝え、その理由として、区庁舎のための装飾画を仕上げたいからだと述べており [15]、この時期も制作に取り組んでいたことが分かる。

⑥1905 年 7 月 26 日付、J.ベルネームからカリエール宛の手紙：
画商ジョス・ベルネーム＝ジュヌはカリエールからの手紙に答えて、貴方の見事な装飾画がほとんど完成するところまでいったことを想い浮かべてとても嬉しい、ルイイ（12 区）の庁舎は今後有名になるだろう、と書いており [16]、この頃にはカリエールの作品が完成間近であったことがうかがえる。

2.2.2 パリ古文書館の調査成果

続けて、この連作の注文をめぐる状況を詳しく知るために、先述のパリ古文書館においても、12 区庁舎の装飾事業関連の一次資料を調査し、カリエールへの注文とその後について、さらに下記の資料を収集することができた。

①図面：
カリエールが装飾を依頼された当時に作成された、パリ 12 区庁舎祝祭の間壁面の図面からは、あらかじめ四面が規定され、それぞれに装飾枠と、壁画より下段部分の装飾的構成が設定されていたことが分かり、内寸は画家が制作したものと同一であった。

②事業関連文書：
カリエールへの壁画注文を決定し、寸法と報酬を規定した 1897 年 11 月 19 日付の委員会審議録、建築家による報告書や、1906 年に画家が亡くなる前後の時期に交わされた関係者間の書簡を得ることができた。

前項のような書簡などの調査を進めてゆくことと併せて、これらの資料からは、注文時の制約がどの程度であったのか、また主題選択とその表現が画家の自由に任されていながら、委員会の要求や周囲の助言がどのような点でなされたのか、といった制作の背景を知ることができる重要なものとなった。

カリエールの本連作は、1906年に画家が没したことで未完となったが、本報告書の2.1項で述べた他の装飾画と同様に区庁舎装飾事業の一環として注文されたものである。本調査で扱った「人生の諸段階」関連作の多くが、区庁舎婚姻の間装飾として注文されたのに対し、本作は、婚姻の間とは別に造られた祝祭の間の装飾画として描かれており、現在のところ、注文の際にその主題が規定された様子は見つかっていない。また、先述のオスカー・マチューによる作品のような、人間の誕生から死までの諸段階を扱う主題に比べて、本作は「人生の諸段階」と題されながらも、四場面の選択の仕方が特異である。とりわけ題に宗教的含意のある《生誕》を含め、《若い母親たち》《老人たち》の場面に嬰児が描かれていることから、子供や世代間の相互関係という主題への画家の関心など、注文の文脈のみでは語ることのできない要素も多い。こうした主題の扱いや描写の特質は、象徴主義の流れのなかで指摘される同時代の作品の特徴とも並行しているものであり、カリエールによる本作は、第三共和政期の社会背景と、19世紀末にみられた象徴主義美術の傾向との結節点にあるということができる。こうした側面は、今後の研究において、作品に類似点の多い、アルベール・ベナールやヴィクトール・プルヴェらの作例との比較を含め、より詳細に検討してゆきたい。

3. 今後の課題

以上によって、主に注文、審査の側面から、第三共和政期に制作されたパリとその周辺の区庁舎装飾画における、「人生の諸段階」の主題関連作の基礎的な調査を、概ね完了することができた。残された調査は、各庁舎ごとに完成作の状態や保管資料を調べること、さらに他のアーカイヴにおいて、個別の資料を収集し、主に制作の状況を明らかにしてゆくことであり、また、同時代の受容については、今後、定期刊行物に掲載された批評などの調査を進めてゆきたい。

今回収集できた一次資料は、今後の研究のなかで作品分析を進める際に、非常に重要な資料となる。第三共和政期の装飾画に表された共和国の理念や、家族、家庭といった概念が、この主題とどのように結びついているか、主題が個々の作品にどのように表現されたのかといった観点による分析は、これらの資料をもとに実証的に深めてゆき、各作品を同時代へ位置づける助けとしたい。

本調査は、主として博士論文の第一章に活かすことができるだけでなく、博士論文全体の構成に対して有意義な知見をもたらすものとなった。この調査成果をもとに研究を深め、その一部は美術史学会あるいは日仏美術学会において発表してゆきたいと考えている。

4. 謝辞

本調査では、一週間に満たない限られた時間のなかで、現地に赴くことでしか得られない資料閲覧と研究の深化の機会をいただきました。国際的な女性リーダーの育成を旨とする本プログラムにより、このようなご支援をいただいたことに感謝いたします。

また、調査の実施にあたりご協力を賜りました各資料室の皆様、そして貴重な情報をご提供下さいました松田光司氏、大変価値の有る資料をご提供下さいましたSylvie Le Gratiet氏に心より御礼申し上げます。

注

1. 代表的な例に、エドヴァルド・ムンク「生命のフリーズ」連作（1892–1944年頃）やポール・ゴーギャン《我々はどこから来たのか、我々は誰なのか、我々はどこへ行くのか》（1897–98年）、ジョヴァンニ・セガンティーニ「自然」三連画（1896–1899年）などが挙げられる。
2. *Paradis perdus : l'Europe symboliste*, cat.exp., Montréal : Musée des beaux-arts de Montréal, Paris : Flammarion, 1995, Guy Cogeval, « Les cycles de la vie », pp.303-313./ Emmanuel Pernoud, *et.al.*, *L'Enfant dans la peinture*, Paris : Citadelles & Mazenod, 2011, p.326.
3. Pierre Vaisse, *La Troisième République et les peintres*, Paris : Flammarion, 1995, pp. 284-289. / Christian Amalvi, *La République en Scène : les décors des mairies parisiennes, 1873-1914,* Action artistique de la ville de Paris, 2006.
4. *Le triomphe des mairies : Grands décors républicains à Paris, 1870-1914*, Paris : Musée du Petit Palais, 1986, Thérèse Burollet, "Prolégomène à l'étude du mur républicain", pp.22-42, Frank Folliot, "Les Décors de mairies : origine et evolution", pp.54-61.

5. Thérèse Burollet, *ibid.*
6. *Paris : Direction générale de l'information et de la communication: Votre mairie, son histoire*, v.1~20, Paris : Mairie de Paris, 1992.
7. Isabelle Poutrin, dir., *Le XIXe siècle, politique et tradition*, préf. d'Alain Corbin, Paris : Berger-Levrault, 1995, Jean Baubérot, "La Laïcité, une invention française", pp. 493-508, Daniel Becquemont, "Du transformisme au darwinisme", pp.5-20.
8. F. Hattat, *Concours de peinture pour la décoration artistique des mairies des IVe, XVe, XXe, arrondissements : Rapport général sur les opérations du jury, M. F. Hattat, rapporteur*, Paris : Chaix, 1883.
9. Albert Besnard, *Concours pour la décoration de la salle des mariages de la mairie du XIVe arrondissement : Rapport sur les opérations du jury, M. Besnard, rapporteur*, Paris : Chaix, 1891.
10. このうち①ジェフロワの手紙（註 11）は、既に次の論文で明らかにされている。Sylvie Le Gratiet, "De *L'Eveil* aux *Ages de la vie*, Conception et réception des décors d'Eugène Carrière", *l'Atelier*, bulletin de l'Association "Le Temps d'Albert Besnard", no.8 "Le grand décor parisien à la fin du XIXe siècle", 2013.
11. Archives municipales de Nancy, Fonds de l'Académie Goncourt, lettre d'Eugène Carrière à Gustave Geffroy, 25 novembre 1897. ナンシー市のゴンクール関係アーカイヴにカリエールに関する資料が含まれている。このほかにカリエール美術館所蔵の、日本美術に関するゴンクールの著書で、見返しに「ウジェーヌ・カリエールへ　友情の印に　エドモン・ド・ゴンクール」と記された、次の資料を見せていただいた。Edmond de Goncourt, *Hokousaï : l'art japonais au XVIIIe siècle*, Paris : Bibliothèque-Charpentier, 1896.
12. Archives au Musée Eugène Carrière, lettre de Georges Veyrat à Eugène Carrière, 10 février 1899, Bibliothèque des Musées nationaux, « Commission : J.P.Laurens (président), Bouvard, Brown, Baudouin, Veyrat (secrétaire), Bourgeois (secrétaire-adjoint) ».
13. Bibliothèque des Musées nationaux, F°397, lettre de Ralph Brown à Eugène Carrière, 9 février 1900.
14. Bibliothèque des Musées nationaux, Fonds Carrière, MS 425(2), lettre de Thiébault Sisson à Eugène Carrière, F°14, 12 septembre 1904.
15. Eugène Carrière, *Ecrits et lettres choisies*, Jean Delvolvé ed., Paris : Société du Mercure de France, 1907, pp.303-304, lettre d'Eugène Carrière à Mme Arthur Fontaine, 2 décembre 1904.
16. Bibliothèque des Musées Nationaux, lettre de J. Bernheim à Eugène Carrière, 26 juillet 1905.

参考文献

※主要資料名のみ掲載
プティ・パレ（パリ市立美術館）資料室 Petit Palais, Centre de ressources documentaires
Archives d'exposition : Le triomphe des mairies, 1986
Documentation : Albert Besnard, Léon Comerre, Félix et Jacques Jobbé-Juval, Emile Lévy, Diogène Maillart, Oscar Mathieu, Paul Milliet, Victor Prouvé

オルセー美術館資料室 Musée d'Orsay, Documentation
Documentation : Paul Baudouin, Albert Besnard, Emile Blanchon, Gustave Boulanger, Alfred Bramtot, Maurice Chabas, Léon Comerre, Fernand Cormon, Ernest Delahaye, François Délobbe, Henri Gervex, François Gorguet, Georges Hervy, Ferdinand Humbert, Félix Jobbé-Duval, Jacques Jobbé-Duval, François Lafon, Pierre Lagarde, Emile Lévy, Oscar Mathieu, Georges Moreau de Tours, Victor Prouvé

パリ古文書館 Archives de Paris
Préfecture de la Seine, Direction des Beaux-Arts et de l'Architecture, Bibliothèques et Beaux-Arts, 1812-1962
Travaux d'équipement et de décoration, Mairies d'arrondissement ; Mairies de banlieue
VR 560-562, 564, 566-569

区庁舎装飾事業一次資料
Concours pour l'exécution de Travaux de peinture dans divers édifices municipaux, Programme, Paris : Chaix, le 22 septembre 1879.
Extrait du registre des procès-verbaux des séances du Conseil Municipal de Paris, Séance du 16 juillet 1883.
F. Hattat, *Concours de peinture pour la décoration artistique des mairies des IVe, XVe, XXe, arrondissements : Rapport général sur les opérations du jury, M. F. Hattat, rapporteur*, Paris : Chaix, 1883.
Concours pour la décoration de la salle des mariages de la mairie du XIVe arrondissement, Programme, le 1er décembre 1888.

Extrait du registre des procès-vervaux des séances du Conseil Municipal de la Ville de Paris, séance du 21 novembre 1888.

Albert Besnard*, Concours pour la décoration de la salle des mariages de la mairie du XIV*[e] *arrondissement : Rapport sur les opérations du jury, M. Besnard, rapporteur*, Paris : Chaix, 1891.

二次文献

Amalvi (2006) : Christian Amalvi, *La République en Scène : les décors des mairies parisiennes, 1873-1914*, Action artistique de la ville de Paris, 2006.

Mairie de Paris (1992) : *Paris : Direction générale de l'information et de la communication: Votre mairie, son histoire*, v.1~20, Paris : Mairie de Paris, 1992.

Poutrin (1995) : Isabelle Poutrin, dir., *Le XIXe siècle, politique et tradition*, préf. d'Alain Corbin, Paris : Berger-Levrault, 1995.

Prouvé (1958) : Madeleine Prouvé, *Victor Prouvé*, 1858-1943, Paris : Berger-Levrault, 1958.

Vaisse (1995) : Pierre Vaisse, *La Troisième République et les peintres*, Paris : Flammarion, 1995.

Vaisse (1977) : Pierre Vaisse, "Styles et sujets dans la peinture officielle de la III[e] République : Ferdinand Humbert au Panthéon", communication, séance du 3 décembre 1977, *Bulletin de la Société de l'histoire de l'art français*, 1977, pp.297-311.

Le Triomphe des mairies : grands décors républicains à Paris, 1870-1914, cat.exp., Paris : Musée du Petit Palais, 1986.

Quand Paris dansait avec Marianne, cat.exp., Paris : Musée du Petit Palais, 1989.

"L'enrôlement des volontaires de 1792-1989", Thomas Couture, 1815-1879 : les artistes au service de la patrie en danger, cat.exp., Beauvais : Musée départemental de l'Oise, 1989.

Henri Gervex, 1852-1929, cat.exp., Paris : Musée Carnavalet, Bordeaux : Galerie des beaux-arts, Nice : Musée des beaux-arts, 1992.

Paradis perdus : l'Europe symboliste, cat.exp., Montréal : Musée des beaux-arts de Montréal, Paris : Flammarion, 1995.

Peinture et Art nouveau, l'Ecole de Nancy, cat.exp., Nancy : Musée des Beaux-Arts de Nancy, Paris : Réunion des musées nationaux, 1999.

Roger Marx, un critique aux côté de Gallé, Monet, Rodin, Gauguin, cat.exp., Nancy : Musée des beaux-arts de Nancy, Musée de l'École de Nancy, 2006.

Victor Prouvé : 1858-1934, cat.exp., Paris : Gallimard, Nancy : Musée des beaux-arts de Nancy, Musée de l'école de Nancy et Musée Lorrain, 2008.

Maurice Chabas, peintre et messager spirituel, 1862-1947, cat.exp., Paris : Somogy, Pont-Aven : Musée de Pont-Aven, Bourgoin-Jallieu : Musée de Bourgoin-Jallieu, 2009.

Théâtres et cafés : peintures et décors à Lyon, 1840-1930, cat.exp., Villefranche-sur-Saône : Musée Paul-Dini, *2014*

Albert Besnard, 1849-1934 : modernités Belle Epoque, cat.exp., Paris : Musée du Petit Palais, 2016.

はらだ　かおり／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

原田さんは、自身の博士論文の研究テーマに基づき、報告書に示されているとおり、非常に明確かつ具体的な研究目的と調査方法、調査場所を認識し、基本的な予備調査はもとより、関係諸機関への事前連絡などその下準備を十分に行った上で今回の調査を実施している。その結果、無駄なく時間と資金を使って短期間の調査としては十二分な成果を挙げており、とりわけ調査先の研究者と良好なコミュニケーションを取ることによって、一般にアクセスできる以上の資料や情報を得ることができており、その専門的な意義は大きいと言える。また調査の結果得られた知見についての考察においても、適切な見解を示しており、今後の研究の展開の見通しや方向性も明確に得ることができている。本学の貴重な研究助成に支えられて実施された調査研究としては、それに十分ふさわしい実施の実態と成果が得られたことが報告書から読み取れ、非常に意義のある調査研究であったと言える。

（基幹研究院人文科学系・教授　天野知香）

学生海外調査研究	
ヨアヒム・ラフの 1850 年代から 70 年代の活動状況を中心とする現地資料調査	
氏名　倉脇　雅子	比較社会文化学専攻
期間	2016 年 11 月 9 日～2016 年 12 月 1 日
場所	ドイツ（フランクフルト、ヴィースバーデン、ヴァイマル、ミュンヘン）及びスイス（チューリッヒ、ラーヘン）
施設	フランクフルト（J.C.ゼンケンベルク大学図書館、ホーホ音楽院、フランクフルト中央墓地） ヴィースバーデン（ヘッセン州立図書館、ラフの住居） ヴァイマル（ゲーテ・シラー・アーカイヴ、アンナ・アマリア図書館、フランツ・リスト高等音楽院、ヴァイマル国民劇場） ミュンヒェン（バイエルン州立図書館） チューリッヒ（グロスミュンスター、チューリッヒ中央図書館）、ラーヘン（ラフ協会）

内容報告

1. はじめに

19 世紀中葉にドイツ語圏を中心として活躍した作曲家の一人にヨアヒム・ラフ（Joachim Raff, 1922-1882）がいる。修士論文では、ラフの交響曲第 1 番《祖国に An das Vaterland》op.96（1859-61）（以下、《交響曲第 1 番》とする）の作品研究を行った。ラフの交響曲はこれまで「折衷的書法」（Deaville 2001:750）という見方に表れるように標題と音楽の関係を二項対立的な観点から述べられてきた。しかし、音楽構造と標題の関係について分析した結果、この両者には多様かつ分離できない包摂的な関係をもつことが明らかとなった（倉脇 2016）。ここから博士論文では、さらにラフの標題交響曲を作品と書簡や論文を中心とした資料の分析からその成立過程を示し、新ドイツ派とよばれる当時の楽派において彼がどのように位置づけられるかを作品と文献から明らかにすることによって、ラフという観点から 19 世紀中葉のドイツ・ロマン派音楽について考察を行うことにしている。

今回の資料調査では、ラフの活動において重要である 1850 年代から 1870 年代を扱う。ラフの音楽活動は時期ごとに拠点を変えて行われている。1849 年から 1856 年にかけてラフはヴァイマルで活動を行った（以下、ヴァイマル期とする）。その後 1856 年にヴィースバーデンに居を移した後 1877 年まで同地に滞在して交響曲をはじめとする集中的な作曲活動に入るのである [1]（以下、ヴィースバーデン期）（Marty 2014: xviii-xix）。

2. 先行研究

ラフがヴァイマルに来たのは、フランツ・リスト（Liszt Franz, 1811-1886）の助手を務めるためであった（Deaville 2001: 749）。ヴァイマル期のラフについては、ラフの娘であるヘレーネによる回想録（Raff, H. 1925: 85-152）を始めとして、マーティによる最新の伝記（Marty 2014: 102-193）のなかで扱われている。また、リストの管弦楽作品におけるラフの関与についての研究（Bertagnolli 2002）、新ドイツ派とみなされているラフ（Leuchtmann 1997: 239; Altenburg 1997: 68）について再検討を行った研究（Bayreuther 2003; Steinbeck1997）がある。ヴィースバーデン期のラフについては、上記のヘレーネ（Raff, H. 1925: 153-214）とマーティ（Marty 2014: 194-321）による活動の記録とこの時期に書かれた作品研究が主となっている。交響曲の作品研究は、ミュラー＝ロイターの、第 3 番《森にて Im Walde》op.153（1869）について（Müller-Reuter 1898; 1905）、第 5 番《レノーレ Lenore》op.177（1872）について（Müller-Reuter 1898）があり、近年では、シュタインベックが《交響曲第 1 番》を取り上げている（Steinbeck1997）。そしてマティアス・ヴィーガントは音楽における亜流をテーマとした研究（Wiegandt 1997）のなかで、交響曲第 4 番 op.167（1871）、第 5 番、第 9 番 op.208（1878）を扱っている。また、標題交響曲についてはキャロル・S・ベヴィアーによる全作品研究があり（Bevier 1982）、ピーター・ブラウンは交響曲作品全 11 曲の作品研究を行っている。（Brown 2007）。

3. 調査の目的と意義

調査目的は、①1850 年代から 1870 年代におけるヨアヒム・ラフ（Joachim Raff, 1822-1882）の活

動状況を示す一次資料を調査すること、②スイス、ドイツにおけるラフ研究の現状を把握すること、③楽譜（自筆譜や初版）や文献（書簡、論文、プログラム、告知）の一次資料の所在と入手方法の確保することである。

①について、この期間は彼の活動拠点からみるとヴァイマル期（1850 年から 1856 年）と、ヴィースバーデン期（1856 年から 76 年）にあたる。ヴァイマルは当時、リスト、リヒャルト・ヴァーグナー（Richard Wagner, 1813-1883）をはじめとする新ドイツ派とよばれる作曲家たちが多く集まった場所である。ラフは彼らの賛同者（Raff 1854）である一方で、「極めて慎重かつ批判的に新ドイツ派の陣営に加わった」（Leuchtmann 1995: 239）とされる。そしてこの楽派の脱会（1856 年）が創作上の自立の契機となり（Raff. H 1925: 151）、その後のヴィースバーデン期において交響曲 8 作品を含む集中的な創作活動を行うことになる。この転換期における彼の音楽的見地や創作について一次資料（手稿譜、初版、書簡集、活動記録）の調査を行うことはラフの独自性を探る上で重要であると考える。そして②について、日本においてラフ研究は報告者が確認した限り本修士論文が初めてであるが、19 世紀中ごろのドイツ語圏の交響曲を対象とする諸研究、例えばレベッカ・グロートヤーン（Grotjahn 1998: 14）、ヴィーガント（Wiegandt 1997: 35）、フランク・E.・カーヴィー（Kirby 1995: 197）はこれまであまり取り上げられてこなかった作曲家たちをどのように再評価しうるかについて、従来とは異なる観点から考察を行っている。そしてラフについては、シュタインベックが歴史的位置づけにおいて再評価を行った（Steinbeck 1997）ようにラフ研究自体が見直されてきていると考えられる。このため現在のスイス、ドイツにおけるラフ研究の状況を知り、意見交換を行っていくことは日本におけるラフ研究において重要である。③について、ラフの一次資料について書簡や論文といった文献資料が多く残されていることが明らかとなった半面、楽譜に関して初版はあるものの自筆譜について不明な作品が多いことが分かった。これは調査を継続的に行う必要があることを示唆しており、現在ラフの資料を所蔵している図書館、アーカイヴとの連携を保つことが必要となる。

4. 調査の方法と対象

調査方法は現地での視察、聞き取り、そして資料調査である。ラフの生涯を概観すると彼の活動は各時期において拠点が変わっている。そのため、今回の調査ではフランクフルト、ヴィースバーデン、ヴァイマル、チューリッヒを視察するとともに、ラフの娘であるヘレーネによって寄贈された一次資料（Leuchtmann 1995: 239）が保管されているミュンヘン（バイエルン州立図書館）を周遊した。

調査の方法とその対象は以下の通りである。

①1850 年代から 70 年代のヴァイマル期のラフの活動状況について、作品と文献の資料調査を行う。作品研究の基盤となる交響曲第 1 番から第 11 番 [2] までの初版、そしてヴァイマル期に書かれた作品のなかで重要な作品として注目している、オペラ《アルフレッド王 König Alfred》WoO.14（1849）、及びリストによる《アルフレッド王》のピアノ作品、ラフによるヴァーグナーのオペラのピアノ編曲作品 op.61～63 を調査対象の中心としてこれらを手掛かりに関連作品を新たに調査するものとした。また文献資料では、ヴァイマル期に書かれた書簡、論文、特に新ヴァイマル協会におけるラフの活動を知り得る一次資料の収集に重点を置いた。調査の場所は、フランクフルト：J. C. ゼンケンベルク中央図書館（ZB)、ヴィースバーデン：ヘッセン州都アーカイヴ、ヴァイマル：ゲーテ、シラー、アーカイヴ、アンナ・アマリア図書館　及びチューリンゲン州立音楽アーカイヴ、ラッヘン：ラフ協会、ミュンヘン：バイエルン州立図書館の各担当者と読書室と閲覧予約の打ち合わせを事前に行い、現地で資料の閲覧及び複写依頼を行う。

②ラフ研究の状況を知るために、ラフ協会（スイス、ラッヘン）においてレス・マーティ会長及び、ラフ研究者であるセヴリン・コルブ氏との意見交換を行う。

③今後の課題として調査中に得た資料と新たな情報について整理するとともに調査全体の考察を行う。

5. 調査の成果

5.1　フランクフルト：J. C. ゼンケンベルク中央図書館（ZB)

予約した資料の閲覧とそれらの資料の一部を撮影することが特別に許可された。

5.1.1　資料の内容

①作品研究の基礎となる交響曲の初版の閲覧。

②ヴァーグナー作品のピアノ・リダクション譜の閲覧と撮影。

i. *Reminiszenzen aus Richard Wagner's Oper Die Meistersinger von Nürnberg für Pianoforte. Teil:1.* 出版社：マインツ ：ショット社、出版年： 1868 年、【 Mus. pr. Q 80/353 Bd. 1】

ii. *Reminiszenzen aus Richard Wagner's Oper Die Meistersinger von Nürnberg für Pianoforte. Teil:2.* 出版社：マインツ：ショット社、出版年： 1868 年【Mus. pr. Q 80/353 Bd. 2】.

iii. *Reminiszenzen aus Richard Wagner's Oper Die Meistersinger von Nürnberg für Pianoforte. Teil:4.* 出版社：マインツ：ショット社、出版年： 1868 年【Mus. pr. Q 80/353 Bd. 4.】

iv. *Fliegender Holländer* .

出版社：アーヘン ：メーア社 ，出版年：1856 年【Mus pr. Q 80/179 Bd. 1】

③《アルフレッド王》のリブレットの閲覧。

König Alfred : große heroische Oper in vier Aufzügen ; Arien und Gesänge

音楽： ヨアヒム・ラフ、 テクスト： ゴットホルト・ ロガウ

出版社：ヴィースバーデン：フリートリッヒ社、出版年：1852 年 【Mansk Mus II 180/942】

5.1.2 視察

ラフのフランクフルト期（1877 年から 1882 年）における関連施設の視察（ホーホ音楽院音楽院、及び中央墓地を併せて行った。(今回の調査では、フランクフルト期の資料はフランクフルト・ゼンケンベルク大学図書館及びホーホ音楽院図書館にあることを確認するにとどめている。)

5.2 ヴィースバーデン

ヘッセン州立劇場とヴィースバーデン期にラフが住んでいた住居（Stiftsstrasse 10, Wiesbaden）の視察を行った。また、ヘッセン州立アーカイヴには、ヴィースバーデン宮廷劇場での公演の告知の資料がある。この資料は現在オンライン化進められていることが閲覧予約の段階で分かったため今回はゼンケンベルク中央図書館での調査を優先した。また担当の アイヒラー博士から、ラフの資料について報告者がこれまで知り得ないライプツィヒ、ペータース社、並びにゲーテ大学中央アーカイヴ所蔵の資料についての助言を得た。

5.3 ヴァイマル

ゲーテ・シラー・アーカイヴでは、新ヴァイマル協会設立当時のラフの自筆の記録、ラフ作品をリストが編曲した自筆譜、ラフからリスト宛の書簡の閲覧と一部の複写を許可された【GSA 961:2263~2265; 1081:620; 146:157; 151: 98; 151:280】。また、リープシュ氏から、ラフ、リスト、そしてヴァーグナーに関する新たな情報を得ることが出来た。そして、リープシュ氏からヴァイマルリスト高等音楽院内にあるチューリンゲン州立音楽アーカイヴのホフマン氏を紹介頂き、《アルフレッド王》のオーケストラスコア、役付きパート譜、合唱譜の一式を閲覧することが出来た。オーケストラ譜は現在ベルリンのアーカイヴにおいてオンライン化されているが、同アーカイヴにおいて役付きと合唱の楽譜を含めて閲覧することが出来たのは貴重であった。今回はそれらの一部をデータ化してクラウド送信して頂いた【D-WRha DNT 363】。またヴァイマル宮廷劇場で開催された演奏会の告知はオンライン化されていることを教えて頂きラフのヴァイマルでの演奏会資料の精査は後日行うことに変更した。アンナ・アマリア図書館では 2004 年の火事のために消失した資料【Mus. V:453】及び【Mus. V:IIIa:6】については BSB（バイエルン州立図書館）に所蔵されているとの追加情報を頂きミュンヘンで閲覧することにして、ヴァーグナーの《ローエングリン Lohengrin》（1850）【Mus. 11b:15】を閲覧した。

5.4 チューリッヒ（ラッヘン）

チューリッヒ大学博士課程においてラフ研究を行っているコルブ氏の案内でラッヘンに向かい、 ラフ協会会長であるマーティ氏と 3 名でチューリッヒ湖畔のラフの記念碑、オルガニストを務めていた教会を視察した後ラフ協会（http://joachim-raff.ch/）にてラフ研究についてインタビューを行った。ラフ協会の活動についてマーティ氏に伺ってみたところ、現在ラフの書簡や記録といった一次資料の翻刻とそれらを体系的に整理する企画を進めており、およそ 3 年後の完成を目標としているとのことであった。マーティ氏による『ヨアヒム・ラフ、生涯と作品 *Joahim Raff, Leben und Werk*』（2014）のなかでも多くの一次資料が使われているが、ラフ直筆の書簡や記録がデータ化され、自由にオンラインで閲覧することができることは様々な観点から当時の社会的文脈にラフを位置付けることが可能となるだけにこのプロジェクトの意義は大きい。またコルブ氏はラフ研究の意義について、新ドイツ派のメンバーとしてラフがどのような活動を行い、どのような考え方をもっていたのかについて文献研究を行うことで新ドイツ派という楽派がもつ諸相の一部を明らかにしうることについて言及し報告者も同意するところであった。今回のラフ研究者との会談は有意義であり、これは地元の記事に掲載されている（別紙参照、http://www.schwyzkultur.ch/nachrichten/kunst-und-wissenschaft-auf-den-spuren-von-joachim-raff-9200.html)。

これに加えて現在ラフ協会に集められている資料は膨大なものであるが、ラフの書簡集の他にグスタフ・シリング（編）『ベートーヴェン・追悼アルバム Beethoven-Album : Ein Gedenkbuch dankbarer Liebe und Verehrung fur den grossen Todten』（1846）の閲覧を行った。同著はベートーヴェン没後 20 年の記念として当時の作曲家たちによる寄せ書きとなっており、その中にラフの頁が含まれている。

5.5 チューリッヒ

チューリッヒでは、チューリッヒ芸術大学オルガン科の授業をグロスミュンスター大聖堂において聴

講する機会に恵まれた。またヨハネス・ブラームス（Johannes Brahms, 1833-1897）が初演を行ったトーン・ハレ管弦楽団を第 1 ヴァイオリン奏者であるキリアン・アンジェイ氏の協力によって視察を行った。また、ドレスデン蜂起に加わったために亡命中であったヴァーグナーが滞在した住居の視察を行いチューリッヒにおける 19 世紀中期から後期にかけての作曲家たちの動線を確認することが出来た。

5.6 ミュンヘン

バイエルン州立図書館は、ラフの娘であるヘレーネが寄贈したラフの一次資料、「ラフィアーナ *Raffiana*」が所蔵されている。2015 年にはまだオンラインで閲覧できるものは少数であったが今回の海外調査のための問い合わせの度にオンライン化が進み開示された。現地ではラフィアーナの資料及び関連資料を閲覧することが出来た。友人であるハンス・フォン・ビュロー（Hans von Bülow, 1830-1894）、新ヴァイマル協会の会員との書簡だけでなく、成績証明書、教員免許の認定書学業修了書、演奏会告知もこのラフィアーナに含まれている。内容の分析は今後の課題であり、資料の量を考えると継続的な調査が望まれる。そしてこの一部はニューヨークの JP モルガン図書館にあることを確認している。

6. 考察

①今回の調査では、《アルフレッド王》のフルスコアとヴァーグナーのオペラの編曲の楽譜を入手することが出来た。交響曲の作曲よりも前に既にオペラが上演されていることになり、ヴァイマル期の初期が作曲家としての飛躍の時となったと捉えうるだろう。そしてヴァーグナーのオペラ編曲について、初版からの楽譜の販売状況や版権の変遷を含む経緯が明らかになればヴァーグナーの作品の影響力を知り得る一つの切り口となることが考えられ、ひいてはラフの貢献を示すことにもつながるであろう。また、ヴァーグナーの《ローエングリン》(1848) はヴァイマル宮廷劇場でリストが指揮をして初演（1850）された作品である。ラフは、この編曲を 1853 年に行った後、『ヴァーグナー論 *Wagnerfrage*』（1854）を執筆したことになる。この『ヴァーグナー論』がその後ヴィースバーデンに移ったことと関係があるかどうかについて書簡や記事と共に本著の解題を行うことは重要であると考えている。

ヴァイマル期からヴィースバーデン期の資料調査では非常に多くの文献資料が残されていることが明らかとなった。さらに *NZfM* におけるフランツ・ブレンデルとの対話やヘレーネが編纂した *Die Musik* におけるリストとの往復書簡集を分析対象に加えると、ラフのヴァイマル期に重なる新ドイツ派の活動とその影響について、ラフの観点から明らかにできる点があると考えられる。調査の各地域を巡る中で常にラフとともにリストやヴァーグナーの動線が重なっており、ここからは当時の音楽家たちが演奏や出版のために各地を動き回っていた事、そしてたくさんの人びととの関わりを持ちながら活動を行っていたことを見てとることが出来た。そしてラフが活動拠点を変えていく理由についても 19 世紀の社会と結びついた音楽活動の一端が表われていると考えられ、そこからは音楽と社会の関わりを見出すことができる。

②ラフ協会における意見交換は大変有意義であり今後も継続していく予定である。ラフの一次資料のデータ化についてその進捗を知ることや、お互いの研究について意見交換を行うことは、固定化された概念で捉えることが難しい新ドイツ派という 19 世紀半ばから後半における音楽活動をみる際に必要となる多角的な観点をもつ意味において有効であろう。

③ラフのヴァイマル期の調査では、新ドイツ派がキーワードとなった。今後の研究においてこの新ドイツ派について整理することで今回得られた資料の分析に役立てたい。

7. 謝辞

お茶の水女子大学文部科学省特別経費「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムに採択をいただき、深く感謝を申し上げます。

本海外調査を遂行するに当たり、ご指導をいただきました指導教員の永原 恵三教授、準備段階からご助力を賜りました関係各位の皆様に心より感謝を申し上げます。

[1] シェーファーの作品目録によれば、ヴィースバーデン期（1856 年から 76 年）には、op.68 から op.205 及び WoO.Nr.3-12 が作曲された（Schäfer 1888: 32-117）。この中で交響曲は全 11 作品のうち、第 1 番から第 8 番までの 8 曲が書かれている。

[2] 第 1 番《祖国に》（1859-61）op.96、第 2 番（1866）op.140、第 3 番《森にて》（1869）op.153、第 4 番（1871）op.167、第 5 番《レノーレ》（1872）op.177、第 6 番（1873）op.189、第 7 番《アルプスにて》（1875）op.201、第 8 番（1876）《春の響き》op.205、第 9 番《夏に》（1878）op.208、第 10 番《秋に》（1879）op.213、第 11 番《冬》（1876）op.214。括弧内は作曲年。

参考文献

BERTAGNOLLI, Paul A. (2002) "Amanuensis or Author? The Liszt-Raff Collaboration Revisited." Nineteenth Century Music. California: Oakland: University of California Press: 26-1: 23-51.
BEVIER, Carol S. (1982) The Program Symphonies of Joachim Raff, Diss. Texas: Denton: North Texas State University.
BROWN, A. Peter. (2007) The Symphonic Repertoire, Vol.Ⅲ part A. The European Symphony from ca. 1800 to ca. 1930: Germany and the Nordic Countries, Indiana: Bloomington: Indiana University Press: 825-937.
DEAVILLE, James. (2001) "Raff, (Joseph) Joachim", SADIE, Stanley; TYRELL, John(eds.) The New Grove Dictionary of Music and Musicians.(2nd ed.),London: Macmillan: 19: 752.
FINSCHER, Ludwig. (1998) „Symphonie", FINSCHER, Ludwig (Hg.) Die Musik Geschichte und Gegenwart, Sachteil 9, Kassel: Bärenreiter: 75-78.
GATHY, August. (1840) Musikalisches Konversationslexikon. Hamburg: Riemeyer: 425.
GROTJAHN, Rebecca. (1998) Die Sinfonie im deutschen Kulturgebiet 1850 bis 1875: ein Beitrag zur Gattungs- und Institutionengeschichte. Sinzig: Studio.
KIRBY, Frank. E. (1995) "The Germanic Symphony of the Nineteenth Century: Genre, Form, Instrumentation, Expression" Journal of Musicological Research 14(2): 193-221.
———. (2001) "The Germanic Program Symphony in the Nineteenth Century (to 1914)" ed. ARIAS, Enrique Alberto; et al. A compendium of American musicology: Essays in Honor of Joh F. Ohl, IL: Evanston: Northwestern University Press: 195-211.
KOCH, Heinrich Christoph. (1802) Musikalisches Lexikon. Frankfurt am Main: Hermann: 1384-1385.
倉脇, 雅子. (2016) 「ヨアヒム・ラフ作曲　交響曲第１番　ニ長調《祖国に》op.96 の研究」お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科修士論文.
LEUCHTMANN, Horst. (1997)「ラフ，ヨアヒム」柴田南雄；遠山一行（監）『ニュー・グローヴ世界音楽大事典』東京：講談社：19: 239.
MARTY, Res. (2014) Joachim Raff. Leben und Werk. Altendorf: MP Bildung, Beratung und Verlag.
MÜLLER-REUTER, Theodor. (1909) Lexicon der Deutschen Konzertliteratur. Leipzig: C.F.Kahnt: 377-434.
RAFF, Helene. (1925) „Joachim Raff, ein Lebensbild. " Deutsche Musikbücherei, Bd. 42, Regensburg: Gustav Bosse.
SCHÄFER, Albert. (1888)　Chronologisch-systematisches Verzeichnis der Werke Joachim Raff, Tutzing: Hans Schneider.
————. (2011) 英語訳 A Catalogue of the Music of Joachim Raff. THOMAS, Mark (trans.), s.l.
Schilling, Gustav. (1846) *Beethoven-Album : ein Gedenkbuch dankbarer Liebe und Verehrung für den grossen Todten,* Stuttgart: Hallberger.
STEINBECK, Wolfram. (1997) „Nationale Symphonik und die Neudeutschen: Zu Joachim Raffs Symphonie　An das Vaterland ".　Musikgeschichte zwischen Ost- und Westeuropa: Symphonik －Musiksammlungen, Sinzig: Studio: 69-82.
WIEGANDT, Matthias. (1997) *Vergessene Symphonik? Studiren zu Joachim Raff, Carl Reinecke und zum Problemder Epigonalität in der Musik*, Sinzing: Studiopunkt.
［楽譜］
RAFF, Joachim. (2007) Symphonie Nr.1 An das Vaterland. Eine Preis-Symphonie in fünf Abteilungen für das grosse Orchester. D-dur. op.96 (1859-1861), LEICHTLING, Avrohom (ed.), München: Höflich.
［ウェブサイト］
THOMAS, Mark. (1999)　"Joachim Raff." Accessed Aug. 29. 2016. http://www.raff.org/.
MARTY, Anton. (1974) "Joachim Raff Gesellschaft." Accessed Dec. 21. 2016. http://joachim-raff.ch/

くらわき　まさこ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

「指導教員によるコメント」

倉脇雅子さんの研究調査は、19 世紀ドイツにおいて大変人気のあった作曲家、ヨアヒム・ラフに関する一次資料の収集および閲覧、さらにチューリッヒにあるラフ協会を訪問し、そこに所蔵されている資料類の閲覧とラフ研究者とのネットワークを構築することを目的としています。日本において、ラフの研究はほとんど行なわれておらず、倉脇さんの研究は日本でも数少ないもので、19 世紀の西洋

音楽研究がどうしても大作曲家に偏らざるをえないところを、丹念な研究手法で 19 世紀ドイツ音楽のコンテクストを読み取り、その音楽表現のなかに、当時のドイツ人の思想へと迫ろうとしています。また、同時代のほかの作曲家との関係をも導き出すように、さらなる研究の糸口になることが期待されます。

以上から、倉脇雅子さんの海外調査研究は充実した内容であったと判断します。

（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科（人文科学系）・永原 恵三）

学生海外調査研究	
日本統治期台湾に設けられた高等女学校に関する資料調査ー台湾東部を中心にー	
氏名　滝澤　佳奈枝	人間発達科学専攻
期間	2016 年 10 月 30 日～2016 年 11 月 10 日
場所	台湾（花蓮・宜蘭・台北）
施設	国立花蓮女子高級中学、国立蘭陽女子高級中学、台北市立第一女子高級中学、国立台湾図書館

内容報告

1. 本調査の目的と得られた結果

1.1 本調査の目的

1945 年 8 月 15 日現在、台湾全土に公立の高等女学校が 20 校設けられていた。その内 18 校が今日の高級中学や女子高級中学へと引き継がれている [1]。これまでの日本統治期台湾の高等女学校に関する先行研究は、台北や台南といった大都市を中心に行われており、地方の高等女学校（特に台湾東部）については明らかにされていない部分が多い [2]。その理由の一つとして考えられることは、戦前の高等女学校に関する資料がどの程度戦後に引き継がれ、保存収集されているかが把握できていない点にあると思われる。そのため、本調査では、地方に設けられた高等女学校の中でも特に台湾東部に設けられた高等女学校の実態解明を行うための最初の取り組みとして、国立花蓮女子高級中学（元花蓮港庁花蓮港高等女学校、以下花蓮港高女と略記)、国立蘭陽女子高級中学（元台北州立蘭陽高等女学校、以下蘭陽高女と略記）の 2 校及び台北市内の台北市立第一女子高級中学（元台北州立台北第一高等女学校、以下台北第一高女と略記）を訪問し、戦前の高等女学校に関する資料がどの程度引き継がれているのか、また保存されている資料はどのようなものであるのかを確認することを目的とする。戦後引き継がれた資料の所在を確認することは、日本統治期台湾の高等女学校研究を進めていく上で重要な手がかりを示してくれるものであると考える。

本調査で明らかにしようとすることは、次の二点である。第一点目は、調査目的とも関係するが、訪問先の学校に所蔵されている高等女学校に関する資料の有無及び保管状況を確認すること。また、どのような資料が引き継がれているのかという点についても確認を行う。第二点目は、台湾東部に設けられた高等女学校の特色（例えば、立地、生徒数の民族差、教育内容など）を明らかにすることである。

本調査の特色及び独創的な点としては、これまでに行われてきた台湾の高等女学校研究が大都市を中心としたものであったこと、そして台湾西部を中心にしたものであったことに対して、台湾東部に設けられた地方の高等女学校について明らかにしようと試みる点にある。訪問した花蓮は、先住民族の多い地域でもあり、早い段階から日本人の移民村が設けられた地域でもある。観光資源に関する研究は進みつつあるが、教育に関する研究は決して多いとは言えない。そのため、本調査を通して、台湾東部に設けられた高等女学校で行われていた女子教育の一端を明らかにすることは、意義有ることであると考える。

1.2 得られた結果

1.2.1 花蓮港庁花蓮港高等女学校（現国立花蓮女子高級中学、2016 年 11 月 2 日･3 日訪問）

花蓮港高女は、1927（昭和 2）年 4 月に台湾東部の花蓮港庁花蓮港郡（現花蓮市）設けられ、今日の国立花蓮女子高級中学（以下、花蓮女中と略記）に引き継がれている [3]。現在使用されている花蓮駅は、日本統治期の旧花蓮港駅の場所とは異なっている。当時の高等女学生達が利用した旧花蓮港駅は現存しないが、近くに設けられていた台湾総督府鉄道部花蓮港出張所（以下、旧花蓮港出張所）は現在「花蓮鉄道文化園区」として開放されており、所長室や食堂等の建物が保存されており、日本統治期の花蓮港駅や鉄道に関する資料などが展示されている [4]。花蓮港出張所から学校までは徒歩 20 分程度で到着するため、花蓮港出張所の先に位置した旧花蓮港駅から学校までは約 30 分程度かかったのではないかと推測される。校舎は、小高い丘に建てられているため、上り下りの坂道が通学路にな

っていたことがうかがえた。

正門を入ると、正面には日本統治期に植樹された木が残されている。校内には、日本人の卒業生から贈られたという石碑があり、今でも交流が続けられている様子がうかがえた。正門前の道を隔てた反対側には高等女学校時代の校長が住んでいた官舎が残されており、管理は花蓮女中が行っているということであった。これまでも旧高等女学校を引き継いだ学校を訪問し本調査と同様のことを行ってきたが、現存する校長官舎を目にしたのは今回が初めての事であった。官舎の玄関と学校の正門が向き合う形になっている。官舎内は、当時の佇まいがそのまま保存されていた。訪問した日も学校関係者の職員が掃除をするなどして手入れを行っていた。平屋の一軒家であるが、中に入ると外見よりも広く感じられる。裏庭は、美崙渓に面しており、対岸には「将軍府」（元中村大佐邸宅、以下「」省略）と称される日本家屋等が 10 軒ほど保存されていた。将軍府と一緒に保存されていた日本家屋は、以前訪問した虎尾に残されていた大日本製糖株式会社の社宅と似た作りになっていた。入口には防空壕も残されていた。また、「松園別館」（元花蓮港庁兵事部事務所、以下「」省略）と称される場所がやはり対岸の丘の上に設けられている。この「松園別館」は、特攻隊員が出征前に宿泊した施設でもある。将軍府も松園別館も今日では観光施設になっているが、防空壕や防空扉が日本統治期の歴史を現在にも伝えている。日本軍にとって、将軍府も松園別館も重要な施設であった。このような施設が徒歩圏内にある場所に花蓮港高女は設けられていたのである。

学校の歴史を展示している「校史室」（以下「」省略）の入っている建物の廊下からは、太平洋が一望できる。校史室に展示されている資料については、そのほとんどが戦後の物であり、記念誌類についても高等女学校時代の物は展示されていなかった。校史室に展示されている物の中で、花蓮港高女の物が確認できたのは、学校周辺の地形の模型とその模型を載せている机である。模型は二つあり、それぞれに「日治時期模型台　美崙至寿豊段渓流流域」と「日治時期模型台　宜蘭蘇澳至花蓮和平沿海地区」と中国語で説明書きが付されていた。作成された具体的な年代については不明である。机には、「庁地方費立花蓮高等女学校」と刻印された金物の当時のプレートが付けられていた。花蓮港高女に関する資料は別の箇所に保存されているようであったが、具体的にどのような資料が引き継がれ保存されているのか詳細を知ることはできなかった。デジタル化された花蓮港高女時代の写真や資料の一部を見せてもらうことができたが､個人情報等の関係から実物を見せてもらうことはできなかった。写真の出典が不明であるため、いつ頃撮影されたのか確認することもできなかった。デジタル化された資料の一部から､卒業生の人数を把握することが可能である｡名前のみが記された資料であるため、在籍していた生徒の民族による別を判断することは困難である。なぜなら、日本名に改めている台湾人生徒が在籍している可能性があるからである。校史室には、戦後の資料が主として展示されていたが、先に触れた校長の官舎には日本統治期の公学校で使用されていた教科書や当時読まれていた教育に関する日本語の書籍などが数冊展示されていた。いずれも卒業生や卒業生の家族からの寄贈とのことであった。これらの書籍から、日本統治期の台湾で教育に関わるどのような書籍が読まれていたのか、また流通していたのかその一端をうかがい知ることができる。これらの書籍の所在を確認できたことは、日本統治期の台湾で行われていた教育について考えていく上で重要な手がかりとなる資料類であるといえる。

将軍府の近くには、花蓮県花蓮市明禮国民小学があったため、事前に連絡は取っていなかったが訪問を試みた。その理由は、この学校の創立が 1897（明治 30）年に設けられた台東国語伝習所奇萊分教場にまで遡ることができるからである。1897 年といえば、日本統治が始まった 2 年後のことである。1905（明治 38）年に花蓮港公学校に改称し現在の場所に校舎を構えることになった。1939（昭和 14）年には明治公学校と改称した。明治公学校には分教場がいくつかあり、それぞれの分教場も今日の国民小学へと引き継がれているようである。明治公学校は、1941（昭和 16）年には明治国民学校へと改称している [5]。突然の訪問にも関わらず、校長先生が学校の歴史等について説明をしてくださった。その説明によると、美崙渓沿いに設けられた公学校であったため何度も水害にあい、100 年以上の歴史を持っていても日本統治期の資料類が残されていないとのことであった。正門から校舎へと続く階段は、日本統治期のものであるとのことであった。

1.2.2 台北州立蘭陽女子高級中学（現国立蘭陽女子高級中学、2016 年 11 月 4 日訪問）

蘭陽高女は、1938（昭和 13）年 4 月に台湾北東部の台北州宜蘭市（現宜蘭市）に設けられ、今日の国立蘭陽女子高級中学に引き継がれている [6]｡台北州に設けられた高等女学校は､1945 年 8 月現在、台北第一高等女学校、台北第二高等女学校、台北第三高等女学校、台北第四高等女学校、基隆高等女学校、そして蘭陽高等女学校の 6 校あった。6 校とも台北州の設立ではあるが、基隆高女と蘭陽高女については台北市内に設けられた高等女学校ではないため、地方に設けられた高等女学校として位置づけることができよう。蘭陽高女の校舎は既に建て替えられているが、正門は蘭陽高女時代の物が今日でも使用されている。

訪問時、校史室が新築中ということもあり旧校史室を見学させていただいた。資料の多くが既に他の場所に移されているようで、実際にどのような資料が展示されていたのか把握することはできなかった。残されていた展示資料の中に、日本人卒業生が戦後に寄贈した日本人形等が展示されていた。今でも高等女学校時代の卒業生と学校との交流が継続されている様子がうかがえた。また、日本統治期に使用されていた電話も展示されていた。これまで訪問した学校では、高等女学校時代に使用していた机や椅子、ミシンなどが展示されていることがあったが、電話が残されているのは興味深かった。閲覧資料については、事前に学校側に問い合わせをしていたことから、いくつか貴重な資料を実際に手に取り見せていただくことができた。本来、資料類は校史室で閲覧すべきものだと思われるが、当日、旧校史室が他の行事で使用中であったことから、別室にて閲覧をおこなうことになった。閲覧の時間は、10：00～17：00 である。資料の閲覧に際しては、校長並びに資料類を管理している担当の先生に撮影並びに複写の許可を得てから行った。そして、個人情報についても慎重に扱うようにとの説明を受け、個人情報に配慮しながらどのような形で写真撮影を行えばよいか相談しながら作業を進めた。結論としては、個人名が特定できないように、名前を付箋で隠すなどして写真撮影を行った。また、資料類が国立蘭陽女子高級中学所蔵の物であることを示すために、校名を記した紙片を資料の上に載せて写真撮影を行った。閲覧並びに写真撮影は、全て学校の先生立ち会いの下で行い、複写を行う場合も 1 点ずつ許可を得てから行った。更に、各資料をどのような形で論文に使用するのか、どの部分を使用するのかといった具体的な事柄についても相談し話合いを行った。限られた時間の中で全ての資料を撮影、複写することは不可能であったが、用意してくださっていた資料類については一通り目を通し、どのような資料類が戦後に引き継がれているのか、その一部を確認することができた。蘭陽高女については、今後も継続して資料調査を行っていきたいと考えている。

1.2.3 台北州立台北第一高等女学校（現台北市立第一女子高級中学、2016 年 11 月 9 日訪問）

台北第一高女（現台北市立第一女子高級中学、以下北一女と略記）は、1904（明治 37）年に日本人女子生徒のために設けられた台湾総督府国語学校第三附属学校に端を発し、1909（明治 42）年に台湾総督府高等女学校として独立した [7]。日本統治期の台湾における高等女学校としては、最も早くに設けられた学校といえる。台湾総督府（現台湾総統府）の斜向かいに設けられており、学校の並びには、台北市立大学（旧台湾総督府国語学校）がある。近くには、司法院（旧 台北地方法院・高等法院）、台北迎賓館（旧台湾総督府官邸）、台湾大学医学部附設医院旧館（旧台北帝国大学医学部附属医院）、立法院（元台北州立台北第二高等女学校跡地）などが徒歩圏内にあることから、台北市内の中でも特に政治や教育の中心に近い場所に校舎が設けられていたことがうかがえる。北一女には、2015 年 11 月にも訪問したが、その時には校史室が工事中ということもあり資料については一切見ることができなかった。そのため、今回改めて訪問することとした。新設された校舎の 1 階に校史室が設けられており、台北第一高女時代から今日の北一女に至るまでの様々な資料が展示されていた。中でも目を引いたのは、高等女学校の家事科の授業で使用されていた食器一式が展示されていたことである。これまで訪問した学校では、生徒が制作した刺繍の額装は目にしたことがあるが、家事科に関する教材が確認できたのは初めての事である。制服も復元されたものが展示されていた。全体的な印象としては、戦後の資料がやや多いようであった。当日は、秘書の方が校史室を案内してくださった。資料についての説明を一通り受けた後、写真撮影の許可を得てから展示資料の撮影を行った。

2. 博士論文執筆における本調査の位置づけ

2.1 これまでの研究経過と本研究調査との関係

これまで筆者は、日本統治期台湾における高等女学校研究、特に裁縫科教育に着目して研究を進めている。修士論文では、歴史的に台湾人女子児童の教育機関として発展してきた台北州立台北第三高等女学校で行われていた裁縫や刺繍、手芸、造花といった「技芸教育」ついて考察を進め、その実態解明を行った [8]。現在進めている研究は、修士論文を更に発展させたものである。

1922 年に台湾教育令が改正されたことを受け、中等教育以上では台湾人生徒と日本人生徒の共学が実施されることになり、制度上では日本人と台湾人という民族差は解消されたかのようにみえた。しかし、筆者が研究対象としている日本統治期台湾における高等女学校では、実際は一部の科目で民族による別学が行われていた。特に、裁縫科では、台湾人女子教育機関として発展してきた歴史を持つ高等女学校においては、1930 年代半ばまで和裁と洋裁に加えて台湾裁縫が教えられていたが、他の高等女学校では教えられていなかったことを明らかにした。これまで、主として台北市内に設けられた台北第三高女を中心に考察を進めてきたが、考察を進めるにつれ、他校（特に地方に設けられた高等女学校）との比較が重要なのではないかと考えるようになった。

地方の高等女学校に着目する理由は、先にも触れたが、これまでの先行研究では地方の高等女学校に関する研究が進んでおらず、各高等女学校間の地域性や特色等が明らかにされていない点が多いか

らである。台湾に設けられた高等女学校の全体像を把握するためには、地方の高等女学校に目を向ける必要があるとの問題意識から、2012 年に台湾中南部の現雲林県に設けられた台南州立虎尾高等女学校（現国立虎尾高級中学、以下虎尾高女と略記）を訪問した。虎尾は、大日本製糖株式会社を中心に街が形成された地域であることから、製糖会社と学校との関わりの一端を明らかにした [9]。地域の主たる産業の違いにより、生徒の親の職業も異なってくる。虎尾高女の場合は、その大部分が大日本製糖株式会社関連の職に親が就いていた。各学校の歴史は、沿革誌や記念誌等により確認することができるが、学校の設立経緯などについては、地域の産業等が関わりを持っていることがあるため、各地域の産業史などにも目を向ける必要があることを学んだ。実際に現地に足を運び資料調査を行い、可能な限り街を歩き、学校を取り巻く環境や各地の気候風土に触れることにより、活字や聞き書き調査からだけでは見えてこない部分を想像することが可能になる。特に、台湾人の衣生活と関わりの深い裁縫科教育を研究対象としている筆者にとっては、各地の気候風土を知ることは意義あることである。

筆者は、高等女学校に関する資料がどの程度戦後に引き継がれ保管されているのかを調査するため、2016 年 11 月には、平成 27 年度お茶の水女子大学大学院生研究補助金により台中州立彰化高等女学校（現国立彰化女子高級中学）と台北州立基隆高等女学校（現国立基隆女子高級中学）、そして台北第一高女（現北一女）を訪問し、台北のみならず地方の高等女学校に関する資料調査を行った。今回の調査により、嘗て台北州に設けられ公立高等女学校 6 校を全て訪問することができた [10]。今回の調査は、お茶の水女子大学による研究補助金を得て行う第二回目として位置づけるものである。また、本調査は、学生海外派遣プログラムによるものであり、「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」を前提としていることから、海外に赴き現地で資料調査を行うことは、国際的な女性リーダーの育成にも関わるものであると考える。今回の経験を生かしながら、今後も積極的に現地に赴き日本統治期台湾に設けられた高等女学校に関する資料調査を継続し、日本統治期台湾に設けられた高等女学校研究を深めていきたい。

2.2 今後の研究計画と本調査との関係

今後の研究計画としては、本研究調査で訪問した学校を「日本統治期台湾の高等女学校訪問記（その 3)」として『植民地教育史研究年報』に公表する予定である [11]。本調査で得られた資料類や学校が設けられた地域の特色等から、各地域に設けられた高等女学校の全体像を把握することが可能となる。これらの一次資料を元にその他の関係資料などを用いながら考察を進め、本調査よって得られた研究成果を所属している研究会や学会などで発表し、投稿論文へと繋げ、最終的には博士論文にまとめていきたいと考えている。本調査で得られた資料類は、これまで筆者が進めてきた研究の幅を広げ、博士論文を執筆する上で重要な手がかりとなり得るものであると考えている。

謝辞

本研究調査は、国立花蓮女子高級中学、国立蘭陽女子高級中学、台北市立第一女子高級中学の校長先生をはじめとする諸先生方、訪問に際し御尽力下さいましたご卒業生の皆様方、通訳で同行してくださった陳麗鳳先生、その他多くの方々のご協力なしには行うことができませんでした。お力添えをくださいました関係者の皆様方に心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

注

1. 滝澤佳奈枝「台湾　台南市・彰化県・嘉義市・嘉義県・高等女学校」、『学校所在地一覧』、研究代表者　玉川大学教育博物館　白柳弘幸、平成 23 年度～平成 25 年度科学研究費補助金　基盤研究（B）課題番号 23330244、上巻、37－38 頁、2013 年
2. 植野弘子「植民地台湾における高等女学校生の『日本』—生活文化の変容に関する試論—」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における＜日本＞』風響社、2006 年、121－154 頁；山本禮子『植民地台湾の高等女学校研究』多賀出版、1999 年；洪郁如『近代台湾女性史』勁草書房、2001 年；游鑑明『日據時期台湾的女子教育』国立台湾師範大学歴史研究所専刊（20）1988 年　等
3. 『花蓮港庁立花蓮港高等女学校一覧表』昭和 13 年；『花蓮港庁立花蓮港高等女学校一覧』に記されている設立位置である花蓮港庁花蓮郡は 1937 年以降の行政区分であるため、1927 年の設立当時のものとは異なる。
4. 陳淑美編纂『走街串巷　老花港—花蓮県 2015 全国古蹟日導覧手冊』花蓮県文化局、28－43 頁、2015 年
5. 『花蓮県花蓮市明禮国民小学』1 頁（奥付がないため発行年限不明）
6. 『台北州立蘭陽高等女学校一覧表』昭和 17 年
7. 台湾教育会『台湾教育沿革誌』1939 年（復刻　台北：南天書局、1995 年）812－816 頁
8. 滝澤佳奈枝『日治時期台湾的技芸教育—以第三高女為中心』淡江大学国際研究学院日本研究所修士論文、2005 年
9. 滝澤佳奈枝「台南州立虎尾高等女学校と生徒たちの終戦前後—大日本製糖株式会社と学校及び生徒たちの関わりを

中心に―」、『旧外地の学校に関する研究―1945 年を境とする連続・非連続―』、研究代表者　玉川大学教育博物館　白柳弘幸、平成 23 年度～平成 25 年度科学研究費補助金基盤研究（B）課題番号 23330244、39－52 頁、2014 年

10. 台北州に設けられた公立の高等女学校 6 校のうち、台北州立台北第二高等女学校並びに台北州立台北第四高等女学校は廃校になっている。そのため、実際には、戦後に引き継がれた 4 校を訪問したことになる。

11. 台北州立台北第三高等女学校、台南州立虎尾高等女学校については、拙稿「日本統治期台湾の高等女学校訪問記（その 1)」『植民地教育史研究年報』第 18 号（216－222 頁、2016 年)、台中州立嘉義高等女学校、台北州立基隆高等女学校、台北州立台北第一高等女学校については「日本統治期台湾の高等女学校訪問記（その 2)」『植民地教育史研究年報』第 19 号（2017 年掲載予定）にて報告した。

参考文献

植野弘子「植民地台湾における高等女学校生の『日本』―生活文化の変容に関する試論―」五十嵐真子・三尾裕子編『戦後台湾における＜日本＞』風響社、2006 年、121－154 頁

山本禮子『植民地台湾の高等女学校研究』多賀出版、1999 年

洪郁如『近代台湾女性史』勁草書房、2001 年

游鑑明『日據時期台湾的女子教育』国立台湾師範大学歴史研究所専刊（20）1988 年

台湾教育会『台湾教育沿革誌』1939 年（復刻　台北：南天書局、1995 年）

陳淑美編纂『走街串巷　老花港―花蓮県 2015 全国古蹟日導覧手冊』花蓮県文化局、2015 年

『花蓮港庁立花蓮港高等女学校一覧表』昭和 13 年

『台北州立蘭陽高等女学校一覧表』昭和 17 年

『花蓮県花蓮市明禮国民小学』(奥付がないため発行年限不明)

滝澤佳奈枝「台湾　台南市・彰化県・嘉義市・嘉義県・高等女学校」、『学校所在地一覧』、研究代表者　玉川大学教育博物館　白柳弘幸、平成 23 年度～平成 25 年度科学研究費補助金　基盤研究（B）課題番号 23330244、上巻、37－38 頁、2013 年

滝澤佳奈枝『日治時期台湾的技芸教育―以第三高女為中心』淡江大学国際研究学院日本研究所修士論文、2005 年

滝澤佳奈枝「台南州立虎尾高等女学校と生徒たちの終戦前後―大日本製糖株式会社と学校及び生徒たちの関わりを中心に―」、『旧外地の学校に関する研究―1945 年を境とする連続・非連続―』、研究代表者　玉川大学教育博物館　白柳弘幸、平成 23 年度～平成 25 年度科学研究費補助金基盤研究（B）課題番号 23330244、39－52 頁、2014 年

滝澤佳奈枝「日本統治期台湾の高等女学校訪問記（その 1)」『植民地教育史研究年報』第 18 号、216－222 頁、2016 年

滝澤佳奈枝「日本統治期台湾の高等女学校訪問記（その 2)」『植民地教育史研究年報』第 19 号（2017 年掲載予定）

たきざわ　かなえ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　人間発達科学専攻

指導教員によるコメント

滝澤さんは台湾の淡江大学の修士課程に留学し、修了後も引き続き植民地期の台湾の技芸教育に関する研究を続けて 2014 年に本学大学院博士課程に入学しました。技芸教育に関する学校保存資料を収集するために何度か台湾に出向いています。文書館等と違って、学校保存資料の場合は校史室があっても資料目録が作成、公開されているとは限らず、自分が見たいものだけを請求して閲覧できるわけでもありませんので、やはり学校を訪問して確認する必要があります。また、学校の地理的立地を確認することで、その学校の生徒の民族や家庭の階層・職業を把握することが可能になってきます。台湾裁縫が一部の高等女学校で教授されていたことを滝澤さんは明らかにしていますが、その傾向が台湾全体でどのようなものであったのかを確認する必要がありますので、1 校ずつ確認する作業を進めています。今回の調査でその作業が大きく前進しましたので、収集した資料を整理し、その成果を個別の論文にまとめたうえで、博士論文に集大成することが視野に入ってきたとみています。

（人間科学系　米田俊彦）

学生海外調査研究	
G.V.ローシーの在日以前の活動とその背景に関わる史資料収集	
山田　小夜歌	比較社会文化学専攻
期間	2016 年 10 月 31 日～2016 年 11 月 13 日
場所	ミラノ（イタリア）、ロンドン（英国）
施設	ブレラ国立図書館、ミラノ市立中央図書館、アンブロジアーナ絵画館付属図書館、ミラノ・スカラ座付属博物館、ヴィクトリア&アルバート博物館・閲覧室、大英図書館

内容報告

1.調査の必要性・目的

筆者は、大正初期にバレエやダンス、所謂「洋舞」をわが国にはじめて本格的に導入した、バレエ教師・振付演出家 G.V.ローシー[Giovanni Vittorio Rosi, 1867-?]に着目して研究を継続している。

ローシーは、祖国イタリアにてバレエの教育を受けた後、プロフェッショナルとしてイタリア、そして英国ロンドンのヴァラエティ劇場を中心に、ダンサー・振付家として活動した。その後、ローシーは明治末期に開場した帝国劇場の歌劇部の教師として日本に招聘され、舞踊、歌劇・喜歌劇、現代劇作品の上演に関わり、歌劇部の解散後も 1918 年にアメリカに渡るまで自ら主宰したローヤル館にて作品の上演を続けた。

日本において約 5 年半（1912.8-1918.3）活動したローシーは、先行研究において彼が「日本で初めてバレエを教えた教師」（上野、1992、p.1）として位置づけられているように、日本洋舞黎明期におけるキーパーソンであると認識されていることがわかる。それにも関わらず、ローシーという人物や活動内容について研究が十分に成されているとは言い難い。

これまで、筆者が国内の史資料を渉猟し、分析・検討を進めてきた結果、彼の在日中のバレエ指導および上演活動は、出身母体であるミラノ・スカラ座 *Teatro alla Scala*（以下、スカラ座）の指導方針や 19 世紀末～20 世紀初頭のイタリア・バレエとロンドンのヴァラエティ劇場におけるバレエの影響を色濃く受けていた可能性が示唆された。今後、彼の在日中の活動の全貌を解明し、ローシーの「バレエ観」に迫るためには、本人のスカラ座やヴァラエティ劇場での関わり方に加えて、同劇場の作品の傾向や特徴、上演の実態、また作品や劇場に対する社会的評価の調査・検討が不可欠となる。以上を解明するために重要となる一次史資料は、日本国内に所蔵はない。

したがって、本調査では、ローシーのイタリア時代（1867-1900）のスカラ座や附属バレエ学校 *Scuoladi ballo alla Ssala* 関係資料と上演記録、そしてロンドン時代（1900-1912）に関わったヴァラエティ劇場（アルハンブラ劇場 *Alhambra Theatre* およびエンパイア劇場 *Empire Theatre*）の公演プログラムや劇場関係資料、関係する新聞・雑誌記事といった史資料の閲覧と収集を目的とした。

こうして得られた資料を読み解き、分析していくことで、これまで明らかにされてこなかったローシーの日本における上演活動について、より詳細に理解が得られるものと考える。

2.調査の内容・成果

2-1.ミラノ（イタリア）における史資料調査

筆者は、今回ミラノでの現地調査を行うにあたり、スカラ座と附属バレエ学校に関する一次資料を多く所蔵するスカラ座付属博物館内図書室およびスカラ座附属バレエ学校図書館に事前に連絡を取り、資料閲覧の申し込みを行っていた。しかし、調査の 1 週間前に先方の都合により閲覧室を急遽閉館するとの連絡を受け、両館での資料の閲覧が叶わなかった。しかし、スカラ座附属博物館の学芸員が、筆者の調査および研究内容に関わる書籍情報、館所蔵資料の目録、イタリア国内資料 web 検索システムおよび新聞閲覧システムのアカウントを提供して下さった。それにより、本調査は、筆者が事前に調べ得た資料や施設に関する情報の他に、同学芸員の情報提供に基づいて行われた。

2-1-1. ブレラ国立美術学院附属図書館、アンブロジアーナ絵画館付属図書館におけるスカラ座のバレエ台本・プログラム・劇場関係資料の閲覧およびミラノ市立中央図書館における書籍『ミラノ・スカラ座 1778-1906—その歴史と統計』 *La Scala 1778-1906, Note Storiche e Statiatiche* の閲覧

ブレラ国立図書館 *Biblioteca Nazionale Braidense*、アンブロジアーナ図書館 *Biblioteca Ambrosiana* は、いずれも絵画館・絵画館附属学校に付随した図書館で、ブレラのリコルディ・アー

カイブ *Ricordi Archives* をはじめ、スカラ座を含むイタリア音楽(舞踊)関係の資料を数多く所蔵している。

ミラノ市立中央図書館 *Biblioteca Comunale Centrale Sormani* が所蔵する『ミラノ・スカラ座 1778-1906 年―その歴史と統計』*La scala 1778-1906, Vote storiche statistich* は、各シーズン毎のダンサーの姓名や階級、出演作品等を年代順にまとめたもので、スカラ座の上演作品と関与した人物を知る上で貴重な資料である。

イタリアにおけるバレエは、1778 年に開場したスカラ座を中心に発展し、1830 年～40 年代にはロマンティック・バレエの中心の一つともなった。19 世紀後半、バレエの中心がロシアの帝室劇場へと移り、マリウス・プティパ[Marius Petipa]によるクラシック・バレエが全盛期を迎えると、パリと同様、イタリアにおいてもロマンティック・バレエに対する熱狂には陰りが見られるようになる。その結果、幻想を追い求めるバレエではなく、大規模な美術と多数の出演者を用い、大衆の好みを反映した娯楽的要素の強いバレエがイタリアの劇場の主流を占めるようになった。そういったスペクタクル志向の強いバレエの代表的な振付家として知られているのがルイジ・マンゾッティ[Luigi Manzotti]である。マンゾッティの作品は、「現在理解されているバレエとは異なる」（Beaumont、1956、p.638）、「芸術的に、そして音楽や振付面でも退化している」（Beaumont、1956、p.169）などと、ロマンティック・バレエ作品に比してネガティヴな評価が散見される。しかしながら、当時、ロシアを除いて唯一大規模なバレエを上演しうる力を維持していたオペラ・ハウス、スカラ座において、民衆からの圧倒的な人気を得ていたマンゾッティの作品は、バレエ史の一時代を築いたともいえるだろう。

本年度の調査では、上記の 3 図書館が所蔵するスカラ座のバレエ脚本およびプログラムと『ミラノ・スカラ座 1778-1906 年・その歴史と統計』、さらに前項で挙げたイタリア国内資料 web 検索システムを用いて、ローシーのイタリア時代と同時期のスカラ座を中心としたバレエ作品と、ローシーの関与の有無を調査した。

作品に関しては、スカラ座ではやはり《エクセルシオール》*Excelsior*、《愛のバラ》*Rosa D'Amore*、《シーバ》*Siebe*、《スポーツ》*Sports*、といったマンゾッティ作品の上演が多数確認された。

その一方で、サン・レオン[Arthur Saint-Léon]振付の《泉》*La Sorgente*（初演：1866 年、パリ・オペラ座）やプティパ振付の《眠れる森の美女》*La Bella Dormente*（初演：1890 年、マリンスキー劇場）など、ロマンティック・バレエやクラシック・バレエを代表する振付家の作品が、スカラ座のダンサーたちによって上演されていたことが明らかとなった。また、ヨーゼフ・ハースライター[Josef Haßreiter]振付の《人形の精》*Die Puppenfee*（初演：1888 年、ウィーン宮廷歌劇場）の上演も認められた。《人形の精》は後にローシーが活動拠点としたロンドンのエンパイア劇場でも上演されているほか、彼が帝国劇場で上演した《三越呉服店玩具部》のもとになった作品である可能性がある。

また、バレエ作品の上演は単独ではなく、オペラとともに上演される場合が多かったようだ。例えば、先に挙げたプティパ振付の《眠れる森の美女》は《アンドレア・シェニエ》*Andrea Chénier* のあとに、ハースライターの《人形の精》は《ファルスタッフ》*Falstaff* のあとに上演されている。

上演プログラムから、スカラ座のバレエやオペラの上演には附属バレエ学校の生徒も多数上演していることがわかった。ローシーと同世代のバレリーナ、カルロッタ・ブリアンザ[Carlotta Brianza]やエミリア・ザンベッリ[Emilia Zambelli]など、女性生徒の名前が見られた一方で、ローシーを含む男性生徒の名前は確認されないことから、バレエ学校生徒の出演は女性の場合が多かったのかもしれない。

上記の資料からローシーの出演記録を探したところ、1892 年から 1901 年にかけて「G.V.Rosi」または「Vittorio Rosi」という名のダンサーがスカラ座、その他の劇場で少なくとも 10 作品に出演していたことが明らかとなった。

イタリア国内における「Vittorio Rosi」の最も古い出演歴は、1898 年にトリノのヴィットリオ・エマニュエル劇場 *Teatro Vittorio Emanuele* において、ルイジ・ダンゼィ[Luigi Dansei]振付のバレエ≪メッサリーナ≫*Messalina* に出演したもので、「Rosi」は「Pallante, libretto di Claudio」というソリスト級の役を担当している。

また「Rosi」の出演はバレエ作品のみならず、スカラ座で「Pantomima」と称された作品にも出演した。同じ「Pantomima」に出演した「Ugo Perfetti」という人物は、スカラ座の《人形の精》にも出演しており、スカラ・ダンサーの活動の一側面が浮かび上がってくる。

また資料から、イタリア国内のみならず、1892 年の南米・ブエノスアイレスでの上演にも「Vittorio Rosi」の出演が認められた。ローシーは、在日中自らの経歴について、チアッキ・オペラ・カンパニーとともにバタヴィア(ジャカルタ)、インド、エジプト、南米を巡業し、ブエノスアイレスでは長期公演を行ったと明らかにしている。今後資料の分析を進め、その関係性について検討したい。

既述の「Vittorio Rosi」が出演した《メッサリーナ》はトリノのヴィットリオ・エマニュエル劇場

での公演以前にスカラ座でも上演されている。《泉》のプログラムからは、スカラ座を皮切りに、ローマ、ナポリ、パレルモといったイタリア国内の各都市、そしてパリとロンドンでの上演が予定されていることが読み取れた。さらに、「Vittorio Rosi」と度々共演し、上記のトリノやブエノスアイレスでの公演にも出演した「Luigia Cristino」は、1898 年にスカラ座でプティパの《眠りの森の美女》が上演された際にも主要キャストとして出演していたことが分かった。

以上から、イタリアのスカラ座に出演したダンサーが、ロシアのクラシック・バレエ上演に関わったほか、南米の劇場にも出演した形跡があること、そしてスカラ座のバレエ・プロダクションは欧州の大都市各地でも上演がなされていたことがわかる。

筆者は、昨年度のヴィクトリア＆アルバート博物館（ロンドン）での調査を経て、ロンドンでローシーの活動拠点となったアルハンブラ劇場では、エージェントの仲介を通して、振付家・教師・ダンサーが他の劇場間を往来したほか、衣裳の売買やプロダクションの輸出が行われるなど、パリやベルリン、ベルギーといった国境を越えて他地域の劇場と盛んに交流していたことを指摘した。本年度のイタリアのスカラ座に関する調査によって、当時の劇場間の往来は大陸をも越えていたことが改めて明らかとなった。

なお、今回の調査において着目したローシーに関わる「G.V.Rosi」または「Vittorio Rosi」の表記には、出典によって姓名の表記や肩書きが多少異なるほか、ファーストネームの記載がない年代もあり、何れの「Rosi」が G.V.ローシーなのか検討する必要性が残った。

今後は、周辺文献および日本国内でも閲覧可能な *Teatro Illustrato* や *Illustrare di Italiano* といった新聞記事を用いて、さらに分析・検討を進めていきたい。

2-1-2.ミラノ・スカラ座附属博物館展示室資料の閲覧

始めに述べたように、本調査では図書室の訪問は叶わなかったが、スカラ座博物館資料の一部を常設展示室において閲覧した。それは、伝統的な幕間劇、コメディア・デラルテの上演が盛んだった時代から今日のバレエやオペラに至るまでのスカラ座を中心としたパフォーミング・アーツの軌跡を垣間みることが出来る。中には舞台照明や舞台設備の発展の歴史や、各時代に名を馳せたアーティストの肖像画､舞台スケッチが展示されるなど､スカラ座の上演活動の背景をうかがい知ることができた。

2-2.ロンドン（英国）における史資料調査

2-2-1.ヴィクトリア&アルバート博物館・閲覧室におけるアルハンブラ・エンパイア劇場関係資料の閲覧

ヴィクトリア＆アルバート博物館の閲覧室は、本館において展示している各部門の収蔵品のうち特に貴重な資料を保存・公開している。筆者は、昨年度の調査と同様に、シアター&パフォーマンス・コレクションのダンス担当学芸員であるジェーン・プリッチャード氏[Jane Pritchard]と事前に連絡をとり、筆者の研究内容を伝えた上で有益な資料を出納して頂いた。今回は昨年以上に調査期間が短く、また閲覧室が週 3 日のみの開館ということもあり、多数ある資料の中から、上演作品の内容やローシー夫妻の出演状況の調査に不可欠な 1901 年から 1912 年の劇場関係資料、特にアルフレッド・モウル・コレクション[Alfred Moul Collection]の中で昨年度閲覧が果たせなかった資料を優先して閲覧した。同コレクション名にあるアルフレッド・モウルは、二度に渡ってアルハンブラ劇場の総支配人[General Manager]を務めた人物である。その在任期間はローシーのロンドンでの活動期間と重なるため、モウル・コレクションは筆者の研究に大変有効な一次資料となる。

今回閲覧したコレクション資料のほとんどは、モウルと衣裳製作会社やエージェント、アルハンブラに作品提供を行った作曲家・脚本家・振付家、欧州内外の劇場周辺関係者等との往復文書である。

アルハンブラで上演されたバレエ作品に関わった作曲家や脚本家とモウルとの書簡からは、作品制作の経緯や特徴、出演したダンサー、そしてその評価などを読み取ることができる。

例えば､アルハンブラでローシーも振付家の一人として関わった《四季》*All the Year Round*（1904）の作曲を手掛けたジェームズ・グロヴァー[James Glover]は、「私は、この作品を“up-to-date”で最高にモダンな英国式ディヴェルティスマンに仕上げることを勧める。そのために、（中略）多種多様なダンスを盛り込み、パリとは異なる壮大なショーに仕上げるのだ。」[2] との書簡を送付し、台本の再構成を要望している。

同時期､アルハンブラやエンパイアのバレエは､“up-to-date”と称し､時の英国の政治や国際情勢、旅や喫煙など民衆の趣味娯楽、時の流行ものをテーマにした作品が多く上演され人気を呼んでいた。このグロヴァーの書簡からは、彼が“up-to-date”を作品内容のテーマとしてのみではなく、その音楽や演出にも取り入れようとする意図が読み取れる。このグロヴァーの意図がどの程度反映されたのかは不明だが､《四季》は最新式の豪華絢爛な舞台装置と様々なジャンルのダンス音楽を組み合わせたスペクタクル要素に富んだ作品となり、好評を博した。こうした、ヴァラエティ劇場のバレエが“up-to-date”という「最先端」を作品内容のみならず、視覚的・聴覚的演出要素にも取り入れ、総合的な

“up-to-date”バレエ作品の上演を目指していた様子は注目される。

なお、往復文書は所蔵数が膨大であったため、滞在中に全ての資料に目を通すことは出来なかったが、全てデジタルカメラで撮影してデータを持ち帰ることが出来た。そのデータ数は 1000 を超えており、今後じっくりと読み込み分析を行いたい。

また、本年度の調査によって、アルハンブラには一時的にバレエ学校が存在し、1910 年に廃止された形跡があることが判明した。ただし、それはフランス、イタリア、ロシアが有するような体系的なバレエ学校ではなかったことから、スケッチ紙がロンドンにバレエ学校が存在しないことを嘆く記事を度々掲載する一因になったものと考えられる。また、世界初の体系的教育システムを取り入れた学校とも言われたミラノ・スカラ座バレエ学校出身で、アルハンブラのバレエ・マスターを務めたルチア・コルマーニ[Lucia Cormani]やアルフレッド・クーティ[Alfred Curti]らが、アルハンブラのバレエ学校の再建を求めて、劇場支配人に宛てた意見書を送付していたことも明らかとなった。

さらに、ローシー自身がロンドンでダンス・スタジオを構えて指導にあたっていたことも判明した。1912 年にローシー・ダンス・スタジオが送付した書簡には、指導内容として「クラシカル・ダンス」と「キャラクター・ダンス」の両方が掲げられている。

バレエ史研究者のアイヴァ・ゲストは当時のアルハンブラやエンパイアでのバレエの稽古について「今日的な稽古に比べれば全く不十分であった」と指摘している[3]。当時の実際の公演においても、作品全般に高評価が与えられた一方で、バレエ技術については「今回も残念ながら相変わらずだ」[4]と厳しく評されるなど、テクニックの貧困は、度々問題点として指摘されており、ヴァラエティ・バレエの一側面であったことが窺える。今回得られた資料をさらに分析し、ローシー・ダンス・スクールの実態とともに、当時のロンドンでのバレエ訓練の内実を解明し、ローシーの帝劇でのバレエ指導の視座を検討したい。

今回の調査では、資料の閲覧に加えて、昨年度につづき学芸員のプリッチャード氏より、貴重なローシーと、19 世紀末から 20 世紀における欧州のバレエに関する情報について、直接お話を伺うことができた。そこで得られた情報は、今後筆者が収集した資料を分析・検討する上で大いに貢献する。

なお、今回閲覧した資料からは、エンパイアにおけるローシー、リーヴェに関する新たな情報は確認出来なかった。過去 2 度の海外調査によって得られた情報と併せても、彼らのエンパイアにおける活動期間には、未だ動向が確認できない空白の期間が存在する。彼らがエンパイア、あるいはロンドンにおいて活動していなかった、あるいは既述のダンス・スタジオでの指導が活動の中心となっていた可能性もある。今後、新聞・雑誌記事を読み込むことで情報収集に努めたい。

2-2-2.大英図書館新聞・雑誌記事の収集と閲覧

上記の施設において劇場に関わる貴重な関係資料の閲覧が叶ったが、当時の新聞や雑誌記事も上演作品やローシー夫妻を含めたダンサーに対する評価、また劇場の社会的な位置づけを考察するうえで大変重要な一次資料となる。

ローシーが活動していた当時、ロンドンでは *The Era*、*The Stage*、*The Penny illustrated Paper*、*The Sketch*、*The Illusutrated Sporting and Dramatic News*、*Ally Sloper’s Half Holiday* など、演劇やオペラ公演、パントマイム、ミュージック・ホールやヴァラエティ劇場を主に扱ったり、それらに関する記事を継続的に掲載する新聞・雑誌が多く刊行されていた。

昨年度までに、当時の二大英国エンターテイメント専門新聞であった *The Era*（*Weekly*）と *The Stage*（*Weekly*）、そして *The Penny illustrated Paper*、*The Sketch* の調査を行った。本年度は大英図書館 *British Library* において、上記の 4 紙の不足部分を補うとともに、新たに *The Illusutrated Sporting and Dramatic News* ついて調査を行うこととした。なお、いずれも年代は 1901（明治 34）年から 1912（明治 45）年に限定した。

The Illusutrated Sporting and Dramatic News は、その紙名が示す通りヴィジュアル情報を多く含んだ、スポーツとエンターテイメント情報を中心に扱う新聞である。アルハンブラ劇場やエンパイア劇場のバレエ作品についても、*The Era* や *The Stage* のように文字による批評文が掲載されるとともに、ダンサーや舞台写真、舞台装置や衣裳のスケッチなどが数多く掲載されており、作品の詳細を読み解くのに大きく貢献した。

3.今後の研究へ

以上のように、本調査は移動日および施設の休館日を除いて実質 11 日間と短期間であったが、収穫ある調査となった。

特に、ローシーがロンドンにおいて自らダンス・スクールを開いていたことを示す自筆原稿やアルハンブラ・バレエ・スクールに関わる劇場関係者の書簡によって、当時のロンドンでのバレエ訓練実態の一端が明らかになったことは、ローシーの在日中のバレエ活動の視座を検討するうえで、非常

に重要な知見となる。また、本年度新たにミラノで調査を行ったことで、スカラ座とロンドンのヴァラエティ劇場、そして欧州内外の劇場やミュージック・ホール間におけるダンサーの往来、また上演作品の共通点など、当時のバレエ上演の特徴をより具体的に捉えることができた。

今後は、今回得られた資料を詳細に読み込み、欧州にロシア・バレエが台頭していた世紀転換期の文化的社・会的背景を踏まえつつ分析することで、ローシーが関わったバレエの特徴と評価を読み解き、彼の「バレエ観」が醸成された背景を明らかにしてゆく。

筆者の研究は、近代化の進む大正期日本においてローシーによってもたらされたバレエの特徴を、イタリアやイギリスといった世界のバレエ状況と関連づけながら捉えようとするものである。それは、バレエという一劇場文化の視点からグローバル化の一側面を検討することに繋がる。その意味でも、本調査が国際的な女性リーダーの育成に関わるプログラムの一環として、目的を果たせたものと考える。

本調査で得られた知見は、筆者の博士論文のおそらく第一章と二章に関わるであろう。また、本調査の成果の一部は本年度第 68 回舞踊学会大会（2016 年 12 月 3 日-4 日）で口頭発表を行った。

注

1 「ミュージック・ホール」と称されることも多いが、英国においてミュージック・ホール全盛期となった 19 世紀末から 20 世紀初頭には、歌や踊りに加えて、手品や曲芸など演し物の種類が増え、所謂「ヴァラエティ」を観せる「ヴァラエティ劇場」の呼称が一般化する。

2 *Correspondence between James Glover and Arthur Sturgess and Alfred Moul,* V&A Department of Theatre and Performance, GB 71 THM/75/6/16

3 Guest,1992,55

4 "L'ENTENTE CORDIALE BALLET." *The Era* ,1904.9.3.,21

参考文献

市川雅「世俗的バレエ—エムパイア劇場について—」『女子体育』19 号、pp.50-56、右文館、東京、1977

井野瀬久美恵『大英帝国はミュージック・ホールから』朝日選書　395、朝日新聞社、東京、1990

上野房子「日本初のバレエ教師　G.V.ローシー　来日前の歩みを探る」『舞踊学』第 14 号、pp.1-11、舞踊学会、茨城、1992

上野房子「G.V.ローシー　日本初のバレエ教師　離日後の歩み（1918～1938）」『舞踊学』第 16 号、pp.61-62、舞踊学会、東京、1994

上野房子「アートとショービジネスの間で—ダンス揺籃期ロサンゼルスの G.V.ローシー—」『大正演劇研究』第 8 号、pp.88-103、明治大学大正演劇研究会、東京、2000

鈴木晶『バレエ誕生』新書館、東京、2002

鈴木晶編『バレエとダンスの歴史：欧米劇場舞踊史』平凡社、東京、2012

星野高「帝劇の時代」神山彰編『商業演劇の光芒』pp.51-80、森話社、東京、2014

Christout,Marie-Françoise, *Histoire du ballet* , Presses universitaires de France,Paris,1966（佐藤俊子（訳）『バレエの歴史』白水社、東京、1970）

Craine,Debra&Mackrell,Judith,*The Oxford Dictionary of Dance* ,Oxford University Press,2000（鈴木晶（監訳）『オックスフォード　バレエ　ダンス事典』平凡社、東京、2010）

Reyna,Ferdinando,*Histoire du ballet* ,Editions Aimery Somogy,Paris,1964（小倉重夫（訳）『バレエの歴史』音楽之友社、東京、1974）

Beaumont, Cyril W, *Complete book of ballets : a guide to the principal ballets of the nineteenth and twentieth centuries* , Putnam, London,1956

Cambiasi, Pompeo,*La Scala : 1778-1906 : note storiche e statistiche* , G. Ricordi & C., pref., Milano, 1906

Carter,Alexandra, *Dance and dancers in the Victorian and Edwardian music hall ballet* , Ashgate,Hampshire, 2005

Clarke, Mary&Vaughan, David, *The Encyclopedia of dance & ballet* , Pitman,London, 1977

Guest,Ivor, "Russian Dancers in London Before Diaghileff" ,*The Ballet Annual* No.14,pp.84-89,1960.

Guest,Ivor, *Ballet in Leicester Square* ,Dance Books,London,1992

Guest,Ivor, *Romantic ballet in England* , Dance Books Ltd,London,2014

Haskell, Arnold L, *The national ballet : a history and a manifesto* , A. & C. Black, London,1943

Howard,Diana, *London theatres and music halls : 1850-1950* , the Library association, London, 1970

Perugini, Mark Edward, *The Art of Ballet*, M. Secker, London,1915
Pritchard,Jane,Collaborative Creations for the Alhambra and the Empire,*Dance Chronicle*,Vol.24,No.1, pp.55-82,2001
Pritchard,Jane,Archives of the Dance(24):The Alhambra Moul Collection at the Victoria and Albert Museum, *Dance Research*,32-2,pp.233-257,Edinburgh University Press,2014
Scafidi,Nadia et al.,*La Danza in Italia*,Gremese,Roma,1998
Tintori,Giampiero,*Cronologia:opere-balletti-concerti 1778-1977*,Grafica Gutenberg editrice,Gorle,1979

やまだ　さやか／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

山田小夜歌さんは、G.V.ローシーに関する研究を進めるにあたり、国内において幅広く精力的に調査を行ってきたことにより、これまで明確にされてこなかった彼の在日中の活動の全貌に迫りつつある。ローシーの活動のさらなる究明を通して彼のバレエ観に迫るためには、彼の在日前の足跡を辿り、かつその背景を読み解くことが不可欠となる。

今回の調査では、昨年度に続きヴィクトリア＆アルバート博物館の閲覧室に訪問して、貴重かつ膨大な一次史資料の閲覧及び収集に加え、同館の学芸員より直接情報提供を受けられたことは大きな収穫となった。

また、過去2度の調査を踏まえ、ローシーのバレエの出自を探るべく、イタリアのミラノでも調査を行った。先方の都合により訪問が果たせなかった施設もあった中、ローシーのスカラ座や他の諸外国での活動の一部を解明できたことは大きな成果といえる。本調査で得られた史資料を用いた研究内容は、博士論文の第1章と第2章に関わる重要な部分になるであろう。さらに、この研究を深化させることによって舞踊学への貢献を期待している。

（お茶の水女子大学基幹研究院　文化科学系・猪崎　弥生）

学生海外調査研究	
20世紀のエキュメニカル運動におけるパラダイム転換に関する資料調査	
氏名　前村　絵理	人間発達科学専攻
期間	2016年8月1日～2016年10月1日
場所	スイス・ジュネーブ
施設	WCC（世界教会協議会）の記録保管所

内容報告

1. 問題の所在と研究の目的

グローバル化の進展に伴い、日本再興戦略（平成25年6月14日）の中で、グローバル化に対応する人材力の強化や、高度外国人の活用が唱えられた。また、在留外国人（旧登録外国人）の数は、1993年の132万人から2013年には207万人へと増加している（法務省, 2001；法務省, 2013)。このように日本においても多民族・多文化が進む中で、様々な背景をもつ人びとがいかにして共に生きるかという「共生」が大きな課題であり、共生を可能にする教育が求められている。

ドイツでは、偏見に立ち向かう「アンチバイアス・アプローチ」を理論の柱の一つとして採用し、偏見や差別を幼少期から防止・克服することを目指す「キンダーヴェルテン」プロジェクトが実施された。前村（2015）は、「キンダーヴェルテン」プロジェクトの検討を行い、プロジェクトにおいてフレイレの「対話概念」と「意識化理論」が具体化されていることを明らかにしている。

フレイレ教育思想の重要概念の一つである「意識化」は、BCC（キリスト教基礎共同体）の活動に影響を与えており、そこでは、意識化、聖書の学習、礼拝、相互扶助、そして自分たちの権利を守るための政治活動が一つに結び合わされた。フレイレの考え方が非常に公汎な影響力を持ったのはこのBCCを通してであり、1971年にグティエレスにより理論化された「解放の神学」は、このBCCからくる草の根の経験によって刺激を受けた（Berryman, 1984)。フレイレは、1969年4月から1970年2月までハーバード大学で働いた後、1970年から1980年までの10年間、スイス・ジュネーブにあるWCC（世界教会協議会）[1]で働いている。申請者は2014年度にジュネーブにおける資料調査を実施し、WCCが1973年に開催した「黒人神学・解放の神学シンポジウム」に関する資料から、それまで十分に検討されてこなかったシンポジウム、シンポジウムにおけるフレイレの発題内容、シンポジウム後のメディアの反応に関する検討を行った。その結果、「伝統的な神学が黒人・解放の神学に出会う時」（LeMone, 1973 : 177）と表現されるシンポジウムにおいて、無意識的に抑圧者を支えているナイーブな抑圧者に対して、抑圧者を支えることを止め、被抑圧者と連帯し抑圧構造に挑戦することの必要を訴えることで、フレイレがナイーブな抑圧者の意識変革を試みていたことが明らかになった。WCCは、キリスト教の教派を超えた一致、また諸宗教間の対話により世界の平和と正義を目指すエキュメニカル共同体であるが、フレイレがWCCで活動していた時期は、20世紀のプロテスタントを中心とする教会一致運動であるエキュメニカル運動において、従来の教権主義的なあり方が見直され、抑圧や不正義に立ち向かう姿勢への移行というパラダイム転換が起こっていた時期である。そのため、今回は、フレイレ教育思想への理解をさらに深めるため、エキュメニカル運動のパラダイム転換に着目した資料・文献調査を行った。

2. 調査で明らかになったこと

2.1 エキュメニカル運動のパラダイム転換

エキュメニカル運動の起源は、ヨーロッパとアメリカの産業化によってブルジョワ社会が発展していた時代にさかのぼる。当時、キリスト教宣教は、現地の固有さを無視して自分たちのやり方を押しつける植民地政策と同じようなやり方で西洋（ブルジョワの）キリスト教文明の恵みを残りの人類に伝えることを目指していた。19世紀末の「リベラルな国際主義（liberal internationalism)」という風潮において、キリスト教国には一致のスピリットがあり、キリスト教文明には総体的な一致がある

という確信があり、その確信に基づいて教会間の対話と協力が試みられたのである。当時のスローガンは、「この時代における世界の福音化（the evangelization of the world in this generation）」であり、このスローガンは、初期のエキュメニカル運動の宣教的意識を強調している。純粋な宣教的・福音的動機は文化的・社会的動機と密接に結びつけられていた。つまり、この当時のエキュメニカル運動における一致とは、西洋キリスト教文明の恵みを残りの人類に伝えるための一致を意味していたのである。その後、第一次世界大戦やその余波は、深刻な危機の訪れと同時に新たな始まりをもたらした。帝国君主制の終焉によるヨーロッパにおける従来の勢力均衡の崩壊、ロシア革命、社会の世俗化、世界経済危機、ついにはファシズムの出現といった出来事により、従来のエキュメニカル運動の枠組みは崩れ始めた。

キリスト教と（西洋）文化の古くからの統合が崩壊し始めたため、1937 年と 1938 年には、オックスフォード、エディンバラ、タンバラムにおいて主要なエキュメニカル・カンファレンスが開催され、教会の問い直しや、教会であることの意味について再考していくことがエキュメニカル・パラダイムの中心になった。第二次世界大戦後は、ヨーロッパにおける従来の秩序の崩壊だけではなく、アメリカとソ連という２つの強大な力が世界の覇権を握るようになり、長い間続いていたキリスト教とヨーロッパ文化の連携は終わりを迎えた。また、中国における共産主義革命の勝利は、現代のキリスト教宣教の歴史における野心的な宣教活動に終わりをもたらすというエキュメニカル運動への決定的打撃を与えた。

エキュメニカル運動は、この深刻な危機に、「熱心な神学的省察（intense theological reflection）」によって対応し、歴史を「人類のための神による救済の計画（God's plan of salvation for humankind）」という観点から解釈することにたどり着くことになる。教会の宣教的使命は、「神を宣べ伝える（the *missio Dei*）」ことへの参加であり、教会の一致とは「神から与えられるものであり我々の使命」であり、急速な社会の変化は、「歴史における神の働き（God's action in history）」に参加するための教会への挑戦として理解されるようになった。「キリスト教世界」は、「救済の普遍史（the universal history of salvation）」という観点から人間の条件を理解しようとするようになり、秩序を維持するように作用していた初期のパラダイムの「空間的枠組み（spatial framework）」は、「歴史的枠組み（historical framework）」へ変化した。このように、「世界史」は、イエス・キリストにおける神の決定的行動という観点から、「救済の出来事」として理解されるようになり、キリスト中心的普遍主義（Christocentric universalism）が再発見されたのである。19 世紀の宣教運動の始まりから、1961 年のインド・ニューデリーにおける第三回 WCC 大会でエキュメニカル運動の自己理解が具体化されるまでのエキュメニカル運動の発展は、このキリスト教普遍主義の漸進的な再発見として解釈されうる。エキュメニカル運動が「普遍性（universality）」の段階に突入する機会となったこの第三回 WCC 大会は、西洋諸国以外における初の大会であった。インドは、脱植民地化のプロセスの始まりの象徴であり、民主的な後援のもと人道的社会の発展の象徴であった。インドではヒンドゥー教が主要な宗教であり、インドの教会はごくわずかな少数派だが、このように、いわゆる「若い教会（younger churches）」が、対等なパートナーとしてエキュメニカル運動に加わるようになった。また、ローマ・カトリックからも初めて公的立会人がこの第三回 WCC 大会に参加している。

キリスト中心主義のエキュメニカル運動は、教会の再発見と回復のための運動であるが、教会それ自体を目的としての教会の再発見と回復ではなく、「世界を包括するキリストの救いの業のために選ばれた手段（the chosen instrument for the world-embracing saving work of Christ）」としての教会の再発見と回復のための運動である。神の普遍的な救済の計画への志向が、従来の発展への熱狂に取って代ったのである。そして、キリスト中心的普遍主義の表われとしてのエキュメニカル運動は、救済の歴史と世俗的な歴史の断絶を許さず、全てのクリスチャンに、彼らの普遍的な信仰という観点から、「その時代のしるし（the signs of the times）」を検証するように挑む。来るべき神の国の観点から、神は私たちを、飢餓、苦難、貧困、差別そして抑圧に対抗し、幸福、自由、平等そして兄弟愛を擁護する決断せよと呼んでいる。クリスチャンは、それに加わるために聖霊の力がどこに働くのかを知らなければならない。また、暗闇の力がどこに働くのかを知り、それに抵抗しなくてはならないのである。また、キリスト中心主義と普遍主義の関係は、ニューデリーにおける第三回 WCC 大会からウプサラにおける第四回 WCC 大会にかけて行われた広範囲にわたる WCC スタディ・プログラム「普遍史の時代におけるイエス・キリストの究極性（The Finality of Jesus Christ in the Age of Universal History）」の中心的課題であった。このようなエキュメニカル運動のパラダイム転換の最中、フレイレは WCC へ招聘され、1970 年から 1980 年までの間、WCC の教育局で主要メンバーの一人として働くことになるのである。

（資料：元 WCC 総主事 Konrad Reiser の"Ecumenism in Transition"より）

2.2 エキュメニカル運動と教育

2.2.1　WCC における教育局の設立

WCC の設立時（1948 年）には教育局は存在しなかった。その理由は以下の四点である。第一に、すでに IMC（国際宣教協議会）、YWCA（キリスト教女子青年会）、YMCA（キリスト教青年会）、WSCF（世界学生キリスト教連名）、WCCE（世界キリスト教教育協議会）がすでに存在していたため、帝国主義的にならないために WCC に教育局を設置しないことは政治的に重要だった。第二に、宣教と教育の関係が崩壊していた正教会と細心の注意を要する関係にあったため。第三に、とりわけアメリカとイギリスにおける WCCE の教育思想がヨーロッパにおいても考慮されるようになったが、ヨーロッパの教会は教育を社会構造と同一視していたため、その適応は非常に複雑なものであった。また、教育は教会の優先事項にはなっていないことは確かだった。第四に、アメリカにおいて 1940 年代と 1950 年代においてなされたように、ヨーロッパにおいても弁証法神学（dialectical theology of Christian education）によるキリスト教教育への批判[1]がなされたことも、WCC の設立当時に教育局が設置されなかった理由の一つである。

しかし、その後、WCCE がその問題意識を広げたこと、また、1961 年の IMC との合併後に WCC が教育的問題に遭遇したことで、WCCE と WCC の提携の強化が必要になった。エキュメニカル教育の必要性がますます明白になり、WCC 同様、エキュメニカル教育も認識され、理解され、支援される必要が出てきたのである。そこで、WCC は 1968 年にスウェーデン・ウプサラにおいて開催された第四回 WCC 大会において教育局を設置し、WCCE と WCC の統合に動き出したのである。

（資料：The Background of the Office of Education, WCC, Box No. 4235.2.1.1/3 より）

2.2.2　WCCE（世界キリスト教教育協議会）と WCC（世界教会協議会）の統合

WCCE（世界キリスト教教育協議会）は、もとは世界日曜学校連盟と呼ばれていたが、1907 年に正式にエキュメニカルな国際日曜学校協議会の後継者となった。最初は日曜学校に重点が置かれていたが、その働きは徐々に広げられ、青年活動、平日学校（day school）における信仰生活、学問、家族教育、成人教育、また信徒訓練を含むようになった。さらに、キリスト教教育は一般教育（general education）と確かに関係があると考えられるようになってきた。

WCCE と WCC は、イエス・キリストの福音に応じて、変化と対立の世界において、すべての人が神の被造物として十分に責任をもって人間の自由を遂行するのを促進する教育のあり方を模索する。エキュメニカル史における今まさにこの瞬間、WCC と WCCE は、教育分野において特別な義務を負っている。その義務とは、人類の未来を気にかける人々とともに、対話、共同体、そして奉仕に従事し、彼らとともに、人としての成長・成熟、社会正義、そして国際平和のために尽力することである。分離した存在であることはもはや何の意味もない。教育における変化が各協議会にその教育的視野と活動を広げることを強いている時、また教育的な働きのためのより良い一体化したエキュメニカルな機関が求められている時、そして教育的活動全般において責任のある管理実践が教会に求められている時に、従来のままの分離した状態であり続けようとしてはならない。WCCE の豊かな伝統を WCC にもたらすことは、教会の教育者（church educators）に、今後、キリスト教教育という職務において共有していく非常に良い機会を与える。

（資料：A plan for the integration of the WCCE with the WCC, Box No. 4235.2.1.1/1 より）

2.2.3　教育局の第一回協議会　報告書“*Seeing Education Whole*”

WCC の教育局は、1970 年にオランダ・ベルゲンにおいて、「世界の教育的危機と教会の貢献（The world educational crisis and the Church's contribution)」というテーマのもと第一回協議会を開催した。11 カ国からの教会のリーダー、教育者、ジャーナリストの代表が集まり、現在の教育計画をユネスコの専門家とともに分析した。そして、WCC に対して、教会をサポートし、彼らの教育的活動を再評価することを要求した。この第一回協議会の報告書 *Seeing Education Whole* は、さらに広い視野が教育の再考と再構築のために必要とされていることを提示している（Kennedy, 1975）。教育局は、「キリスト教教育」「一般教育」「神学教育」という三つの分野を課題として扱う。キリスト教教育の担当は William B. Kennedy、神学教育の担当は Werner Simpfendoerfer、そして、一般教育の担当になったのがフレイレであり、この三人の担当者は一体となって働くことが要求された。

教育局によると、自由な人間と責任ある市民の育成という教育の伝統的な目標は重要であるが、そこには曖昧さがある。教育は、「解放（liberation)」か「飼い馴らし（domestication)」のどちらかであり、中立的な教育というものはない。そして、人々への教会の影響も、決して中立的なものであってはならない。教会は、社会の意思決定過程における教会の政治的意義を認識し、自由のための教育に従事している他団体と連携しなければならない。

（資料：Seeing Education Whole, Box No. 4235.2.3.1/28 より）

3. まとめ

従来の植民地主義的な宣教のあり方を反省し、キリスト中心的普遍主義へとシフトしたエキュメニカル運動において、教会自体に重点を置くのではなく、「世界を包括するキリストの救いの業のために選ばれた手段」としての教会の再発見と回復が目指されることになった。そして、キリスト中心的普遍主義の表われとしてのエキュメニカル運動は、救済の歴史と世俗的な歴史の断絶を許さず、この世界における飢餓、苦難、貧困、差別、抑圧に対抗し、幸福、自由、平等、兄弟愛を擁護することをクリスチャンに求めるのである。このように、不正義や抑圧に対して立ち上がり、抑圧のない世界をつくり出していくために行動するというあり方は、フレイレの提唱する「預言的教会」、その教育的役割と一致する。

また、その時期に、WCC における教育局の設置（1969）や WCC と WCCE の統合（1970-1972）といった出来事があり、教育に関する大きな動きがあったこと、また、WCC と WCCE の統合に向けて設置された教育局の主要メンバー三人のうちの一人としてフレイレが WCC に召還されていたことが今回の調査で明らかになった。教育局は、世界の教育的危機に教会が貢献するために、教育的活動を再評価し、さらに広い視野をもって教育の再考と再構築をしていくことが必要であることを提示している。また、教育局は、中立的な教育がないことを強調し、解放のための教育を目指した。教育局において 1970 年から 1980 年までの間働いたフレイレは、この 10 年間の働きについて「教育局を常に代表して活動していた（Freire, 1977：1)」 と述べている。このことから、フレイレ教育思想研究において、WCC と WCCE の統合、教育局、そして教育局におけるフレイレについてさらに理解を深めることが重要である。そこで、教育局の設置が宣言された第四回 WCC 大会における教育に関する記述や、教育局がオランダ・ベルゲンにおいて開催した第一回協議会におけるフレイレのスピーチ（タイトル：「解放の証人（Witness of Liberation)」）や、報告書“Seeing Education Whole”のさらなる検討を今後行っていく。本調査研究は、来年 1 月にハワイ・ホノルルで開催されるハワイ国際教育学会において発表する予定である。

注

1. 正教会、聖公会、バプテスト教会、ルター派教会、メソジスト教会、改革派教会、合同教会、復古カトリック教会、聖トマス教会、メノー派教会、友会徒教会、会衆派教会、使徒教会が含まれる。また、WCC はローマ・カトリック教会との公式的な働きにおける関係や、まだ構成員ではない福音派やペンテコステ派教会との新たに発生した関係もある。
2. 人間の本性に関してあまりにも楽観的だったそれまでの神学に対して、カール・バルトをはじめとするドイツ人牧師たちにより「危機神学」（「弁証法神学」とも呼ばれる）が生まれた。彼らの神学によると、人間の内にある欲望によって作り出された第一次世界大戦後の惨憺たる廃墟という現実に立脚し、人間本性は言うにおよばず、彼らが生きている社会も罪によって徹底的に堕落してしまっているので、説教や教育を媒介として個人や社会の成長が企図され、それが可能であると考えるのは、全く誤っているということであった。そして、人間の救いとは、瞬間瞬間人間の中にはいって来、われわれを再創造する神の霊に自らを委ねる以外になしとげられないという主張であり、教会の責任とは、この世の罪と悪に対して、預言的姿勢をもち、「正しい」「間違っている」ということをはっきり語りつつ、こうした信仰的決断に立って、再創造の福音を宣教することである（文，1975)。

参考文献

法務省（2001）平成13 年末現在における外国人登録者統計について
http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/press_020611-1_020611-1.html（2014.05.15 アクセス）
法務省（2013）在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表
http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001118467（2014.05.15 アクセス）
前村絵理（2015）「幼少期における異文化間教育」『お茶の水女子大学子ども学研究紀要』3，61-70.
文東煥（小杉尅次訳）（1975）『人間解放とキリスト教教育』新教出版社.
Berryman, F. (1984) “Basic Christian Communities and the Future of Latin America”, *Monthly Review*, 36(3), 27-40.
Kennedy, William B. (1975) “Education in the World Ecumenical Movement”, *the Ecumenical Review*, 27(2), 147-156.
LeMone, A. (1973). Reports on a Symposium: When Traditional Theology Meets Black and Liberation Theology.

Christianity and Crisis, 33, 177-178.
Raiser, K. (1991) *Ecumenism in Transition: A Paradigm Shift in the Ecumenical Movement?,* Geneva: WCC.

ボックスナンバーとコンテンツ

Box no.	4235.2.1.1/3	The Background of the Office of Education
		Office of Education in the First Year (1969-1970)
Box no.	4235.2.1.1/1	A plan for the integration of the WCCE with the WCC
Box no.	4235.2.3.1/28	Seeing Education Whole
		-Paulo Freire : Witness of Liberation
		-Do you agree? Working Hypothesis-Office of Education of WCC
Box no.	34.5/14/1	The Purpose and Function of Education, Forth Assembly
Box no.	34.5/14/3	Report to the Assembly of the Committee on Education

まえむら　えり／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　人間発達科学専攻

指導教員によるコメント

前村さんは、博士後期課程において、修士論文で注目したフレイレの思想をさらに深める研究を続けています。一昨年はスイス・ジュネーブにおいて、昨年はドイツ・ミュンヘンにおいて資料調査を行い、収集した資料の分析を通して、フレイレ思想とキリスト教のつながりを明らかにしました。そして、研究をさらに進めていく中で、諸教会の一致を目指すエキュメニカル運動のパラダイム転換期にフレイレが WCC（世界教会協議会）で働いていたことが分かりました。そこで今回は、スイス・ジュネーブにある WCC の記録保管所を再訪し、エキュメニカル運動のパラダイム転換への理解を深めるための資料調査を行いました。重要な資料を収集することができ、パラダイム転換や、その当時の教育の動きへの理解も深めることが可能となりました。さらに、フレイレが働いていた教育局に注目し、その関係資料を分析していくことで、今後のフレイレ教育思想研究のさらなる発展が期待されます。

（人間文化創成科学研究科人間科学系・小玉亮子）

学生海外調査研究	
明治期における日独通商・外交の研究	
氏名　松居　宏枝	比較社会文化学専攻
期間	2016 年 12 月 12 日～2016 年 12 月 29 日
場所	ドイツ連邦共和国(ベルリン、ハンブルク、キール)
施設	ベルリン自由大学、ドイツ外務省政治文書室、ドイツ連邦文書館ベルリン、ベルリン州立図書館、ハンブルク州立図書館、シュレースビッヒ＝ホルシュタイン州立図書館、エッケルンフェルデ博物館

内容報告

1. はじめに

執筆者の研究における、本調査の位置づけについて述べておきたい。執筆者は、19 世紀後半における日本とドイツの外交、通商関係を明らかにすることをめざして研究を行っている。そして、今回中心となる調査課題は次の三点である。第一点目は、博士論文の第 3、4、5 章で利用するドイツ連邦共和国シュレースビッヒ＝ホルシュタイン州立図書館所蔵の“Der japanische Nachlaß Lorenz von Steins”(以下、「日本関係シュタイン文書」)の調査である。第二点目は、博士論文の補論となる、鉄道資材購入をめぐる対独外交についての調査。そして第三点目は、現在次の課題と考えている、ドイツ商会・商人の日本における活動についての予備調査である。上記三点の調査の目的、意義(2.1)、調査方法(2.2)、調査成果(3)については項目を立て、そこで詳細にする。

2. 研究概要

2.1 調査の目的、意義

2.1.1 「日本関係シュタイン文書」について

博士論文では特に、ローレンツ・フォン・シュタインに着目し、シュタインと明治政府の関係について、外交的側面からアプローチしている。その方法によって、日本人がなぜシュタインを必要とし、彼の学説をどのように理解し受容したのか、日本とドイツ、オーストリアなどの史料を使用して考察を行ってきた。

博士論文に利用する、シュタインに関する史料の収集、分析は完了している。その中心の一つをなしているのが、シュタインに宛てた日本人の書簡「日本関係シュタイン文書」である。執筆者は、平成 22 年度お茶の水女子大学「女性リーダーを創出する国際拠点の形成」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの援助によって、ドイツ連邦共和国シュレースビッヒ＝ホルシュタイン州立図書館所蔵の「日本関係シュタイン文書」の閲覧および複写の機会を得た。当該史料はこれまでにも多くの研究者が閲覧し、利用している[1]。またその史料の一部は、複製として国立国会図書館憲政資料室に「シュタイン関係文書」として所蔵されている。このように、一部翻刻した史料や複製を利用することは可能であるが、現文書を閲覧できたことは非常に有益であった。

その後、全体的に翻刻を行った柴田隆行編集・判読『ローレンツ・フォン・シュタインと日本人との往復書翰集』が出され、執筆者の研究は各段に進んだ。しかしながら、手書き文書の書き起こし作業から生じる誤記や誤読、また執筆者の前回の調査で未調査の点もあり、同史料を再見し、異同を正す必要があった。そこで同史料の再調査を、本調査での目的の一つとした。

2.1.2 鉄道資材購入をめぐる対独外交について

本調査の課題の一つ、鉄道資材購入をめぐる対独交渉について解明する手がかりとして、ドイツの日本関係外交文書に着目している。

19 世紀後半の日本とドイツの通商関係については、研究的に空白の部分が多い。執筆者が進めているドイツからの鉄道資材購入問題についても、日本とイギリスとの外交・経済研究の中で、イギリスの外交文書に表出するドイツ側の行動が指摘されるに過ぎなかった。これらは偏に、日本における諸外国の日本関係外交文書の公開状況とも大きくかかわっている。例えば、アメリカ、イギリス、フラ

ンスの日本関係外交文書の中心的なものは、現在日本で閲覧が可能である [2]。一方、ドイツの外交文書は、戦前に今宮新氏が収集した東京大学史料編纂所所蔵、通称「今宮新氏採訪日独外交関係文書」において、幕末期の史料の一部をみることができる程度にとどまっている。これらの理由としては、ドイツの外交文書の史料公開状況が関係している。

第二次世界大戦後、ドイツ外務省の各局史料は東西両陣営によってそれぞれ接収された。東西ドイツに返還後も両国の分断によってその所蔵先も分断されたままであった。東西ドイツ統一後、その公開状況がさらに再編され、近年になりようやく史料利用の便が向上した。そうした意味でも、日独外交・通商関係研究においてドイツ側の史料を利用した研究を行うことは、日本やイギリスの外交文書を中心に進められてきた研究に新しい視点をもたらすことが可能となる。ドイツの外交文書の調査、収集、研究に関しては、五百旗頭薫氏らによって、科研費基盤研究(B)「ドイツにおける対日外交文書の収集と利用可能性」(2013～2015 年度)としてすすめられている。その成果の一部として、執筆者は 2016 年 3 月に「1880 年代後半の対独政策－九州鉄道株式会社資材購入を中心に－」と題した報告を行っている。

執筆者は、研究を発展させるためにも、ドイツの外交文書の調査を継続する必要がある。

2.1.3 日本におけるドイツ商会・商人について

イリス商会(クニフラー商会)は日本で創業し、後にハンブルクに本社をうつした。創業者の一人であるギルデマイスターの書簡を中心に、その動向を明らかにした生熊文編訳『ギルデマイスターの手紙』はドイツ語史料を使用し、研究上の大きな画期となった。その後、向井晃「イリス商会」、笠井雅直「研究ノート 幕末・維新期におけるクニフラー商会の貿易活動」が出された。これらは主に、イリス商会の社史を参考にしている。イリスの社史は、これまで創業 100 周年と 150 周年を記念してそれぞれ出された。100 周年には、Käthe Molsen: *C.Illies & Co. 1859-1959.*とその邦訳である、イリス商会『イリス商会創業百年史』があり、150 周年には、Johannes Bähr, Jörg Lesczenski, Katja Schmidtpott: *Handel ist Wandel.*が出版された。

ハンブルクのイリス商会の本社の史料を利用しているのは、管見の限り、2009 年に出版された 150 周年社史と、橘川武郎「日本の近代化とドイツ商人」、そして、展示カタログ「イリス 150 周年近代日本と共に歩み続ける或るドイツ商社の歴史展」である。

また、イリス商会以外の商会については、ディルク＝ファン＝デア＝ラーン「幕末・明治期の横浜のドイツ商社」において、その概要が示されている。一説によれば、ドイツ系商会は、1898(明治 31)年には、神戸と横浜を合わせて約 40 社が存在したと言われている [3]。

イリス商会以外で研究が進展してきているのは、アーレンス商会である。工芸・美術品輸出会社としてのアーレンス商会に着目した最近の研究に、今井祐子『陶芸のジャポニスム』がある。

以上の点から、19 世紀後半日本で展開したドイツ系商人の活動については不明な点が多く、研究の余地があると言える。また、イリス商会のように日本で創業し、のちにドイツに本社を移した企業が史料を有している可能性が高い。そして、その他の企業や商業団体についても未見の社史や研究が存在していると考えられる。そのため、ドイツ系商会が日本でどのような事業を展開したのかその実態を探るためにも、ドイツにおける企業側の史料や商業団体について手がかりを得る必要がある。

2.2 調査方法

2.2.1「日本関係シュタイン文書」について

シュレースビッヒ＝ホルシュタイン州立図書館所蔵の「日本関係シュタイン文書」を閲覧し、語句の異同を修正した。閲覧に際しては、日本よりメールにて申請を行った。

2.2.2 鉄道資材購入をめぐる対独外交について

ドイツからの鉄道資材の購入については、現在のところドイツの日本関係外交文書がもっとも有用である。その移管状況については、*A catalogue of files and microfilms of the German Foreign Ministry archives 1867-1920.*[5] に詳しい。そして現在、ドイツで日本関係外交史料を所蔵している主だった館は、ベルリンにあるドイツ外務省政治文書室、プロイセン枢密文書館、ドイツ連邦文書館ベルリン [4] の三館である。政治文書館には、1867 年以降のドイツ帝国外務省政治局の史料、個人文書、駐日領事史料などがあり、プロイセン枢密文書館には 1867 年以前のプロイセン時代の史料がある。そして、ドイツ連邦文書館ベルリンには、1867 年以降のドイツ帝国外務省通商政策局、法務局、管理局史料が所蔵されている。所蔵先が分かれていることには、戦後の東西分裂とその際の史料接収、そして東西統一が影響した。そのため、それらの史料の移管が終了し、データベースが作られたのは近年の出来事である。

こうしたことからも、ドイツの日本関係外交文書が利用できるようになった今、これらの史料を使用して研究を行うことは、非常に重要である。今回は、ドイツ連邦文書館に加え、外務省政治文書室

の史料調査を中心に行った。

2.2.3 日本におけるドイツ商会・商人について

ドイツにおいて、19 世紀後半に日本で事業を展開した企業について調査するため、現在も事業を継続している C. Illies & Co.(イリス商会)、Simon, Evers & Co. GmbH(シモン・エバース商会)へ、企業史料の情報を得るためのアポイントを申し込んだ。

また、イリス商会の 150 周年社史を執筆した、ベルリン自由大学 Katja Schmidtpott 教授に面会し、ドイツ系商会の企業史料へのアプローチに方法について御教授いただくとともに、情報提供をお願いした。

3. 調査成果

3.1 日本関係シュタイン文書について

「日本関係シュタイン文書」の調査は、語句の異同を修正することができ、充実した内容となった。また、シュタインの故郷のエッケルンフェルデ博物館において、シュレースビッヒ＝ホルシュタイン州立図書館所蔵資料によって構成されるシュタインに関する常設展示を観ることができた。文字史料のみでは得られない、その土地の雰囲気を体験できたことは、貴重であった。

3.2 鉄道資材購入をめぐる対独外交について

今回の調査では、これまで閲覧・収集してきた史料に加え、外務省政治文書室で日本の鉄道に関する簿冊を発見した。これは、日本の鉄道資材の発注先はイギリスが中心であった中で、なぜドイツへの発注に切り替わったのか、そしてドイツへ発注したのはどのような経緯であったのか、などを明らかにすることができる重要な史料群であった。今回、史料を閲覧、複写することができた。ここでの成果をもとに、現在『鉄道史学』への投稿論文を準備している。

3.3 日本におけるドイツ商会・商人について

調査に際し、日本から C. Illies & Co., Simon, Evers & Co. GmbH へ、メールにてアポイントを取ったがいずれも返答を得られなかった。そこで執筆者は、イリス商会の 150 年社史を執筆したベルリン自由大学のシュミットポット教授に面会し、史料についての情報を得た。ここでその内容は詳しくしないが、シュミットポット教授の情報は、今後の執筆者の研究にとって非常に有益な情報であり、貴重な情報提供をいただいた。

企業史料に直接アプローチする以外の方法として、その他のドイツ系商会についての社史や研究を閲覧、収集する調査を行った。その結果、ベルリン州立図書館とハンブルク州立図書館において、シモン・エバース商会の社史やハンザ都市商人の東アジアでの活動についての研究論文などを得ることができた。これらからは、ハンザ都市ブレーメン、およびハンブルクの商人がどのように日本へ渡り事業を展開したのかということについての新しい情報が得られた。また、商人同士のネットワークや、についても多くの知見が得られた。

さまざまな事情から、ドイツ系商会の企業史料を閲覧することが難しいとしても、これまで研究されていないドイツ系商会についてドイツ側の文献を調査することや、外交文書を中心とする公文書を研究することは非常に有意義であることが分かった。また、日本におけるドイツ系商会は、ドイツのクルップなどの機械製造会社や化学薬品会社などの代理店として活動しており、それら本会社は現在も企業史料室を有している場合があり、本会社史料からのアプローチも今後行っていきたい。

4. まとめと展望

本調査で得られた知見は、博士論文を詳細にするだけではなく、その後の研究内容を展望できるものとなった。また、鉄道に関しては、近日中に『鉄道史学』へ投稿する予定があり、重要な史料を得ることができた。ドイツ系商会の調査では、博士論文と今後の研究課題とを接続するに充分な予備調査を行うことができた。また、ベルリン自由大学のシュミットポット教授との面会によって、史料情報を得たばかりでなく、今後の研究交流についても発展的な議論を交わすことができた。

また、キールのシュレースビッヒ＝ホルシュタイン州立図書館で、「日本関係シュタイン文書」を閲覧中に、地元ラジオのインタビューを受けた。日本からシュタイン文書を閲覧に来た者として、その図書館の重要性について話し、後日放送されるという僥倖にも恵まれた。

今回の調査は、ドイツの史料を使用して研究を行う執筆者の研究にとって、なくてはならないものであり新史料の発見にも恵まれた。そしてその成果は、調査に基づく論考として、近く公表する予定も伴っている。こうした物質的な成果のみならず、シュミットポット教授やシュレースビッヒ＝ホルシュタイン州立図書館のマンスケ氏など､活躍する女性研究者､アーキビストとの面会できたことは、執筆者に大きな刺激となった。そうした点からも、国際的な女性リーダーの育成に関わる本調査研究の目的は、達成されたといえる。今後は、本調査で得られた人とのつながりや、史料、情報をもとに

研究をさらに発展させていきたいと考える。

5. 謝辞

本調査の遂行にあたっては、お茶の水女子大学文部科学省特別経費「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」プロジェクト「学生海外派遣」プログラムの援助をいただきました。大変貴重なご支援を賜りましたこと、ここに記し御礼申し上げます。

また、今回貴重な情報をいただきましたベルリン自由大学の Frau Prof. Dr. Katja Schmidtpott、史料の便宜をはかってくださったシュレースビッヒ＝ホルシュタイン州立図書館の Frau Dr. Maike Manske と Herr Dr. Ahlers、そしてご指導いただいております小風秀雅教授、新井由紀夫教授にこころより御礼申し上げます。

注

1. 色川大吉『新編明治精神史』中央公論社、1973
   萩原延寿『日本の名著第 35 巻 陸奥宗光』中央公論社、1973
   Boockmann, Andrea: *Lorenz von Stein(1815-1890). Nachlaß, Bibliothek, Biographie.* In: Berichte und Beiträge der Schleswig-Holsteinischen Landesbibliothek, Kiel 1980.
   Taschke, Heinz: *Der Nachlass Lorenz von Stein's in Kiel.* In: Zugleich ein Beitrag zur Wissenschaftsbiographie. Der Staat. Vol. 21, No. 2 (1982), S. 258-276.
   早島瑛「ローレンツ・フォン・シュタインと明治憲法の制定」(関西学院大学『商學論究』 27(1/2/3/4), 1980)
   同、「ローレンツ・フォン・シュタインに宛てた福沢諭吉書簡について」(近代日本研究会編『年報・近代日本研究』、山川出版社、1980)
   水田 洋「須多因先生――マルクスの先駆者で伊藤博文の顧問」、「須多因先生後記――キールのシュタイン文書」(『知の風景』、筑摩書房、1988)
   Zöllner, Reinhard: *„Appreciating critic" Lorenz von Steins Japan-Korrespondenz Auswahl und Kommentar.* In: NOAG(Hamburg), 147-148(1990), S. 9-71.
   ------------: *Lorenz von Stein in Japan.* In: (Hrsg.) Albert von Matius, Akademischer Festakt zum 100. Todestag. Heidelberg: v. Decker's, 1992.
   ------------: *Die „Steinschen Schriften" des Kawashima Siun(Jun).* In: (Hrsg.) Brauneder/Nishiyama, Lorenz von Steins „Bemerkungen über Verfassung und Verwaltung" von 1898 zu den Verfassungsarbeiten in Japan, Frankfurt a.M 1992, S.61-67.
   柴田隆行「ローレンツ・シュタイン文書について」(『社会思想の窓』NO.100、「社会思想の窓」刊行会、1992)
   Nawrocki, Johann: *Der japanische Nachlaß Lorenz von Steins.* In: Oriens Extremus , Vol. 36, No. 1 (1993), S. 83-113.
   市村由喜子「ローレンツ・フォン・シュタイン日本関係文書について」(山住正己編『文化と教育をつなぐ』、国土社、1994)
   Schenck, Paul-Christian: *Derdeutsche Anteil an der Gestaltung des modernen japanischen Rechts- und Verfasungswesens.* Franz Steiner Verlag Stuttgart, 1997.
   Takii Kazuhiro(Hrsg.): *Lorenz von Steins arbeiten für Japan.* Frankfurt am Main ; Berlin, Peter Lang, 1998.
   瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制ーシュタイン国家学の軌跡ー』ミネルヴァ書房、1999
   Taschke, Heinz: *Lorenz von Stein und Japan.* In: Quellen zur Verfassungs- und Verwaltungsgeshichte Nr.21, Lorenz von Stein Institute für Verwaltungswissenschaften an der Christian Albrechts Universität zu Kiel, 2005.
   Takii Kazuhiro: *The Meiji Contitution.* In: The Japanese Experience of the West and the Shaping of Modern State. International House of Japan, 2007.
   執筆者の調査以降は、柴田隆行編集・判読「ローレンツ・フォン・シュタインと日本人との往復書翰集」2011 や、市村由喜子「ローレンツ・フォン・シュタイン日本関係文書研究の課題 ：エルンスト・フォン・シュタイン文書と関連して」(大東文化大学大学院文学研究科教育学専攻『教育学研究紀要』 (2), 1-14, 2011)、Takii Kazuhiro: Savignynähe und Savigykritik.-Entstehung und Tragweite der Staatswissenschaft Lorenz von Stein. In: Stefan Koslowski(Hrsg.): *Lorenz von Stein und der Sozialstaat.* Baden-Baden, Nomos, 2014. が出されている。
2. 例えば、横浜開港資料館所蔵のアメリカ、イギリス、フランス、中国の外交文書の複製本、国立国会図書館憲政資料室所蔵のイギリス外交文書 FO46、東京大学史料編纂所所蔵の「日本関係海外史料マイクロフィルム」などがある。

3. カティヤ・シュミットポット「第一次大戦以前の独日貿易」(日独交流史編集委員会編『日独交流 150 年の軌跡』雄松堂書店、2013、49 頁)
4. ドイツ連邦文書館にはほかに、写真映像を中心に所蔵しているコブレンツ館と、軍事関係史料を所蔵しているフライブルク館を持っている。ドイツ連邦文書館ベルリンには、外交文書のほか、大蔵省、帝国官房、植民地省、帝国議会関係や DDR、諸政党の史料が所蔵されている。
5. American Historical Association. Committee for the Study of War Documents.: *A catalogue of files and microfilms of the German Foreign Ministry archives 1867-1920.* [Washington] 1959.

参考文献

生熊文編訳『ギルデマイスターの手紙－ドイツ商人と幕末の日本』有隣堂、1991

市村由喜子「ローレンツ・フォン・シュタイン日本関係文書について」(山住正己編『文化と教育をつなぐ』、国土社、1994)

市村由喜子「ローレンツ・フォン・シュタイン日本関係文書研究の課題 : エルンスト・フォン・シュタイン文書と関連して」(大東文化大学大学院文学研究科教育学専攻『教育学研究紀要』 (2), 1-14, 2011)

今井祐子『陶芸のジャポニスム』名古屋大学出版会、2016

イリス商会編『イリス商会創業百年史－日独貿易史に対する一寄与』(社史でみる日本経済史、第 71 巻、ゆまに書房、1960 初版 2014 復刻)

色川大吉『新編明治精神史』中央公論社、1973

笠井雅直「研究ノート 幕末・維新期におけるクニフラー商会の貿易活動－ドイツ・イリス商会前史—」(『商学論集』第 62 巻第 1 号、1993)

カティヤ・シュミットポット「第一次大戦以前の独日貿易」(日独交流史編集委員会編『日独交流 150 年の軌跡』雄松堂書店、2013)

橘川武郎「日本の近代化とドイツ商人—日本で生まれたドイツ商社＝イリス商会の幕末・明治期における事業展開」(『一橋商学論叢』Vol.4, No.2, 2009, pp.2-21)

柴田隆行「ローレンツ・シュタイン文書について」(『社会思想の窓』NO.100、「社会思想の窓」刊行会、1992)

柴田隆行編集・判読「ローレンツ・フォン・シュタインと日本人との往復書翰集」2011

鈴木楠緒子『ドイツ帝国の成立と東アジア－遅れてきたプロイセンによる「開国」－』ミネルヴァ書房、2012

瀧井一博『ドイツ国家学と明治国制－シュタイン国家学の軌跡－』ミネルヴァ書房、1999

ディルク＝ファン＝デア＝ラーン「幕末・明治期の横浜のドイツ商社」(『横浜居留地と異文化交流－19 世紀後半の国際都市を読む－』山川出版社、1996)

萩原延寿『日本の名著第 35 巻 陸奥宗光』中央公論社、1973

早島瑛「ローレンツ・フォン・シュタインと明治憲法の制定」(関西学院大学『商學論究』 27(1/2/3/4), 1980)

同、「ローレンツ・フォン・シュタインに宛てた福沢諭吉書簡について」(近代日本研究会編『年報・近代日本研究』、山川出版社、1980)

福岡万里子『プロイセン東アジア遠征と幕末外交』東京大学出版会、2013

水田 洋「須多因先生——マルクスの先駆者で伊藤博文の顧問」、「須多因先生後記——キールのシュタイン文書」(『知の風景』、筑摩書房、1988)

向井晃「イリス商会」(横浜居留地研究会編『横浜居留地の諸相』横浜開港資料館、1989)

展示カタログ「イリス 150 周年近代日本と共に歩み続ける或るドイツ商社の歴史展」(横浜美術館、2009)

American Historical Association. Committee for the Study of War Documents (pub.): *A catalogue of files and microfilms of the German Foreign Ministry archives 1867-1920.* [Washington] 1959.

Boockmann, Andrea: *Lorenz von Stein (1815-1890). Nachlaß, Bibliothek, Biographie.* Berichte und Beiträge der Schleswig-Holsteinischen Landesbibliothek, Kiel: Schleswig-Holsteinische Landesbibliothek, 1980.

Bähr, Johannes, Jörg Lesczenski und Katja Schmidtpott: *Handel ist Wandel: 150 Jahre C. Illies & Co.* München: Piper, 2009.

Mathias-Pauer, Regine und Erich Pauer: *Die Hansestädte und Japan, 1855-1867.* Marburg: Förderverein Marburger Japan Reihe, 1992.

Molsen, Käthe: *C.Illies & Co. 1859-1959: Ein Beitrag zur Geschichte des deutsch-japanischen Handel.* Hamburg: Merkur,1959.

Nawrocki, Johann: „Der japanische Nachlaß Lorenz von Steins“. In: *Oriens Extremus*, Vol. 36, No. 1 (1993), S. 83-113.

Schenck, Paul-Christian: *Der deutsche Anteil an der Gestaltung des modernen japanischen Rechts- und Verfasungswesens.* Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1997.

Takii Kazuhiro (Hrsg.): *Lorenz von Steins Arbeiten für Japan.* Frankfurt am Main, Berlin: Peter Lang, 1998.

------------: *The Meiji Constitution: The Japanese Experience of the West and the Shaping of Modern State*. Tokyo: International House of Japan, 2007.
------------: „Savignynähe und Savignykritik: Entstehung und Tragweite der Staatswissenschaft Lorenz von Steins“. In: Stefan Koslowski (Hrsg.): *Lorenz von Stein und der Sozialstaat*. Baden-Baden: Nomos, 2014, S.42-63.
Taschke, Heinz: „Der Nachlass Lorenz von Stein's in Kiel: Zugleich ein Beitrag zur Wissenschaftsbiographie“. In: *Der Staat*. Vol. 21, No. 2 (1982), S. 258-276.
Taschke, Heinz: *Lorenz von Stein und Japan*. Quellen zur Verfassungs- und Verwaltungsgeschichte Nr. 21, Lorenz von Stein Institut für Verwaltungswissenschaften an der Christian Albrechts Universität zu Kiel, 2005.
Zöllner, Reinhard: „‚Appreciating critic' Lorenz von Steins Japan-Korrespondenz Auswahl und Kommentar“. In: *NOAG* (Hamburg), 147-148 (1990), S. 9-71.
------------: „Lorenz von Stein in Japan“. In: Mutius, Albert v. (Hrsg.): *Lorenz von Stein (1890-1990): Akademischer Festakt zum 100. Todestag*. Heidelberg: v. Decker's, 1992.
------------: „Die ‚Steinschen Schriften' des Kawashima Siun(Jun)“. In: Brauneder Wilhelm und Kaname Nishiyama (Hrsg.): *Lorenz von Steins „Bemerkungen über Verfassung und Verwaltung“ von 1898 zu den Verfassungsarbeiten in Japan*. Frankfurt a.M: Peter Lang, 1992, S.61-67.

まつい　ひろえ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

本研究調査は、これまでの明治期日独関係研究における問題点、すなわち、日本側の史料によるところが大きく、いまだ史料的空白が多く存在している、という点について、日本側の史料からは得られない情報がドイツ側の史料から得られるという点を埋める可能性を秘めたものとして評価されると思われる。

今回のドイツでの調査は新史料の発見にも繋がり、これまでの日本側の史料に加え、ドイツ側の研究や一次史料を踏まえた研究を行うことができ、有意義であったとの報告を受けている。

ただ、実施の時期が、博士論文提出後であり、この調査の成果が盛り込めなかったこと、また博士論文の修正・改善のための指導の時間が半減し、十分な修正・改善の時間が取れなかったことは非常に遺憾であった。

時期的な面での配慮をお願いする次第である。

（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科・小風秀雅）

学生海外調査研究		
19 世紀末フランスにおける女性画家にとってのヌード作品の位置づけ ：ベルト・モリゾ《横たわる裸の羊飼いの少女》を通じて		
氏名　川口　裕加子		比較社会文化学専攻
期間	2016 年 7 月 18 日～2016 年 8 月 6 日	
場所	パリ、マドリッド	
施設	オルセー美術館資料室、ヴェルサイユ宮殿、ティッセン＝ボルネミッサ美術館、フランス国立図書館、国立美術史研究所図書館、マルモッタン美術館	

内容報告

1. 本調査の目的と成果

本調査の目的は、ベルト・モリゾ(1841-1895)の作品《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)(1891 年)の研究を行うために、本作品に関わるモリゾの作品及び、同時代の女性画家によるヌードを主題とした作品について、日本では入手が難しい一次資料を中心に調査を行う為であった。

オルセー美術館の資料室(Documentation de la conservation, Musée d'Orsay)では、画家や展覧会といったテーマごとに資料がファイルに分類されている。ここではモリゾの《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)や本作が出展された展覧会に関わる資料、そしてモリゾのヌードを主題とした作品に関する資料を中心に閲覧した。また同時代にヌードを描いた女性画家たち、そしてモリゾと似た構図のヌード作品を描いた男性画家たち、そしてモリゾのヌードに影響を与えたとされるルノワールのヌード作品《大浴女》(fig.2)(1884-1887 年)、メアリー・カサットによるヌード主題の作品に関する資料を閲覧した。

ヴェルサイユ宮殿（Château de Versailles, パリ郊外、ヴェルサイユ）においては、モリゾがヌードのスケッチを行い、ヌード制作に影響した可能性があるフランソワーズ・ジラルドンのレリーフ《ディアナのニンフたちの入浴》(fig.3)(1668-1670 年)の作品調査を行った。

《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)を所蔵するスペイン、マドリッドのティッセン＝ボルネミッサ美術館（Museo de Arte Thyssen-Bornemisza）においては、本作に関わる海外で開催された展覧会のカタログ等を閲覧させて頂いた。多くは日本で調査済みの文献も含まれていたが、日本では入手できない展覧会のカタログを閲覧することができた。

国立図書館(Bibliothèque Nationale de France)においては、《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)や同時代の男性、女性画家によるヌード作品に対する同時代批評を中心に、主にフランソワ・ミッテラン館(Site François-Mitterrand)で調査を行い、リシュリュー館の版画写真部門(Richelieu - Estampes et photographie)においても資料を閲覧した。

国立美術史研究所図書館(Bibliothèque de l'Institut National d'Histoire de l'Art)では、国内では入手できないモリゾや本調査に関わる二次文献の資料を中心に調査を行った。

マルモッタン・モネ美術館(Musée Marmottan Monet)では、《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)の連作である《横たわる羊飼いの少女》(fig.4)、そして関連作品のである習作等の作品調査を行った。当館学芸員に問い合わせたところ、学芸課室が今夏中改修工事をしている為、資料の閲覧はかなわなかったが、《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)と同時期に描かれた関連作品を実際に見るという貴重な機会となった。

2. はじめに

1891 年夏、ベルト・モリゾは休暇中の滞在先であるメジィーで、その村の農家の娘であるガブリエル・デュフールをモデルに《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)を描いた。本作は同じ時期に同じモデルによって描かれた連作である《水浴》(fig.5) (1891 年)とともに、モリゾの作品には珍しい全身ヌード像の作品である。モリゾは画家人生を通じて女性の化粧を主題として、私室で化粧や身支度を行う女性の姿を多く描いた。修士論文では、当時一般的に化粧主題につきものであった女性の性的な魅力やエロティックな場面としてではなく、モリゾはモデル女性が身支度を主体的に行っている姿を、自

らのブルジョア女性としての生活を重ね合わせながら感情移入して描いたことを結論づけ、1870 年から 1880 年にかけての化粧主題の作品を対象としながら、筆致や構図、女性の表情や描かれた空間など、作品を詳細に分析することで議論した。化粧主題の中で、モリゾは女性が私的な空間で肩や腕、胸を露出して身支度に熱中する姿を描いている。これら化粧主題におけるヌードの作品については、先行研究においてセクシュアリティの表象におけるジェンダーの問題として論じられている。しかし、《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)については、モリゾが生前に唯一公に発表したヌードの全身像の作品であるにも関わらず、ジェンダーの問題についてはこれまで十分に論じられていない。本研究では《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)を通じて、モリゾがヌードの主題をどのように捉え、位置づけてきたのかを同時代の文脈の中で明らかにしていく。

3. 19 世紀末フランスにおけるヌードの主題

歴史・神話画といった社会的に重要性の高い作品を描くためにヌードは必要不可欠であったが、フランスでは 18 世紀までは男性ヌードが主流であり、19 世紀中頃からは女性ヌードがとって代わるようになる。西洋社会を伝統的に秩序立ててきた当時の概念は、女性は潜在的に「人間の生殖作用の過程に男性よりも強く支配され、境遇的に養育の仕事により多く従事する」[1]性、つまり男性よりも野生に近い存在であると見なしていた。一方出産機能を欠くが故に文化的創造を担うべきであるとされたのは男性であった。19 世紀後半に男性画家が女性ヌード主題を取り上げた作品は多数あり、それらの中でも、風景の中にいる裸の女性の主題はそれ以前から神話・楽園的なイメージを伴って頻繁に描かれた。このような裸体の女性像は文化的な人間の姿とは対極的であり、それらは西洋美術を支配する理論、つまり男性（画家）が女性の裸体（＝自然）をより芸術的水準に高めたものがヌード（女性の理想的身体）であるという考え方 [2]を体現するイメージである。自然の中のヌード・イメージの氾濫は、この西洋美術的概念が潜在的に社会に受容されていたことを伺わせる。実際に、《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)と同時代の 1890 年前後のサロンにも同様の主題、例えばジャン・ベナーによる《青い洞窟のニンフ》(1892 年) (fig.6)、M・キロンの《眠り》(1892 年) (fig.7)、ジャン・ジゴーの《春》(1890 年) (fig.8)などの作品が複数出展されており、当時の批評は主題の内容よりも画家の力量を計る主題として論じており [3]、自然の中のヌード像がごく一般的のものであったことが分かる。

4. 女性画家によるヌード絵画制作を取り巻く状況

社会的に一流の画家として認められるためにはヌードを描くことが必須であったが、教育や社会通念の上でヌードを描くことが実質的に不可能だった女性画家は芸術における中心的なイデオロギーの形成から排除され、ほとんどの女性は芸術の本流とされる分野から遠ざけられてきた。フランスでは 19 世紀後半には、数は限られているが男性より高い授業料を払えば女性も私塾でヌードを学ぶことができるようになり、また 1900 年までには、国立美術学校で女性の公的な美術教育が認可され、徐々に女性がヌードを描くことができる環境に変化し始めた。しかしそれでもいまだヌードを描く女性は非常に限られていた。フィルナベール夫人の《ハートのジャック》(1893 年) (fig.9)に対する批評の中で「…そこには我々が気づかない精緻さがあるが、作品に好奇心がわかないようなことはないと思う。というのもヌードの習作は女性画家彫刻家連合の展覧会ではかなり珍しいからである。…」[4]と女性画家のヌードに物珍しさを示す批評からもそれは伺える。

そして数少ないヌードを描く女性たちのほとんどはヌードの伝統的な文脈に沿って理想化された身体を描くことで男性の視線を共有し、父権社会の常識の範囲内で描くにとどまった [5]。マリー・ベリエによる《目覚め》(fig.10) (1895 年)は西洋美術におけるヌードの伝統をふまえた理想的な身体で描かれている。母子画は当時、養育という女性に割り当てられた役割をイメージとして強調するために頻繁に用いられた主題であった。理想的身体と母子画という、当時の伝統的、社会的文脈に則ったエステル・ユイヤール夫人の《愛さなければならないのか？》(1892 年) (fig.11)について、当時の批評は「エステル・ユイヤール嬢は、…美しい作品の主題、つまり内省的で、とても考え深く、何か厳かなものを見つけた。」[6]と述べて賞賛している。またルーシー・リー＝ロビンズの《身支度》(1892 年)(fig.12)に対して、当時の批評は「...これはコレクションに加えるのにふさわしくないとは言えない。これは芸術、そして技量によって手を加えられた裸体画の習作である。その技量はリー＝ロビンズ嬢が最も輝かしい弟子の一人である師匠、カルロス・デュラン氏を思い出させる。」[7]と述べ、ロビンズの技量を賞賛しつつも、ロビンズの師であるカルロス・デュランの影響力を強調し、優れた男性画家の指導の下で女性がヌード描くという構図ができている。

このように 19 世紀末フランスにおけるアカデミックな絵画界の女性画家によるヌード絵画は、西洋美術における伝統的、また当時の男性中心的な価値観の範囲にとどまり、女性の主体的な自由なヌード表現は行われていなかった可能性が伺える。

5. モリゾの状況

アカデミックな女性画家によるヌード主題が先に述べたような状況であった一方、印象派の一員として前衛絵画の中心人物であったモリゾも 1880 年代以降、ヌード主題にも取り組むようになる[8]。ヌード制作と時をほぼ同じくして、モリゾの描法は大きく転換する。1880 年頃からはパステルを用いるようになり、1885 年の初のヌード作品である《裸婦の背中》(1885 年) (fig.13)の習作は、初めて木炭の使用を試みた作品の一つであるとされている。また同じ頃、スケッチブックを常に持ち歩いてスケッチを行うようになる。主に 1870 年代の下描きしないスケッチのような素早い筆致から、デッサンを生かしてものの形を明確にかたどる長く引き伸ばされた筆致へと変化し、それらはヌード作品においても試みられる。そして、それらはやがてチョークやグラファイト、木炭を使った線描の為の習作と、パステルや水彩、油絵を使った色彩の為の習作をそれぞれ描き、度重なる習作を経て一つの画面を構築するモリゾ後期の制作過程へと繋がっていく。そしてこの制作過程は、特に 1890 年代の《横たわる羊飼いの少女》(fig.4)や《桜の木》(1891 年) (fig.14)といった後期の大型作品に用いられる。

1880 年代以降、モリゾは継続的に過去のヌード作品を参照している。イタリア旅行の際にはボッティチェリの《春》(1477-1482 年) (fig.15) をスケッチし、またフランソワーズ・ブーシェの《ウルカヌスに武器を頼むビィーナス》(1732 年) も模写する(fig.16)。そしてフランソワーズ・ジラルドンの《ディアヌのニンフたちの入浴》(1668-1670 年) (fig.3)のスケッチも残している。また 1886 年頃にはマネの《オランピア》(1863 年) (fig.17)が「見事なデッサン」であることを書き残し、1887 年にはボッティチェリの《春》(fig.15)について言及する中で、色と同時にデッサンも賞賛している[9]。モリゾとルノワールのヌード作品にある関連性については度々論じられてきたが、1886 年 1 月にルノワールのアトリエを訪問したモリゾにルノワールは翌年完成した《大浴女》(1884-1887 年) (fig.2)の習作を見せた。モリゾはこの時の印象を「…彼のデッサンは本当に力強い。印象派がものすごく素早く作品を完成させると考えている一般の人々に、これらの習作を見せたら面白いでしょう。誰も形態表現をこれ以上高めることはできないと思います。女性たちが海に入る 2 つのデッサン[10]にはアングルの作品と同様に魅了されます。」[11]と記しており、ルノワールのヌードデッサンに深く感銘を受けたことが伺える。またこの時ルノワールは、モリゾにヌードが作品において必要不可欠であるとも話している。またルノワールはモリゾが 1885 年頃に模写を行ったジラルドンのレリーフ(fig.3)とよく似たポーズの裸婦を《大浴女》(fig.2)の中で描いており、二人のヌード作品には強い関わりが伺える。

以上のようにモリゾは 1880 年代、過去や同時代画家による数多くのヌード作品に接することが、ヌード主題に取り組むきっかけの一つになったと考えられるが、ヌード作品はモリゾにとって新しい描法を使って色と形態を表現する試みの場でもあった。

6. 《横たわる裸の羊飼いの少女》

モリゾは先に述べた描法の変化に伴いながら、特に 1885 年から 1890 年にかけて化粧室で身支度する女性のヌードを油彩やスケッチとして制作していった(fig.18)(fig.19)。そして 1891 年夏、モリゾはメジィーで《横たわる羊飼いの少女》(fig.4) (fig.4-1)を油彩で 2 つのバージョンによって制作した。モリゾの娘のジュリーによると、自宅の客間の鏡の上を飾る装飾パネルとして使うためでの作品で、モデルはメジィーで出会ったジュリーの遊び相手、当時 12 歳の少女で、農家の娘ガブリエル・デュフールである。モリゾはモデルを見ながら小さいサイズの作品(fig.4-1)を描いたと考えられており[12]、おそらくこの小さい作品(fig.4-1)や他の部分的な習作を集約して、大きいサイズの作品(fig.4)を描いたと考えられる。大きいほうの作品(fig.4)は、長く引き伸ばされた鮮やかな色の層が見る者の目を羊飼いに導き、屋外の光の下で変化する衣服や肌の微妙な色合いと立体感を高めており、ここにモリゾが 1880 年以降試みてきた様々な画材によるデッサンが、一つの画面において色のニュアンスと物の立体感の双方一度に表現できる技法に到達していることが見て取れる。

《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)はこれら着衣版の 2 作品(fig.4) (fig.4-1)が描かれた後に同じ構図のヌード版として制作された[13]。モリゾのヌード版制作のきっかけとしては、1891 年夏にメジィーを訪れたルノワールが、《横たわる羊飼いの少女》(fig.4) (fig.4-1)を見て、モリゾに促したとも言われている[14]。しかし、ここでは着衣版に見られるような、1880 年代からモリゾが試行錯誤を経て得た色と線の両立でものの素材感を出す描法は影を潜め、やや大きくて短めの筆致で描かれた羊飼いの身体は平面的である。モデルの身体は着衣版の鮮やかな色とは異なり、背景と調和した柔らかい色合いで肉体の存在感を強調させない。

3 年後の 1894 年、ブリュッセルでオクターブ・モースによって開かれた前衛的な画家の作品を集めた自由美学展に招待されたモリゾは、他 2 作品とともに《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)を出展した。生前のモリゾにとってヌード作品の展覧会への出展は珍しく、存命中モリゾのヌード作品のほとんどは公開されることがなかった。唯一存命中に《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)を発表し

たのは、モデルは未成熟な少女であり、またモリゾの画業後期に特徴的な描法を控えた、肉体のボリューム感を抑えたヌードであったことが要因として考えられるのではないだろうか。ヒゴネットが指摘するように、当時の女性たちがヌードをあまり描かなかった理由として挙げられる、モデルと画家自身の姿が重ね合わさせられる、という危険性にも晒されることがなかったこと[15]も公にし易かった理由として考えらえる。本作が展示された 1896 年の回顧展で、タデー・ナターソンはこうコメントしてモリゾの作品の清らかさを特徴として挙げている。「…彼女の女性としての均衡のとれた繊細さは、甘美さをもたらすのであるが、それはいかがわしい邪な魅力を持つことはない。あるいは問題が起こりそうなことに気をとられることはない。…」[16]

アカデミックな画家の場合においても、モリゾの場合においても、どちらにおいても女性画家はヌードを描く上で、父権的社会の概念に影響された可能性が考えられる。モリゾは《横たわる裸の羊飼いの少女》(fig.1)において、少女をモデルとしたことだけではなく、モリゾの画家後期の特徴、つまり色に線描を加えることによってボリューム感を出すやり方を取らずに、羊飼いの身体を描くことでセクシャルな描写を回避したと考える。そしてこのようなヌードであるからこそ、モリゾがブルジョア女性であってもヌードを描いて発表することを容易にしたのではないだろうか。本調査は、今後モリゾや同時代女性画家のヌード表象をより深く読み解いていくことにより、19 世紀末フランスにおける女性に対するイデオロギーとそれに対する女性芸術家たちの葛藤や戦略をより多様な形で解釈し、深めていくきっかけとして、成果のある研究であったと結論づける。

7. 終わりに

博士論文においてはモリゾの作品を中心に、同時代の女性画家の作品と比較分析することにより、19 世紀後半のフランス社会のイデオロギーが女性たちに要求した「女性らしさ」が作品に対してどのような影響を与えたのかを明らかにしていきたい。博士論文の一章として、モリゾや同時代の女性画家にとってのヌード作品の位置づけを明らかにすることで、女性のセクシュアリティ表象の視点から見た、当時の女性に割り当てられたイデオロギーを読み解いていく予定である。今後は本調査で得られた資料を手掛かりに、モリゾの各時代のヌード作品の分析をより詳細に行う予定である。具体的には今回の報告書で言及できなかったアカデミックな同時代女性画家やメアリー・カサット、ルノワールらによるヌード作品との具体的な作品比較等によって進めていく予定である。本調査は、国際的女性リーダーの育成を目的としたプログラム「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」によるプロジェクト「学生海外派遣」によって実現したものである。調査遂行にあたってお世話になった関係者の方々に心より御礼申し上げる。

注

1 キャロル・ダンカン「男らしさと男性優位、二十世紀初頭の前衛絵画」、ノーマ・ブルード・メアリー・D・ガラード編・著、坂上桂子訳『美術とフェミニズム、反芻された女性イメージ』、PARCO 出版、1987 年、206 頁

2 伝統的な西洋美術のヌード理論については以下を参照。ケネス・クラーク著、高階秀爾、佐々木英也訳『ザ・ヌード』筑摩書房、2004 年

3 "Les Prix de Rome", *L'Art Français,* no, 276, le 6 août 1892; "Nos Illustrations", *ibid.*, no.291, le 19 novembre 1892; "Nos Illustrations", *ibid.*, no. 164, le 14 juin 1890

4 *L'Art Français,* no. 362, le 31 mars 1894

5 タマール・ガーブ著、味岡京子訳『絵筆の姉妹たち、19 世紀末パリ、女性たちの芸術環境』、ブリュッケ、2006 年、185-250 頁

6 "Nos Illustrations", *L'Art Français,* no. 268, le 11 juin 1892

7 "Nos Illustrations", *op. cit.*, no. 278, le 20 août 1892

8 1870 年代でも身支度中の衣服が脱げかけた女性を描いてはいるが、上半身のヌードを描き始めたのはこの時期である。

9 「昔見たボッティチェリの《春》の複製を見て、当時とは同じ喜びを感じない。それは今私がよく理解できるようになったからで、すなわち色がないほうがより良く見えるのではないだろうか。けれどもルーブルにあるフレスコの色合は見事である。」Green notebook(b), Paris, Musée Marmottan Monet cited in *Berthe Moriost*, Exp.Cat., Paris, Musée Marmottan Monet, 2012, p. 36

10 《大浴女》(1884-1887 年)(fig.2)を指す

11 Grey notebook, Paris, Musée Marmottan Monet, on permanet loan from the Rouar family cited in

MATHIEU, Marianne, ″ Watercolours, pastels and drawings″, *op.cit*, Exp.Cat., Paris, Musée Marmottan Monet, 2012, p. 35

[12] ibid., p.202

[13] 2002年にリールで開催されたモリゾの回顧展カタログによると、《横たわる羊飼いの少女》(fig.4)は初期のヌード習作が存在し、《横たわる裸の羊飼いの少女》は《横たわる羊飼いの少女》(fig.4)を描くためのヌード習作ではないと考えられている。WILHELM, Hugues, ″Bergère nue couchée″, Berhte Morisot, Lille, palais des Beaux-Arts, 2002, p.393-395

[14] AMIOT-SAULNIER, Emmanuelle, ″Shepherdress Lying on the Ground″, *op.cit.,* Exp.Cat., Paris, Musée Marmottan Monet, p.204

[15] ヒゴネットは女性がヌードを描くと自画像として捉えられる危険性があり、特に中流以上の女性にとって不適切であることを述べている。HIGONNET, Anne, *Berthe Morisot's Images of Women*, Cambridge, Harvard University Press, 1992, p. 173.

[16] NATANSON, Thadée, ″Berthe Morisot(Madame Eugène Manet″, *La Revue Blanche*, tom. X premier semestre, 1896, pp. 250-252

参考文献

Chronique des Arts et de la Curiosité, 4 juin 1892
——————————, 9 mars 1895
——————————, 14 mars 1896
Journal des Arts, 2 juin 1885
——————, 13 mai 1890
——————, 3, 13 et 31 mai 1892
——————, 21 juin 1892
——————, 7 mars 1896
La Flandre Libèrale 23 février 1894
La Jeune Belgique XIII No. 4, avril 1894
La Liberte, 23 février 1894
La Réforme 20 février 1894
"Nos Illustrations", *l'Art Français*, 10 mai 1890
——————, 11 juin 1890
"Nos Illustrations", ——————,14 juin 1890
"Nos Illustrations", ——————,11 juin 1892
"Les Prix de Rome", ——————,6 août 1892
"Nos Illustrations", ——————,20 août 1892
"Nos Illustrations", ——————,19 novembre 1892
——————, 27 mai 1893
——————, 3 et 31 mars 1894
——————, 21 et 28 mars 1896
l'Art Moderne, 5 et 12 juin 1892
——————, 6 juillet 1890
——————, 4 mars 1894
l'Artiste, 62 ème année nouvelle période Tome 3, 1892
Le Journal 21 février 1894
Le Patriote 25 février 1894
l'Etoile Belge 18, 19, 20 février 1894
Gil Blas 6 mars 1894
La Revue Blanche, tom. X premier semestre, 1896
Moniteur des Arts, 6 mai 1892
CARDON, Emile, "Le Salon du champ-de mars", *Moniteur des Arts*, no. 2018, 17 mai 1892
D'HENNEBAUT, C., "Le Salon de 1892", *Moniteur des Arts*, no. 2025, 17 juin 1892
——————, 20 et 28 juin 1892

Revue encyclopédique, 1 août 1892
SILVESTRE, Armand, *Le Nu au Saon*, vol.7, 1891

Berthe Morisot, preface by Paul Valéry, Musée de l'Orangerie, Paris, 1941
Berthe Morisot, Albi, Musée Toulouse Lautrec, 1 juillet-15 septembre 1958, texte de Raymond Escholier, "Morisot et sa magie"(pp.13-21), 24 illustrations,
Berthe Morisot, Paris, Musée Jacquemart-André, n.p., n.d., 1961
Berthe Morisot, Vevey, Musée Jenisch, 1961
Berthe Morisot, Paris, Galerie Hopkins-Thomas, 1987
Berhte Morisot, Lille, palais des Beaux-Arts, 2002
Berthe Morisot, regards pluriels, Musée de Lodève, 17 juin-29 octobre 2006
Berthe Moriost, Exp.Cat., Paris, Musée Marmottan Monet, 2012,
Catalogue de l'exposition de tableaux, pastels et dessins par Berthe Morisot, Paris, Boussod et Valadon et Cie, 19 boulevard Montmartre, 1892
Catalogue Berthe Morisot(Mme Eugène Manet). Exposition de son œuvre, preface by Stéphane Mallarmé, Galeries Durand-Ruel, rue Laffitte and rue Le Peletier. Paris, 1896
Exposition Berthe Morisot, Paris, Galerie E. Druet, 1905
Expositions de pastels, d'aquarelles, dessins, crayons de Berthe Morisot, foreword by Paul Valéry, Levallois, Galerie L., Dru, 1926
Expositions d'œuvres de Berthe Morisot, Paris, Bernheim Jeune, 1929
Exposition Berthe Morisot, pastels, aquarelles, dessins, Paris, Galerie Durand-Ruel, 1948
La Libre Esthétique. Catalogue de la première exposition à Bruxelles du 17 février au 15 mars 1894, Brussels, 1894
Salon d'automne, Berthe Morisot rétrospective, Paris, 1907
STUCKEY, Charles F., SCOTT William P., LINDSAY SUZANNE. G., *Berthe Morisot, Impressionist*, Exh.Cat., Washington, National Gallery of Art,1987
Teodre de Wyzewa, "Peintre de jadis et d'aujourd'hui", *Société du Salon d'Automne*, 1907
William Bouguereau, 1825-1905, Paris, Musée du Petit-Palais, 1984
ユーグ・ウィレム監修、『BERTHE MORISOT 1841-1895, Berhte MORISOT: A Retrospective』展カタログ、損保ジャパン東郷青児美術館、2007 年
キャロル・ダンカン「男らしさと男性優位、二十世紀初頭の前衛絵画」、ノーマ・ブルード・メアリー・D・ガラード編・著、坂上桂子訳『美術とフェミニズム、反芻された女性イメージ』、PARCO 出版、1987 年
ケネス・クラーク著、高階秀爾、佐々木英也訳『ザ・ヌード』筑摩書房、2004 年
坂上桂子、『ベルト・モリゾ、ある女性画家の生きた近代』、小学館、2006 年
タマール・ガーブ著、味岡京子訳『絵筆の姉妹たち、19 世紀末パリ、女性たちの芸術環境』、ブリュッケ、2006 年、185-250 頁
CLAIRET, Alain, MONTALANT, Delphine, ROUART, Yves, *Berthe Morisot, 1841-1895, Catalogue raisonné de L'œuvre peint*, Montolivet, France, CÉRA-nsr, 1997
DURET, Théodore, *Histoire des peintures impressionnistes, Pissarro, Claude Monet, Sisley, Renoir, Berthe Morisot, Cézanne, Guillaumin*, Paris, H. Floury, 1919
HIGONNET, Anne, *Berthe Morisot's Images of Women*, Cambridge, Harvard University Press, 1992,
Hommage à Berthe Morisot et à Pierre-Auguste Renoir, Limoges, Musée Municipal, 1952
HUISMAN, Philippe, *Berthe Morisot*, Lausanne, La Bibliothèque des Arts, 1995
MARX, Roger, "les femmes peintres et l'impressionnisme. Berthe Morisot", *Gazette des beaux-arts*, December, 1907
ROUART, Louis, *Berthe Morisot*, Paris, Plon, 1941
POLLOCK, Griselda, *Mary Cassatt, Painter of Modern Women*, Thames and Hudson, 1998
The Enchanteress, Berthe Morisot Birmingham, mars-avril 1973, introduction Z. F. Weeks, préface William P. Scott,

かわぐち　ゆかこ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

川口さんはフランス 19 世紀の印象主義の女性画家ベルト･モリゾの裸体による少女像を中心に、同時代の女性画家の作品との比較を通して、当時のジェンダー観やそれに基づく制度的な制約の中で、西欧美術史の中心的な主題であるヌードに取り組む女性画家たちの葛藤や戦略を研究テーマに据え、フランスおよびスペインにおける調査を行った。パリでは 19 世紀美術研究に必須であるオルセー美術館の資料室を始め、国立図書館や国立美術史研究書図書館等で的確に資料を収集し、またヴェルサイユやスペインでは資料収集に加え、研究に不可欠な作品調査を実施した。川口さんは、出発前の関係機関への連絡を含め、十分な準備を行った上で調査に赴いており、短期間に非常に効率的に適切な施設を回り調査を行っており、その結果まとめられた報告においては、問題の所在と作品分析の視点が十分に深められ、今回の調査の結果が実り豊かなものであったことが明らかに示されている。

（お茶の水女性大学基幹研究院人文科学系教授　天野知香）

fig. 2　ピエール＝オーギュスト・ルノワール《大浴女》 1884-1887 年、115×170cm、油彩・キャンバス、フィラデルフィア美術館

fig. 1 ベルト・モリゾ《横たわる裸の羊飼いの少女》1891 年、56×86cm、油彩・キャンバス、マドリッド、ティッセン＝ボルネミッサ美術館

fig. 3　フランソワーズ・ジラルドン 《ディアナのニンフたちの入浴》 1668-1670 年、130×600cm、浅浮彫、ヴェルサイユ宮殿

fig. 4 ベルト・モリゾ《横たわる羊飼いの少女》1891 年、64×116cm、油彩・キャンバス、パリ、マルモッタン・モネ美術

fig. 4-1 ベルト・モリゾ《横たわる羊飼いの少女》1891 年、35×56cm、油彩・キャンバス、個

fig. 5 ベルト・モリゾ《水浴》1891 年、54.5×45.5cm、油彩・キャンバス、パ

fig. 6 ジャン・ベナー《青い洞窟のニンフ》1892 年

fig. 7 M・キロン《眠り》1892 年

fig. 8 ジャン・ジゴー《春》1890 年

fig. 9 エリーズ・デジレ＝フィルナベール《ハートのジャック》1893 年

fig. 10 マリー・ペリエ《目覚め》1895

fig. 11 エステル・ユイヤール《愛さなければならないのか》1892 年

fig. 12 ルーシー・リー＝ロビンズ《身支度》1892 年

fig. 13 ベルト・モリゾ《裸婦の背中》1885 年、55×46cm、油彩・キャンバス、パリ、モネコレクション

fig. 14 ベルト・モリゾ《桜の木》1891 年、154×80cm、油彩・キャンバス、パリ、マルモッタン・モネ

fig. 19 ベルト・モリゾ《横たわるヌード》1890 年頃、35.5×58.5cm、鉛筆と白チョーク・青い

fig. 15 サンドロ・ボッティチェリ《春》1477-1482 年、203×314cm、板絵・テンペラ、フィレンツェ、ウフィッツィ美術館

fig. 16 ベルト・モリゾ ブーシェによる《バルカンに武器を頼むビィーナス》の模写 1885 年、55×46cm、油彩・キャンバス、パリ、モネコレクション

fig. 17 エドゥワール・マネ《オランピア》1863 年、130×190cm、油彩・キャンバス、パリ、オルセー美

fig. 18 ベルト・モリゾ《プシシェの前で》1890 年、55×46cm、油彩・キャンバス、個人蔵

学生海外調査研究	
中国人若年層の性別役割分業意識及びワークライフバランスの実態について	
氏名　　田　嫄	ジェンダー学際研究専攻
期間	2016 年 12 月 9 日～2016 年 12 月 21 日
場所	中国（北京・済南・濰坊）
施設	会社・ご自宅・喫茶室

内容報告

1. 海外調査研究の背景・目的

女性の社会進出を推進するため、日本政府は「男女雇用機会均等法」を改正、「男女共同参画社会基本法」を公布・施行するなど、男女平等の実現に向けて社会システムの変更や、様々な法律や制度を実施し、社会における男女平等を図っている。一方、世界経済フォーラム（World Economic Forum pp.8－9）「The Global Gender Gap Report 2012」各国における男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数（Gender Gap Index：GGI）の調査では日本は 135 カ国の中、101 位である。

小林（2013）の『「結婚」や「家事分担」に関する男女の意識の違い』によれば、実際に男性が一週間に家事する時間は５時間未満のほか、０時間の人が 15％に達している。これに対し、女性が一週間に家事をする時間は 24 時間であり、男性より断然に長いと言えるだろう。この現実を見れば、家事の主な担い手は女性であることが分る。したがって、「夫は外、妻は内」の伝統的男女役割意識がまだ根強く残っていることがわかる。

中国の研究では、中国人女性の仕事意識に関する研究において「中国女性が家を養うため労働と仕事をする意識を持ち、この家を養うための高い責任感を持つ」とのような中国人女性の役割分業意識が明らかにされている。また、仕事をして家計に貢献することは中国人女性にとって、自尊心と自立に繋ぐことであり、経済的独立することによって、中国人女性が自尊心と安全間を感じられる」と陈（2003）が示されている。また、「第二期中国妇女社会地位抽样调查主要数据报告」(2001）によると、中国の女性の就職の主な動機は家庭を養うため、経済的独立、自分の生活を充実することなどである。つまり、中国人女性にとって、仕事をすること、経済的自立は既に自尊心、自己実現などと繋がり、家計に貢献することも自分の責任だと思われている。

白水（2004）は中国の良妻賢母思想は日本と違い、中国では女性に社会的役割と家庭的役割の両方の責任を求められて、この意識は近代から現代までに至り、中国女性に影響し続けている。中国では男性が家事を負担する時間が日本より多い[1]が中国の女性の二重役割問題が昔から存在し、現在でもその強い影響力が依然存在していることがわかる。さらに、競争社会の中で、厳しい就職環境で性別に問わず就職難などの問題が浮上する中国、20 世紀 30 年代のように、「女性は家庭に帰れ」などの声が現れ、社会環境はますます女性の社会進出に好ましくない状況に落ちつつある。

中国は 30 年に渡る一人っ子政策を実施する中、人口を減らす目的を達成しているが、例えば、現在定年の年齢を高く定められていることにより、一人っ子夫婦が四人の高齢者の介護を負担し、子供の教育も負担するなど、多くの家庭の労働力、経済面などに負担をかけ、これから中国社会の中で、立ち向かわないといけない社会問題が次々現われて来るだろう。したがって、女性の社会参加の推進や男性の家庭参与の推進が以上の社会問題に深く関連する。それを問うことは、平等な社会環境を作り、女性の社会進出に関わる重要な研究意義を持っている。

以上の背景から、若者の性別役割分業意識が保守的になりつつあることがわかる。さらに日本と中国の研究でも若者の性別役割分業意識が保守化していると指摘されている（徐 2010，長尾 2008）。本調査では若者を対象に、中高生時代から出産後までのライフイベントごとに、当人の性別役割分業意識が、いつ、どのような出来事の影響で変化したかについて探っていくこととする。また、若者の仕事、家事、育児におけるワークライフバランスの実態を把握し、困難、葛藤及び当人の対策を探ることを本調査の目的とする。

2. 調査とデータの概要

2.1 調査の概要

調査対象者が中国人女性であるため、協力者を募集しやすい現地に行く必要がある。なぜ現地で調査を展開する必要性が高いか、その理由として、以下のことが考えられる。まず、より信頼性が高いデータを収集するため、調査協力者が生活している現地で調査を行う必要がある。また、資料収集の面からも、中国における調査の必要性が非常に高いと考える。

前年度（2015 年度）では、既に中国（北京・済南・濰坊）で半構造化インタビューを用いた質的調査を実施した。その際に、性別役割分業意識に影響する要因とライフイベントごとの意識の変化傾向を明らかにした。今回の調査では、男性もインタビュー調査の対象者とした。前回の研究結果を生かし、前回の対象者の配偶者の男性も含め、新たな対象者も増やした。そして、性別役割分業意識の変化と実態を把握すると同時に、夫婦間の役割分業を確認でき、対象者のワークライフバランスの実態も把握できる。以上のことから、若者の就業、育児、ワークライフバランスに関する大きな示唆につながると考える。

2.2 調査の実施

海外調査をする前から調査協力者と日程調整や連絡をとり始めた。まず、前回の協力者と連絡し、その配偶者に協力してもらえるかどうかを確認した。北京において、配偶者の都合や、家族の都合により、協力できない方もいた。対象者の人数を確保するため、知人や前回の協力者に新たな対象者を紹介してもらう依頼をした。その結果、北京では女性２名、男性１名、その内夫婦は１組の新たな対象者に協力してもらった。しかし、当人に連絡がつかない方もいたため、前回の協力者に向ける追加調査ができないケースもあった。北京の調査結果は以下にまとめる。

表１　北京の調査結果

2015 年度		2016 年度			
対象者番号	調査結果	対象者番号	調査結果	配偶者番号	調査結果
A1	○	A1	○	A1H	○
A2	○	A2	×	A2H	×
A3	○	A3	×	A3H	×
A4	○	A4	○	A4H	○
A5	○	A5	×	A5H	×
		A6	○	A6H	○
		A7	○	A7H	○
合計	5 名	合計	4 名	合計	4 名

済南では、前回の協力者との連絡がインタビュー終了後にも続いていたため、前回の協力者のほとんどに今回も協力してもらうことになった。その内の 3 組の夫婦は、どうしても都合が合わなかったため、今回の調査期間中にインタビュー調査ができなかった。この方々に関して、次回中国で調査展開をする際にインタビューを実施することを検討している。また、新たに紹介してもらった夫婦一組がいたため、済南では、協力を承諾済で未実施の対象者を含め、全部で 6 組 12 名となった。済南の調査結果は以下にまとめる（表２）。

表２　済南の調査結果

2015 年度		2016 年度			
対象者番号	調査結果	対象者番号	調査結果	配偶者番号	調査結果
B1	○	B1	×承諾済み	B1H	×承諾済み
B2	○	B2	×承諾済み	B2H	×承諾済み
B3	○	B3	○	B3H	○

B4	○	B4	×承諾済み	B4H	×承諾済み
B5	○	B5	○	B5H	○
		B6	○	B6H	○
合計	5名	合計	3名	合計	3名

濰坊では、前回の協力者の離婚や配偶者の仕事の都合により、インタビューできなくなった方も中にいた。調査協力者との日程調整は海外現地に到着後にも続いていた。四日間の間に日程を合わせてもらうことが困難であり、さらに日程の変更が激しかったため、どうしても調整できない方もいた。しかし、中国の現地に行く前から知人や前回の協力者にコンタクトを取り、新たな協力者夫婦3組6名にインタビュー調査ができ、合計夫婦5組、12名の協力者に調査した。濰坊の調査結果を以下にまとめる（表3）。

表3　済南の調査結果

2015年度		2016年度			
対象者番号	調査結果	対象者番号	調査結果	配偶者番号	調査結果
C1	○	C1	×	C1H	×
C2	○	C2	○	C2H	○
C3	○	C3	×承諾済み	C3H	○
C4	○	C4	×	C4H	×
C5	○	C5	○	C5H	○
		C6	×	C6H	○
		C7	○	C7H	○
		C8	○	C8H	○
		C9	○	C9H	○
合計	5名	合計	5名	合計	7名

2.2 インタビュー調査内容設定

今回の半構造化インタビュー調査は、前回の調査をもとに、新たな問題を組み込んだものである。男性の協力者と女性の協力者に聞く内容はほとんど同じであり、同じことに対する認識や役割分担を確認できるものだと考える。今回の調査に新たに加わった男性のインタビューガイドを中心に、インタビュー調査内容について述べる。

男性用のインタビューガイドは五つ視点から男性の意識を問うた。その内訳は「現在の役割分業意識」、「結婚相手について」、「性別役割分業意識変化の傾向と過程」、「結婚後の役割期待」、「子ども誕生後の役割期待」である。

「現在の役割分業意識」を確認するため、「テレビやドラマなどで『出世よりよい結婚相手』という言葉を聞いたことがあると思いますが、これについてどう思いますか」などのような質問をした。

「結婚相手について」では、「あなたが考えている一般的な結婚相手の理想像、及び理想結婚年齢を教えてください」、「あなたの理想像及び理想年齢の形成はどこから受けた影響が大きいですか」の質問で問うた。

「性別役割分業意識変化の傾向と過程」について、中高生時、大学生時、就職活動と就職後の時間列で、協力者の性別役割分業意識を「中学校や高校の時期に考えた女性がやるべきことと男性がやるべきことについて教えてください」、「文系か理系かを選ぶ際に、自分が男性だから文系にもしくは理系にと考えたことがありますか」の質問で確認した。さらに、生活においてどんな人物や出来事が性別役割分業意識に影響をもたらしているかを明らかにするため、「進路選択する際に、誰からアドバイスをもらいましたか、最終的な選択は自分の意思による部分が大きかったですか、それとも他人の意思による部分が大きかったですか」、「就活の過程、その際に遭った困難と対策、努力、得た援助」、「従

業後に社会経験を積むことによって、男性と女性の役割分業についての考えは変化しましたか」などの質問を加えた。

「結婚後の役割期待」について、「あなたの家庭内役割を教えてください。現在の家庭内役割分担の合理的性についての評価」、「夫婦の理想の働き方について教えてください」などの質問で、現在の家庭内の役割分担の実際を確認しつつ、協力者の理想像も問うた。

「子ども誕生後の役割期待」の部分では、「あなたが考えている育児に関する家庭内役割の理想像及び現在の実態を教えてください」、「これからの自分の職業キャリアと家事育児のバランスについてどのようにかんがえていますか」などの質問を設定し、現在の状況を問いつつ、これからの期待も含めてインタビューを進めた。

3.今後の課題と予定

まず、今回のインタビュー調査データを整理し、文字化を行う。そして、分析を重ね、国内外の学会にて発表をする予定である。前年度（2015 年度）では本学生派遣プログラムの助成を受け、収集したデータを用い、The 11th Annual Conference of The Asian Studies Association of Hong Kong (ASAHK): Japan, Hong Kong, Asia and Alternative Modernities にて、「Employment Situation and Challenges of Chinese Parenting Mothers」をテーマに、日本家族社会学会第 26 回大会にて、「中国人若年層女性の就職活動における困難と葛藤」をテーマに、口頭発表を行った。また、「21 世紀東アジア社会学　第 8 号」に「中国人女性の性別役割分業意識の変化—若年既婚者へのインタビュー調査から」（単著・査読付き）の論文を掲載した。さらに、『人間文化創成科学論叢』第 19 巻に「乳幼児を持つ有職母親の就業状況と役割葛藤—中国人若年成人女性のインタビュー調査を通して」（単著・査読付き）をテーマにした論文を投稿し、2016 年 12 月に採択された。今回（2016 年度）に再度助成をいただけたことを励みに、日本家族社会学会、日中社会学会で更なる発表や論文の投稿を行う。今回の調査データは前回の調査データの補足であり、発展である。その理由、これらのデータはこれから作成する博士論文の土台になるものであり、自分の研究を進めるにあたって、欠かせない貴重なデータと考える。

今回のインタビュー調査では、何名かの協力者にインタビュー調査の承諾してもらったが、スケジュールが合わなかったため、調査できなかった。今後、再度中国の現地に渡り、承諾をくださった協力者のインタビュー調査を行う予定である。

謝辞

この度、お茶の水女子大学文部科学省特別経費(国立大学機能強化分)「グローバル女性リーダー育成カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダーシップ論の発信」プロジェクト「学生海外派遣プログラムに採択をいただき、深く感謝を申し上げます。

本海外調査を遂行するに当たり、ご指導をいただきました指導教員の石井クンツ昌子教授から始め、申請書の作成や調査計画にご指導をいただいた石井クンツ教授研究室の皆さま、また、インタビューをご快諾していただいた協力者の皆様、お茶の水女子大学留学生相談室のチューターの皆様に心より感謝を申し上げます。

注

1. 総務省「平成 23 年社会生活基本調査—生活時間に関する結果要約」と、第二期中国妇女社会地位调查课题组(2001)「第二期中国妇女社会地位抽样调查 主要数据报告」(『妇女研究丛书』 Vol.42, No.5』) pp.4-12 の男性家事する時間の調査数値より

参考文献

小林利行（2013）「結婚や家事分担に関する男女の意識の違い」(『放送研究と調査』Vol.4）pp.44－58

長尾由希子(2008)「若年男女における性別役割分業意識の変化とその特徴：高校生のパネル調査から」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ No.12』東京大学社会科学研究所

白水紀子（2004)「中国における近代家族の形成ー女性の民国化と二重役割の歴史」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ（人文科学)6 号 』pp.135-151

Ricardo Hausmann, Laura D. Tyson, Saadia Zahidi,“The Global Gender Gap Report2012”. World Economic Forum,2012

陈方（2003)『失落与追寻-世纪之交中国妇女价值观的变化』 中国社会科学出版社

第二期中国妇女社会地位调查课题组（2001) 「第二期中国妇女社会地位抽样调查 主要数据报告」（『妇女研究丛书』

Vol.42, No.5』）pp.4-12
徐安琪(2010)「 家庭性别角色态度：刻板化倾向的经验分析」『妇女研究论丛』98(2):18-28

田　嫄
でん　げん　お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科研究科　ジェンダー学際研究専攻

指導教員によるコメント

　女性の性別役割分業意識はライフイベントと関連することを前提として、田氏の研究では、中国の若年（20 代～30 代）女性に注目し、ミクロの視点から、進学、社会進出、結婚、出産などのライフイベントにより性別役割分業意識が変化するのかについて検討しています。田氏のこれまでの研究の知見の一つとして、女性の性別役割分業意識は結婚後に保守的になるのではなく、大学を卒業し、就職する際に変化することが明らかになっています。よって、社会進出や働きながらの家事・育児は女性の性別役割分業意識を変化させることが明示されました。これらの研究結果を踏まえ、今回の調査では、女性だけではなく、中国の若年男性も調査対象者にし、ワークライフバランスの実態などを検証することで、男女比較に関する知見が期待できると思います。

（お茶の水女子大学　基幹研究院人間科学系　　石井クンツ昌子）

学生海外調査研究		
ニジンスキーとその振付作品に関する一次資料の収集		
氏名　佐藤　真知子		比較社会文化学専攻
期間	2016 年 9 月 7 日 ～ 2016 年 9 月 19 日	
場所	アメリカ合衆国（ボストン、ニューヨーク）	
施設	ハーバード大学 ホートン図書館、ニューヨーク公立図書館 リンカーン・センター内上演芸術資料館	

内容報告

1. 研究概要

1.1 これまでの研究

筆者は、20 世紀初頭にフランス・パリを中心に活躍したロシア人のダンサー・振付家である、ヴァーツラフ・ニジンスキー［Vaslav Nijinsky 1889-1950］について、研究を行なっている。ニジンスキーは、「驚異的な技巧」や「舞台でのエキゾティックなカリスマ性」を持ち、クラシック・バレエの花形男性舞踊手として、デビュー当初から名声を誇っていたとされる。その一方、ニジンスキーの振付作品は、クラシック・バレエの伝統から大きく外れるような動きを採用し、当時の観客に賛否両論の大騒動を巻き起こしたとして有名である[1]。

筆者はこれまで、ニジンスキーが手がけた第三作目の振付作品《春の祭典［Le Sacre du printemps]》(1913) について、主にフランス国会図書館が公開しているデジタル・アーカイブを用いて、初演時のフランスの新聞・雑誌記事による、評価の分析を行ってきた[2]。これまで、ニジンスキー振付作品についての批評文を網羅的に検討した例は、管見の限りブラードの論文のみであると思われる（Bullard 1971）[3]。筆者はブラードの研究に対して十数件の評論を追加し、分析を試みたのであるが、この作品にはかなりの反響があったという事実が具体的に確認できたことに加え、その内容についても定量的に分析した結果を示すことができた。そしてその研究を通して、筆者はニジンスキーがなぜこのような振付を行ったのか、すなわち、ニジンスキーはどのような舞踊観を持っていたのかについて、関心を持つに至っている。

1.2 現在の研究計画

ニジンスキーの振付に関する考えについて調べてみると、興味深い点がある。ニジンスキーがその手記において、「舞踊の理論を作り上げた」（鈴木訳 1999, p.222）[4]と述べる点である。乗越が述べるように、舞踊において「テクニックの確立−つまり自らのスタイルを理論として大系化することは至難の業」であるとされる（乗越 2016）[5]。クラシック・バレエは、その形式が体系化し、発展してきた舞踊の一つであるが、ニジンスキーはクラシック・バレエの名手と言われながら、その伝統を打ち破り、新しい舞踊へ昇華するような探究を試みたことが示されるのである。

ニジンスキーが確立したという舞踊の理論とは何であったのか、ニジンスキーの舞踊観とは、どんなものであったのか。このテーマについては、近年、ニジンスキーの振付作品についての注目も高まり、ニジンスキーの手記も度々出版されているにも関わらず、世界的に見ても先行研究がほとんどない状態にある。そのため、筆者は博士論文にて、ニジンスキー自身の遺した手稿や言説、振付作品の分析を通して、彼の舞踊の理論、ひいては彼の舞踊観に迫り、それが舞踊史上にどのように位置付けられるのかについて、検討したいと考えている。

2. 本海外調査研究の必要性と目的

以上に述べた研究計画において、ニジンスキーの舞踊理論という問いに迫るには、彼が振付を手がけた 4 作品、《牧神の午後［L'Après-midi d'un Faune]》(1912）、《遊戯［Jeux]》(1913)、《春の祭典》(1913)、《ティル・オイレンシュピーゲル［Till Eulenspiegel]》(1916) それぞれに関する資料、並びにニジンスキー自身が遺した資料等を収集し、分析することが必要不可欠であった。

本海外調査研究では、博士論文の基盤となる一次資料の収集を、最大の目的とした。具体的には、以下に記す資料の閲覧と収集を行なうこととした。

（１） ニジンスキー本人に関するもの：手記の原典、手紙、電報、新聞・雑誌記事、写真等
（２） ニジンスキーの振付作品に関するもの：新聞・雑誌記事、写真、楽譜等
（３） ニジンスキーが活躍した、ディアギレフのバレエ・リュス［Les Ballets Russes de Sergei Dyaghilev 1909-1929］[6] に関するもの：初期（1909-1914 くらいまで）の公演プログラム、新聞・雑誌記事、写真等

なお、ニジンスキーやディアギレフのバレエ・リュス（以下、バレエ・リュス）に関する一次資料は、イギリスやフランス、アメリカをはじめ、世界各国に所蔵している機関があることを確認している。今回は、その中でも特に豊富にコレクションを所蔵していると思われる、アメリカの機関へ訪問することとした。資料はインターネットでの公開をしておらず、メモ書きや電報、勘定書といった細かな資料も含まれるため、現地に赴いて調査を行う必要があった。

3. 調査の内容と成果

3.1 ハーバード大学ホートン図書館における、ストラヴィンスキー＝ディアギレフ財団（パルメニア・エクストローム）のコレクションの閲覧（ボストン）

3.1.1 コレクションの概要

ストラヴィンスキー＝ディアギレフ財団は、バレエ史研究家で著述家であった、パルメニア・エクストローム［Parmenia Ekstrom 1908-1989］が 1950 年代後半に、ニューヨークで設立した財団である。この財団は、バレエ・リュスに関連する、膨大なコレクションを所蔵している。特に、舞踊手や音楽家、画家など、バレエ・リュスに関わった芸術家らについて、財団がまとめたリサーチ・ファイルは貴重である。

図 1. アメリカ合衆国の地図（調査に赴いたボストンとニューヨークは、東海岸北部に位置している）

今回は、ニジンスキー振付作品（全 4 作品）、及びそれに関わった芸術家らについてのリサーチ・ファイルを中心に、調査を行った。調査方法は、事前にコレクション内容から調査リストを作成しておき、現地にて閲覧申請をする方法をとった。また、資料はフラッシュ等の特殊な光を当てることは禁止であったが、手持ちによるカメラ撮影は許可された。

なお、ストラヴィンスキー＝ディアギレフ財団は元来、ニューヨーク・マンハッタン（エクストロームの自宅）に存在していたのであるが、彼女の死後、それらのコレクションはハーバード大学が引受け、大学内のシアター・コレクションにて保管を行っている。以下に、財団のまとめたリサーチ・ファイルの項目に従い、主な調査内容とその成果を記した。

3.1.2 Artists（詩人、画家等）について

(1)ジャン・コクトー[Jean Cocteau 1889-1963]、(2)ニコラス・レーリヒ[Nicholas Roerich 1874-1947］についての、リサーチ・ファイルを参照した。

(1)ジャン・コクトー：フランスの詩人・作家・デザイナーなど多くの顔を持ち、バレエ・リュスの活動にも深く関わっている。ニジンスキーとのつながりについて言えば、ステファヌ・マラルメ[Stéphane Mallarmé 1842-1898］の詩《半獣神の午後［L'Après-midi d'un Faune]》をニジンスキーに紹介し、バレエ《牧神の午後》の完成につながったという見方もある [7]。ホートン図書館における調査では、コクトー没後の 1989 年に開催された展覧会のチラシ、オークション・カタログの切抜き 47 件、コクトー直筆の手紙の写し 5 件、ディアギレフからコクトー宛の手紙 1 件、ドローイングの写し 6 件（オークション・カタログに掲載されていないものに限った）、コクトー自身の写真 1 件、新聞・雑誌記事 7 件（内コクトーが書いたと思われる記事 3 件）等を得ることができた。

(2)ニコラス・レーリヒ：ニジンスキー振付《春の祭典》等の台本、美術、衣装に携わったロシアの芸術家である。ロシアの古代文明や東洋神秘思想に造詣が深かったと言われている [8]。今回は、レーリヒの描いた絵画の写し 10 件、レーリヒの書いた「Realm of Light」の文章の写し、オークション・カタログ、エクストロームによるレーリヒ略歴についてのメモ等を収集した。

3.1.3 Composers（作曲家）について

(1)クロード・ドビュッシー[Claude Debussy 1862-1918]、(2)イゴール・ストラヴィンスキー[Igor Stravinsky 1882-1971]についての、リサーチ・ファイルを参照した。

(1)クロード・ドビュッシー：ニジンスキー振付《牧神の午後》、および《遊戯》に曲を提供している。調査では、オークション・カタログの写し 4 件（内 3 件が直筆の手紙、1 件が手書きのスコア）、本人が寄稿した雑誌記事の写し 2 件等を得た。

(2)イゴール・ストラヴィンスキー：ニジンスキー振付《春の祭典》等、バレエ・リュスの代表的な作品について、作曲を行った。本人の写真の写し 12 件、直筆の手紙の写し 3 件、新聞・雑誌記事 14 件（内本人の寄稿文は 5 件）等を複写することができた。

3.1.4 Conductors（指揮者）について

(1)ピエール・モントゥー[Pierre Monteux 1875-1964]についての、リサーチ・ファイルを参照した。ピエール・モントゥー：フランスの指揮者であるが、バレエ・リュスの初期に、首席指揮者として上演に携わっている。《春の祭典》における騒動の様子など、モントゥーのものと思われる証言は、よく引用される。今回は、本人の写真とイラストレーションを各 1 件、モントゥーに関する論考を 1 件、複写を行った。

3.1.5 Productions（作品）について

(1)《牧神の午後》、(2)《遊戯》、(3)《春の祭典》、(4)《ティル・オイレンシュピーゲル》についての、リサーチ・ファイルを参照した。

(1)《牧神の午後》については、写真家アドルフ・ドゥ・メイヤー[Adolf de Meyer] による写真 33 件を掲載した冊子、雑誌等に掲載された図版の写し等を得た。

(2)《遊戯》については、ドビュッシーによる手書きの楽譜と手紙が掲載された、オークション・カタログ、写真 2 件、挿絵 4 件等の複写を行なった。

(3)《春の祭典》に関しては、1913 年と 1914 年に発行されたロシアの新聞記事 5 件、ヴァランティーヌ・グロス [Valentine Gross] の手稿と、財団がタイプ化した書き起こし原稿、1930 年のマーサ・グラハムによる《春の祭典》のプログラム等を閲覧した。この中でも、特に《春の祭典》初演時のロシアでの記事は、まだ調査を行なっていなかったため、複写を得られたことは幸運であった（ただし、原本の印刷の状態があまり鮮明ではないこともあり、解読には時間がかかることが予想される）。また、グロスの手稿についても、早速分析に取り掛かりたいと考えている。

(4)《ティル・オイレンシュピーゲル》に関しては、挿絵の写しを数点と、オークション・カタログの閲覧・複写を行なった。

3.1.6 Diaghilev and his associates（ディアギレフと仲間たち）について

(1)セルゲイ・ディアギレフ[Sergei Diaghilev 1872-1929]、(2)ココ・シャネル[Coco Chanel 1883-1971]、(3)ミシア・セール[Misia Sert 1872-1950] 、(4)ガブリエル・アストリュク[Gabriel Astruc 1864-1938]、(5)ボリス・コフノ[Boris Kochno 1904-1990] についての、リサーチ・ファイルを参照した。

(1) セルゲイ・ディアギレフ：バレエ・リュスの興行師であった人物である。本調査では、ディアギレフについて 1970～80 年代に書かれた新聞・雑誌記事、ディアギレフの通称「黒い手帳」に関する論文、1929 年のディアギレフの死を知らせる新聞記事 7 件、直筆の手紙等が掲載された、オークション・カタログ等について、閲覧・複写を行なった。

(2)ココ・シャネル：服飾ブランドのシャネルのデザイナーとしても知られる女性であるが、(3)ミシア・セールとともに、バレエ・リュスのパトロンであった女性である。(2)シャネルについては、彼女がモデルとなった絵画の写し 2 件、新聞記事 2 件について、複写を行なった。(3)ミシアについては、ディアギレフとの手紙 3 件が掲載されたオークション・カタログを閲覧した。

(4)ガブリエル・アストリュク：西ヨーロッパにロシアのバレエやオペラを持ち込む興行師として、ディアギレフと組んで活動を行なったフランス人である。ディアギレフとの手紙が掲載された、オークション・カタログを閲覧した。

(5)ボリス・コフノ：ディアギレフの秘書的な役割をも担った、ロシアの詩人・台本作家である。エクストロームによる略歴のメモ、新聞・雑誌記事、素描等について、複写を行なった。

3.1.7 Performers-Diaghilev's company（ディアギレフのカンパニーのダンサー）について

(1)エンリコ・チェケッティ[Enrico Cecchetti 1850-1928]、(2)ミハイル・フォーキン[Michel Fokine 1880-1942]、(3)ブロニスラヴァ・ニジンスカ[Bronislava Nijinska 1891-1972]、(4)ヴァーツラフ・ニジンスキーについての、リサーチ・ファイルを参照した。

(1)エンリコ・チェケッティ：特にバレエ教師として、バレエ・リュスに携わった人物であることで知られる。彼の生い立ちや業績等をまとめた記事について、複写を行なった。

(2)ミハイル・フォーキン：バレエ・リュスで活躍したダンサーであり、振付家である。しばしば作品や舞踊観をニジンスキーと比較して語られることも多い。今回は、新聞・雑誌記事 5 件の複写を行なった。

(3)ブロニスラヴァ・ニジンスカ：ニジンスキーの妹であり、バレエ・リュスで活躍したダンサー・振付家である。1932 年の公演プログラムと関連記事、《結婚［Les Noces]》(1923) の直筆スケッチの写し、本人の写真、1986 年に開催された展覧会「La Nijinska: A Dancer's Legacy」(Cooper Hewitt Museum, 1986) のカタログ等を閲覧した。

(4)ニジンスキーについては、1913 年に発行されたとみられる本人の寄稿と、財団による英訳原稿、様々な年代の新聞記事（オークションにおける「手記」落札の記事も数件含む)、ニジンスキーの素描についてのオークション・カタログ等を閲覧した。

3.2 ニューヨーク公立図書館 リンカーン・センター内上演芸術資料館における、資料の収集と閲覧（ニューヨーク）

3.2.1 コレクションの概要

ニューヨーク公立図書館のジェローム・ロビンズ ダンス部門は、1944 年にニューヨーク公立図書館の独立した部門として設立された、世界最大規模のアーカイブである。この機関が所蔵する資料は、動画記録、オーディオテープ、プログラムファイル、原稿等、様々である。

この機関についても、事前にコレクション内容から調査リストを作成しておき、現地で配布されている申請用紙にて、資料請求を行うという方法をとった。また、資料はフラッシュ等を使用することは禁止であったが、手持ちによるカメラ撮影は許可された。また、マイクロフィルムについては、表示画面をデータで書き出せる機器と、旧式の映写機のような機器の 2 種類を使用した。

特に今回は、ダンス部門の中でもスペシャル・コレクションに分類される、数多くの貴重な資料について、閲覧・複写をすることができた。以下に、主な調査内容とその成果を記した。

3.2.2 「ニジンスキーの手記」原典の複写

「ニジンスキーの手記 (Diary, 1918-1919.)」[9] は、計 4 冊のノートから成る（なお文章はニジンスキーの直筆で、ロシア語にて綴られている)。そのノートの 1〜3 冊目までを、ニューヨーク公立図書館が所蔵しており、今回はマイクロフィルムにおける閲覧が叶った。なお、4 冊目のノートは、フランス国会図書館が所蔵しているとのことで、今後調査が必要である。

『完全版 ニジンスキーの手記』の解説で詳しく述べられているように、このニジンスキーの手記は、これまで度々翻訳され出版されてきた (鈴木訳 1999, pp.387-388) [10]。まずニジンスキー夫人である、ロモラ・ニジンスキーが、原典から 3 分の 1 ほど内容を削除したものを、1936 年に英語訳版にて出版している [11]。そして 1995 年に、省かれた部分を補完した手記の全編が仏語訳版にて出版 [12]、1999 年には邦訳版が出版されたという流れである [13]。

今回筆者が原典を閲覧しようと思ったのは、ニジンスキーが確立したと述べる「舞踊の理論」につながるヒントを得たいと思ったからである。これまで出版されてきた書籍には、「舞踊の理論」につながる具体的な内容についてはうかがい知ることができなかった。しかしながら原典を見てみると、文字の他に、図や楽譜のようなものが記されており、これらについて研究された例は管見の限りなさそうである。この資料については、複写をすることができたため、今後内容を検討していきたい。

3.2.3 ガブリエル・アストリュクが遺した資料の複写

バレエ・リュスの初期の公演に対する協力を行なった、フランス側の興行師ガブリエル・アストリュクが遺した資料について、マイクロフィルムでの閲覧が叶った。

ディアギレフをはじめとするバレエ・リュス関係者とやり取りを行なった電報や手紙、メモ、勘定書、プログラムの写し、新聞記事の切り抜きといった、計 1,300 点の資料が、2 本のマイクロフィルムに収められていた。資料の大部分は、1906〜1914 年のもので、年代別、宛先別に分類がなされていた。内容は、ディアギレフとのやり取りが最多であるが、ストラヴィンスキーやニジンスキーとの電報も見受けられた。これにより、初期のバレエ・リュスの活動の一端が見えてくることを期待している。あまりに点数が多く、時間の関係上、2 本目のマイクロフィルムの後半、新聞記事のスクラップ等の複写を断念せざるを得なかった。またの機会に複写を行いたいと考えている。

3.2.4 ニジンスキーと、その振付作品に関する写真・図版の複写

(1)ニジンスキー本人の写真、(2)ニジンスキー振付作品に関する写真について、複写を行なった。

(1)については、幼少期から壮年期までの、ニジンスキー本人の写真について、閲覧・複写を行なった。珍しいものとしては、壮年期のニジンスキーの写真をまとめた、革張りのスクラップ・ブックがあり、舞台から引退した後のニジンスキーの様子をうかがい知ることができた。

(2)ニジンスキー振付作品関連図版については、全 4 作品について、かなりの数の写真、および図版の閲覧・複写を行うことができた。しかしながら時間の関係上、今回閲覧が叶ったのは、本図書館が所蔵するコレクションの一部に留まることとなった。引き続き調査を行いたいと考えている。

3.2.5 その他の資料

(1)ストラヴィンスキーによる《春の祭典》のスケッチについて、閲覧・複写を行なった。これは本人の直筆（鉛筆書き）による、楽譜やメモ書きがなされている大判のスケッチブックである。ストラヴィンスキーは《春の祭典》のスコアについて、何度も修正を行っているのであるが、本スケッチは1911～1913年のものであることからも、主に1913年の初演に向けた制作のスケッチであったことがわかる。どのような推敲を経て作品が出来上がったのか、今後読み解いていきたい。

4. 今後の研究に向けて

以上のように、本調査は移動日を除いて計10日間という短期間で、2都市を巡るというものであったが、大変有意義な調査となった。

本調査は、「ニジンスキーとその振付作品に関する一次資料の収集」という目的で行ったものであったが、写真や電報、新聞・雑誌記事等の資料について、相当数の複写を得ることができ、目的は達成できたと考えている。特にニジンスキーの手記の原典を閲覧でき、複写も叶ったことは、彼の舞踊観を探る上で、非常に重要な資料となるであろう。しかしながら今回は時間の関係上、悔しくも調査を断念せざるを得なかった資料が、多く存在する。近い将来、今回訪れた機関への再訪を実現し、調査を継続していきたい。同時に、今回得られた資料を詳細に読み込み、分析することで、ニジンスキーの舞踊観について迫っていきたいと考えている。

本研究は、時代や地域によって少しずつ様子を変え、発展を続けているバレエという舞踊ジャンルにおいて、いわば「近代」のバレエの原点を探ろうとするものである。バレエは、20世紀初頭のバレエ・リュスの出現によって、新たな幕が開かれたと言っても過言ではない。ニジンスキーの舞踊観について考察することは、「近代」バレエの幕開けの時期に活躍した一人の芸術家が、舞踊をどのように見ていたのかを考察することと同義である。また、過去の舞踊作品を深く分析することは、日本をはじめ、世界的な規模で広がりを見せる、バレエの本質的な理解と発展に貢献できると思われる。その意味でも、本調査はグローバルな視点で舞踊学の推進に寄与する可能性があるという点で、国際的な女性リーダーの育成に関わるプログラムの一環としての調査となったのではないかと考えている。

本調査で得られた知見は、筆者の博士論文のおそらく第1章、第2章に関わるであろう。また、本調査の成果の一部を論文にまとめ、「ニジンスキーの舞踊観（仮）」という題目で、お茶の水女子大学人文科学論叢への投稿を予定している。また内容をさらに進展させ、来年度の舞踊学会にて口頭発表を行いたいと考えている。

注

1. ここで紹介するニジンスキーの概要については、以下の事典を参照した。
   Craine, D. & Mackrell, J. (2004) *Oxford Dictionary of Dance*, Oxford University Press.（鈴木晶監訳（2010）『オックスフォード バレエ・ダンス事典』平凡社, 354-355.）なお本報告書にて、人名や作品名等について記載のあるものは、この事典の表記に従った。
2. この論文は、バレエ《春の祭典》（1913）が初演されたフランスにおいて、当時どのような評価がなされたかについて考察したものである。拙稿（2016）『ニジンスキー《春の祭典》の受容とその評価』お茶の水女子大学修士論文
3. Bullard, T. (1971) *The first performance of Igor Stravinsky's Le sacre du printemps*, Eastman School of Music of the University of Rochester.
4. 鈴木晶訳（1999）『ニジンスキーの手記 完全版』新書館.
5. 乗越たかお（2016）「コンテンポラリーダンスに、テクニックはあるのか？」『ダンスマガジン 2016年4月号』新書館, 49.
6. ロシアのバレエを西ヨーロッパに紹介するために、ロシア人の興行師ディアギレフにより結成されたバレエ団。バレエ・リュスとは、フランス語でロシア・バレエを意味する。一流の美術家、音楽家、ダンサーらを集結させて作品制作を行い、一世を風靡するとともに、世界的なバレエ・ブームの火付け役となった。
7. Nectoux, J. (1989) *L'Après-midi d'un Faune: Mallarmé, Debussy, Nijinsky*, Conservateur au musée d'Orsay, Réunion des musées nationaux, 17.（柏倉康夫訳 オルセー美術館編（1994）「Ⅳ ニジンスキーの牧神」『牧神の午後　マラルメ・ドビュッシー・ニジンスキー』平凡社, 28.）
8. ニコラス・レーリヒの活動とその生涯については、以下の文献に詳しい。
   Decter, J. (1997) *Messenger of Beauty: The Life and Visionary Art of Nicholas Roerich*, Park Street Press.
   加藤九祚（1982）『ヒマラヤに魅せられたひと ニコライ・レーリヒの生涯』人文書院.
9. 内容を読んでみると、このニジンスキーの記したノートは、日記の形式をとっていないことが分かる。ニューヨーク公立図書館のアーカイブでは、このノートを"Diary, 1918-1919."として紹介しているが、邦訳にあたっては鈴木

訳『ニジンスキーの手記 完全版』の題目に倣い、本報告書においても「ニジンスキーの手記」と記した。
10. 鈴木訳，前掲 4.
11. まず 1936 年にアメリカにて、次いで 1937 年にイギリスにて出版された。それぞれの文献は、以下の通りである。
Nijinsky, V. (1936) *The Diary of Vaslav Nijinsky*, Ed. Nijinsky, R., Simon and Schuster.
Nijinsky, R. (1937) *Nijinsky*, Victor Gollancz Ltd.
12. Nijinsky, V. (1995) *Cahiers-Le sentiment,* traduit du russe par Dumais-Lvowski, C. et Pogojeva, G., Actes Sud.
13. 鈴木訳，前掲 4.

参考文献

国立新美術館, TBS テレビ編（2014）『魅惑のコスチューム：バレエ・リュス展』図録, TBS テレビ.
鈴木晶（1994）『踊る世紀』新書館.
— (1988)『ニジンスキー 神の道化』新書館.
藤野幸雄（1982）『春の祭典　ロシア・バレー団の人々』晶文社.
村田宏（2012）「「バレエ・リュス」とロシア・アヴァンギャルド演劇」『跡見学園女子大学文学部紀要』47, 43-59.
Buckle, R. (1971) *Nijinsky*, Simon & Schuster.
— (1979) *Diaghilev*, Simon & Schuster. (鈴木晶訳（1983）『ディアギレフ ロシアバレエ団とその時代』(上下), リブロポート.)
Cohen, S. ed. (2004) *International Encyclopedia of Dance*, Oxford University Press.
Eksteins, M. (1990) *Rites of Spring: The Great War and the Birth of the Modern Age*, Black Swan. (金利光訳 (1991)『春の祭典―第一次世界大戦とモダン・エイジの誕生』TBS ブリタニカ.
Garafola, L. (1998) *Diaghilev's Ballets Russes*, Oxford University Press.
Scheijen, S. (2010) *Diaghilev: A Life*, Profile Books. (鈴木晶訳（2012)『ディアギレフ　芸術に捧げた人生』みすず書房.)
Stravinsky, I. (1935) *Chroniques de ma vie*, denoël. (笠羽映子訳（2013)『私の人生の年代記 イゴール・ストラヴィンスキー自伝』未来社.)

さとう　まちこ／お茶の水女子大学大学院　人間文化創成科学研究科　比較社会文化学専攻

指導教員によるコメント

佐藤真知子さんは、バレエ史上最も偉大な芸術家の一人とされる、ヴァーツラフ・ニジンスキーに関する研究を行なっている。修士論文では、全 4 作品あるニジンスキー振付作品のうちの一つである《春の祭典》について、当時の評価と受容に着目した研究を行った。その研究で得た課題を踏まえて、博士論文にて、ニジンスキー自身の舞踊史上の位置づけを明らかにしようとするためには、振付家自身の活動、並びに作品に関わる一次資料の検討が必要不可欠である。

今回の資料収集を目的とする海外調査研究は、博士論文の基盤となる大変重要な調査であった。調査は、10 日間という短期間に、ボストンとニューヨークの 2 都市をまわるというものであった。この限られた時間の中で、ニジンスキーの手記の原典をはじめとする、多くの貴重な資料の収集をなし得たことは、博士論文の執筆に関して非常に有益な収穫であったと言えよう。さらにこの研究を進め、深化させることを期待している。

（お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科（人文科学系）・猪崎　弥生）

Theme of “ages of life” in decorative paintings inside town halls of Parisian arrondissements in the second half of the 19th century

Kaori HARADA

This study asks why the theme of “the ages of life” is found in the different decorative paintings inside the town halls of Parisian arrondissements created during the early French Third Republic. This research examined these variations of the traditional theme in the Western art history in the context of their creation and their reception.

Our research on primary sources at the Parisian Archives found many records that indicate the contemporary conditions surrounding each of these paintings including allegoric or realistic representations. The results will be essential for the analysis of these representations in our doctoral thesis and also contribute to the study on Symbolism in the 19th century art.

The significance of Raff’s music activities in the period of 1850s-1870s

Masako Kurawaki

I made a tour round Frankfurt, Weimar, Zurich and Munchen for the purpose of gathering materials relevant to Joachim Raff’s (1822-1882) music activities during the 1850s, 60s and 70s. The tour was also meant to trace the footsteps of composers who belonged to the Neudeuetsche Schule. Where does Raff stand in relation to Neudeuetsche Schule? What influence, if any, did he have on Neudeuetsche Schule? A close look at the research results may give clues and answers to these questions.

Document investigation on *KotoJyogakko* established in the Japan Colonial Period —Around the eastern part of Taiwan —

TAKIZAWA Kanae

The precedent study on *KotoJogakko* in the Japan Colonial Period has been conducted around big cities such as Taipei and Tainan. Therefore there are many parts which are not clarified about *KotoJogakko* established in the district. This research and investigation is the first approach to elucidate the actual situation of *KotoJogakko* established in the eastern part of Taiwan and is intended to investigate the documents kept by each school. The results provided by this research and investigation can be an important clue in pushing forward the study of *KotoJogakko* in the Japan Colonial Period.

Research on the Activity of G. V. Rosi before his years in Japan

Sayaka YAMADA

The purpose of this research was to gather materials on Giovanni Vittorio Rosi [1867-?] before his years at *Teikoku Gekijyou* in Japan.

Based on the materials collected in Milan and London, Rosi appeared in at least ten works in theatres in Italy, including *La Scala*, as well as those in other countries before he transferred to Variety Theatre in London.

The European theatre dancers of the time, as well as Rosi, worked beyond national borders, sometimes going as far as South America around the turn of the 20^{th} century.

From the materials collected in this trip, it is assumed that Rosi’s activities in Japan reflected various theatrical cultures of the time.

A study on the paradigm shift in the ecumenical movement of the 20th century

Eri Maemura

My previous study revealed the relationship between Paulo Freire and Christianity. Freire worked at the World Council of Churches (WCC) throughout the entire decade (1970-1980), which is in the period of the paradigm shift in the ecumenical movement of the 20th century. From 1st August 2016 to 1st October 2016 I visited WCC's archives to deepen my understanding of Freire's educational thought, focusing on this paradigm shift and Freire's works at WCC. The research at WCC's archives enabled me to have a new perspective that there was a significant educational movement in this period of the paradigm shift, and also enabled me to collect many documents for my further study.

A fieldwork for research in the diplomacy and Trade relationships between Japan and Germany in the Meiji era

Hiroe Matsui

The aim of my fieldwork lay in deepen and revise especially my current research by visiting archives, libraries, and universities in Berlin, Hamburg, and Kiel in Germany and collecting further historical materials. My purpose was collecting new information and sources for my doctoral theses and my post-doctoral research. During my research in Germany I have been able to realize my plans and I to collect also new sources. Based on this experience, I will develop my research by usage of still more historical materials both in Japan and German.

The position of nude paintings for women painters at the end of 19 century in France: Berthe Morisot, *Reclining Nude Shepherdess*

Yukako Kawaguchi

The aim of this study is to clarify the position of nude painting from the viewpoint of female painters at the end of the 19 century in France, focusing on Berthe Morisot's painting (1841-1895) Reclining Nude Shepherdess. I came to the conclusion that the situation of female painters differed from male painters at the end of the 19th century in France. Though a nude subject was indispensable for top-class painters, it was considered inappropriate for women to paint a sensual nude. This reflects an attitude where female painters tried to express nude paintings in the tradition of Western Art and male values.

Young Chinese's Gender Role Attitudes and the Current State of Work-life Balance

TIAN Yuan

The purpose of this survey was to investigate the relationship between the change of young Chinese's consciousness of gender roles & division of labor and the life events, and to understand the current state of their work-life balance. The questions of the interview revolved around the genesis of the consciousness of division of labor in the past, the current division of childcare, and the distribution of family and career in the future. We centered on married and educated young males and females, and conducted the survey in the cities of three different city-size hierarchies in China: Beijing, Jinan and Weifang.

Acquisition of materials on Vaslav Nijinsky and his productions

Machiko SATO

The aim of this short trip was the acquisition of materials on Nijinsky and his productions.

Vaslav Nijinsky [1889-1950] is a Russian dancer and choreographer in the 20th century, and he was known as a member of Diaghilev's Ballets Russes. He choreographed four ballets: *L'Après-midi d'un Faune* (1912), *Jeux* (1913), *Le Sacre du printemps* (1913) and *Till Eulenspiegel* (1916). His choreographies were criticized and evaluated as controversial works. However, his view on dance has not been researched yet. In order to investigate his view on dance, I collected materials on Nijinsky and his works industry.

I visited Houghton Library at Harvard University in Boston and Performing Arts Center of New York Public Library in New York. Based on these materials, I would like to clarify Nijinsky's theory of dance and his contribution to the development of choreography and ballet culture today.

書　　　名	文部科学省特別経費「グローバル女性リーダー育成 カリキュラムに基づく教育実践と新たな女性リーダー シップ論の発信」（平成 27 年度—平成 30 年度） 平成 28 年度「学生海外派遣」プログラム報告集
発　行　日	平成 29 年 3 月 31 日
編集・発行	国立大学法人 お茶の水女子大学 グローバルリーダーシップ研究所 〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1 ＴＥＬ　03-5978-5520 E-mail　info-leader@cc.ocha.ac.jp ＵＲＬ　http://www.cf.ocha.ac.jp/leader/
編 集 事 務	国立大学法人 お茶の水女子大学 グローバルリーダーシップ研究所 アカデミック・アシスタント 西澤 千典
編 集 協 力	国立大学法人 お茶の水女子大学 大学院 人間文化創成科学研究科 博士後期課程 1 年 大持 ほのか